

茨城県土浦市

# 東山団地遺跡

—食品加工工場建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—

1996

土浦市教育委員会  
土浦市遺跡調査会

茨城県土浦市 東山団地遺跡 正誤表

ページ	行 数	誤	正
1	第2章 遺跡の位置と環境 2行目	樹支状台地の	樹枝状台地の
39	第6章 調査の成果 12行目	彈圧	押圧
	21行目	4号住居跡出土の磨製	4号住居跡出土の磨製石鏃 は茨城県内での～
43	引用・参考文献 13行目	『木田余台(特)』	『木田余台I』
	16行目	『武田(旁)』	『武田V』
	26行目	『原田北遺跡(特) 原田西遺跡』	『原田北遺跡I 原田西遺跡』
	27行目	『原田北遺跡(監) 西原遺跡』	『原田北遺跡II 西原遺跡』

茨城県土浦市

# 東山団地遺跡

—食品加工工場建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—

1996

土浦市教育委員会  
土浦市遺跡調査会

## 序

土浦市は霞ヶ浦や桜川の水に恵まれ、太古から人々が生活するのに適したところでありました。そのため、市内には貝塚、古墳、集落跡など数多くの遺跡が存在しております。これらの遺跡は当時の様子を知る手掛かりとなることはもちろんのこと、現代の私達が豊かに生活することのできる先人の業績でもあります。

このような貴重な文化遺産を保護し、後世に伝えることは私達の大切な任務であり、郷土の発展のためにも重要なことと思われます。

このたびの調査は、株式会社ココスジャパンの食品加工工場建設用地に、周知の遺跡である東山団地遺跡が含まれることからその記録保存を目的として行われたものであります。

遺跡内からは、市内でも数少ない弥生時代の集落跡が確認され、また茨城県内でも出土例の少ない古墳時代の鍛冶工房跡などが発見されております。

この調査によって、板谷地区の古代文化の究明にいささかなりとも役立てていただければ幸甚であります。

最後になりましたが、調査から報告書の発行にあたり、株式会社ココスジャパンをはじめ、関係者の皆様方のご協力とご支援に対し、心から厚く御礼を申し上げます。

平成7年7月

土浦市教育委員会

教育長 青木利次

## 例　　言

1. 本書は、茨城県土浦市板谷七丁目626-19他に所在する東山団地遺跡（茨城県遺跡番号5309　土浦市遺跡番号C-24）の発掘調査報告書である。
2. 調査は、株式会社ココス・ジャパン食品加工工場建設に伴う事前調査として実施した。
3. 調査は、土浦市教育委員会の依頼を受けて、土浦市遺跡調査会が山武考古学研究所の協力を得て行った。
4. 調査は、福山俊彰が担当し、平成6年10月20日から同年12月21日まで実施した。
5. 調査実施面積は、4,500m<sup>2</sup>である。
6. 本書の執筆・編集及び資料整理は、土浦市教育委員会の指導のもとに福山が担当した。
7. 本書の作成及び資料整理には、田中文彩・藤井陽子・藤曲ひろ子の協力を得た。
8. 調査に係る図面・写真・遺物等の資料は、一括して土浦市教育委員会が保管している。
9. 発掘調査から本書の刊行に至るまで、下記の諸氏・諸機関に御指導・御協力を賜った。記して感謝の意を表する。（敬称略）

穴澤義功 安藤杜夫 斎藤弘道 鈴木正博 右島和夫 (株)臼田設計 (株)ココスジャパン (有)新成田総合社

10. 発掘調査参加者は下記の通りである。

大竹 信子 川俣 茂子 北谷 直子 木村 時政 弦間真知子 坂本みつい 佐藤 早苗  
佐藤真一郎 渋谷 きみ 渋谷 竹二 鈴木 秀雄 高野 文江 田畠 保子 富島 利治  
富島 はつ 細野 重雄 松延貞次郎 米内 晴美

11. 平成6年度の土浦市遺跡調査会組織は下記の通りである。

会長	須田 直之	土浦市文化財保護審議会会长
副会長	青木 利次	土浦市教育委員会教育長
理事	大塚 博	土浦市文化財保護審議会委員
理事	廣田 宣治	土浦市参事兼企画課長
理事	野口 幹夫	土浦市土地区画整理課長
理事	雨貝 宏	土浦市都市計画課参事兼建築指導課長
理事	山田 和也	土浦市都市計画課長
理事	内海崎保生	土浦市耕地課長
理事	大塚 重治	土浦市土木課長
理事	平岡 和夫	山武考古学研究所所長
監事	矢口 寛	土浦市教育委員会教育次長
監事	飯田 章二	土浦市監査事務局長
幹事長	宮本 昭	土浦市教育委員会文化課長
幹事	小貫 俊男	土浦市教育委員会文化課主査兼文化財係長
幹事	塙谷 修	土浦市教育委員会文化課主幹
幹事	石川 功	土浦市教育委員会文化課主幹
幹事	黒澤 春彦	土浦市教育委員会文化課主事
幹事	中澤 達也	土浦市教育委員会文化課主事
幹事	関口 満	土浦市教育委員会文化課主事
幹事	橋場 君男	土浦市教育委員会文化課臨時職員
主任調査員	福山 俊彰	山武考古学研究所調査研究員

## 凡 例

1. 第1図は国土地理院発行5万分の1『土浦』『玉造』を使用した。  
第2図は国土地理院発行2万5千分の1『常陸藤沢』を使用した。  
第3図は土浦市役所発行2千5百分の1『土浦都市計画図17』を使用した。
2. 遺構実測図中の方位は座標北を示している。
3. 基本堆積土層図及び遺構土層図・断面図に示した数値は標高を示している。
4. 住居跡の規模は基本的に床面中軸線上で計測し、台形を呈するものは更に最小値と最大値を計測した。  
壁高は床面から検出面までの最大高である。
5. 遺構実測図中の破線表記は推定部分を示し、焼土の破線表記は分布範囲を示す。
6. 石器実測図中の矢印表記は使用痕範囲を示す。
7. 本書の挿図縮尺は下記の通りである。

基本堆積土層図－1/40

遺構配置図－1/600

住居跡・土坑・井戸跡－1/60

1号住居跡土器分布図・鍛冶関連遺物分布図－1/80

1号住居跡鍛冶施設詳細図－1/30

貯蔵穴実測図－1/30

土器実測図・拓図－1/3

石器・石製品実測図－1/3

羽口実測図－1/3

鉄滓実測図－1/3

小玉実測図－1/1

石鏃・剥片石器実測図－2/3

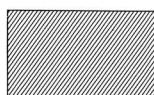
1号住居跡方眼抽出図－1/120

8. 遺物番号は本文・挿図・表・写真番号ともに一致している。
9. 遺物写真図版の縮尺は実測図と同縮尺とし、写真図版のみ掲載の鍛造剥片・粒状滓は1/1とした。
10. 本書の挿図に使用した記号・スクリーントーンは下記の意味を表す。

●－土器・羽口

■－石・石器

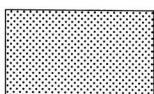
▲－鉄滓



－地山



－焼土・鉄滓付着



－赤彩・被熱痕・鍛造剥片集中



－繊維混入

11. 欧文要約の用語は『日本考古学用語英訳辞典〈稿本〉』(山本忠尚・松井章 1989 奈良国立文化財研究所)に準じた。
12. 出土遺物の注記方法は下記の略号を用いた。

東山団地遺跡－I H 住居跡－S I グリッド－G カマド－カ

# 目 次

序

例言

凡例

## 本文目次

第1章 調査に至る経緯	1
第2章 遺跡の位置と環境	1
第3章 調査の方法と経過	3
第1節 調査の方法	3
第2節 調査の経過	3
第4章 遺跡の土層	5
第5章 検出された遺構と遺物	7
第1節 住居跡	9
第2節 土坑	36
第3節 井戸跡	36
第4節 遺構外出土遺物	36
第6章 調査の成果	39
欧文	
写真図版	
抄録	

## 挿図目次

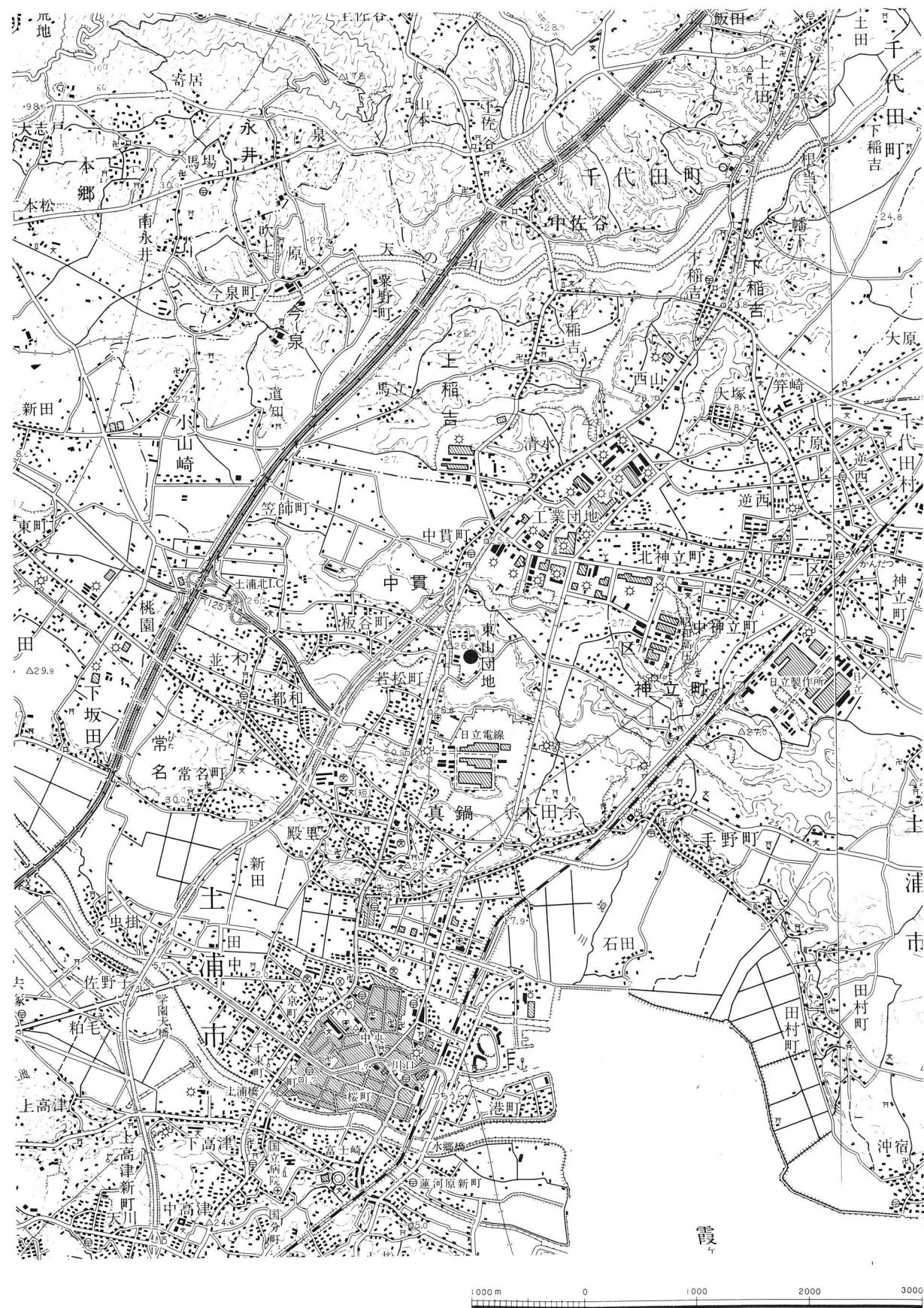
第1図 東山団地遺跡位置図	序	第18図 3号住居跡(1)	22
第2図 東山団地遺跡と周辺の遺跡	序	第19図 3号住居跡(2)・出土遺物	23
第3図 遺跡周辺地形図	4	第20図 4号住居跡	24
第4図 基本堆積土層図	5	第21図 4号住居跡出土遺物	25
第5図 遺構配置図	6	第22図 5号住居跡	26
第6図 1号住居跡遺物分布図	7	第23図 5号住居跡出土遺物	28
第7図 1号住居跡土器分布図	8	第24図 6号住居跡・出土遺物	29
第8図 1号住居跡鍛冶関連遺物分布図	8	第25図 7号住居跡	30
第9図 1号住居跡(1)	10	第26図 7号住居跡出土遺物	31
第10図 1号住居跡(2)・カマド	11	第27図 8号住居跡(1)	32
第11図 1号住居跡鍛冶炉	12	第28図 8号住居跡(2)	33
第12図 1号住居跡出土遺物(1)	13	第29図 8号住居跡出土遺物(1)	34
第13図 1号住居跡出土遺物(2)	14	第30図 8号住居跡出土遺物(2)	35
第14図 1号住居跡出土遺物(3)	15	第31図 土坑・井戸跡	37
第15図 1号住居跡出土遺物(4)	16	第32図 遺構外出土遺物	38
第16図 1号住居跡出土遺物(5)	17	第33図 1号住居跡方眼抽出図(1)	40
第17図 2号住居跡・出土遺物	20	第34図 1号住居跡方眼抽出図(2)	41

## 表 目 次

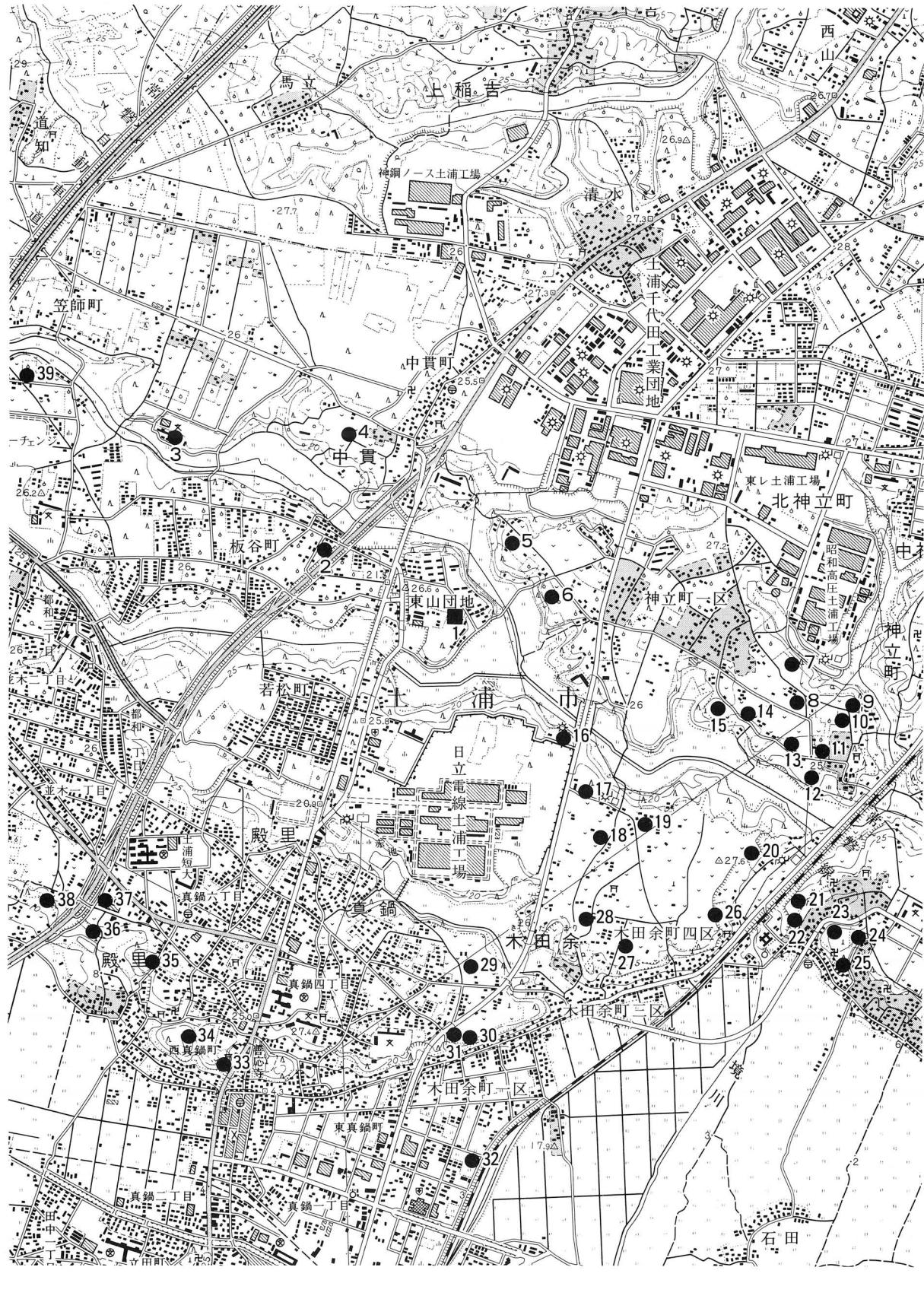
表-1 周辺遺跡一覧表	2	表-4 1号住居跡出土遺物観察表(3)	19
表-2 1号住居跡出土遺物観察表(1)	12	表-5 2号住居跡出土遺物観察表	21
表-3 1号住居跡出土遺物観察表(2)	18	表-6 3号住居跡出土遺物観察表	21

## 図 版 目 次

図版1-1 1号住居跡遺物出土全景	-4 同 炉確認状況
-2 同 鍛冶施設全景	-5 同 貯蔵穴土層状況
図版2-1 1号住居跡鍛冶施設土層状況	-6 同 貯蔵穴
-2 同 鍛冶施設全景	-7 同 出土遺物
-3 同 鍛冶炉近景	図版11-1 4号住居跡遺物出土全景
-4 同 遺物出土状況	-2 同 遺物出土近景
-5 同 羽口出土近景	-3 同 磨製石鏃出土近景
-6 同 遺物出土状況	-4 同 炉遺物出土状況
-7 同 砥石出土近景	-5 同 出土遺物
-8 同 鉄滓出土近景	図版12-1 5号住居跡遺物出土全景
図版3-1 1号住居跡P5・溝近景	-2 同 遺物出土近景
-2 同 遺物出土近景	-3 同 遺物出土近景
-3 同 貯蔵穴遺物出土状況	-4 同 出土遺物
-4 同 カマド近景	図版13-1 6号住居跡全景・出土遺物
-5 同 完掘全景	-2 7号住居跡遺物出土全景
図版4 1号住居跡出土遺物(1)	図版14-1 7号住居跡遺物出土近景
図版5 1号住居跡出土遺物(2)	-2 同 遺物出土近景
図版6 1号住居跡出土遺物(3)	-3 同 出土遺物
図版7 1号住居跡出土遺物(4)	図版15-1 8号住居跡遺物出土全景
図版8-1 1号住居跡出土鍛造剥片	-2 同 土層状況
-2 同 粒状滓	-3 同 土製勾玉出土状況
図版9-1 2号住居跡土層状況	-4 同 遺物出土近景
-2 同 遺物出土全景	-5 同 遺物出土近景
-3 同 遺物出土近景	図版16 8号住居跡出土遺物
-4 同 遺物出土近景	図版17-1 1号土坑
-5 同 出土遺物	-2 2号土坑
図版10-1 3号住居跡土層状況	-3 1号井戸跡
-2 同 遺物出土全景	-4 基本堆積土層
-3 同 遺物出土近景	-5 遺構外出土遺物



第1図 東山岡地遺跡位置図



(国土地理院発行 1/25,000 に加筆)

第2図 東山団地遺跡と周辺の遺跡

## 第1章 調査に至る経緯

平成5年9月28日に株式会社ココスジャパンより、土浦市開発行為指導要綱に基づく事前協議申請書が提出された。その内容は、約15,273m<sup>2</sup>の土地において食品加工工場の建設を行うという趣旨のものであった。このことを受け土浦市教育委員会では、遺跡台帳との照合及び現地踏査を実施した。今回の事前協議申請地は、南側の部分が「周知の遺跡」である東山団地遺跡にあたり、現地踏査の結果は申請地内南側の栗林内より弥生土器片が数片まとまって表採された。その他の部分については休耕地及び茶畠となっており表採されなかった。土浦市教育委員会による1981年の分布調査においても、遺跡と思われる範囲の東半分では遺物等を確認することができず、西側の栗林内でも遺物の採集は困難であったよう、同遺跡の不明瞭さが指摘されていた。

このため土浦市教育委員会では、東山団地遺跡の範囲確認及び内容把握のための確認調査を実施したい旨を事業者宛回答した。平成6年6月13日に事業主及び地主の協力を得て、申請地全体に確認調査用トレーナー12本を設定し、土浦市教育委員会埋蔵文化財担当者立ち会いのもとに、重機で合計530m<sup>2</sup>の表土排除を実施した。遺構確認は、地表面から約30cm掘り下げた関東ローム層上面で行った。

この結果、申請地の中央部分から南側にわたり住居跡等が確認された。住居跡は全部で7軒確認され、覆土は黒色で、遺物の出土量は少ない。出土した遺物のほとんどは弥生土器で、その他は若干の縄文土器とであった。今回の確認調査により、当初の東山団地遺跡の想定範囲よりは北方に広がるものとして把えられることができた。

平成6年6月20日付けで土浦市教育委員会では、確認調査の状況をまとめ事業主宛「申請地で現状変更を行う場合は、埋蔵文化財の発掘調査が必要となる」旨を報告した。

この後、事業主と土浦市教育委員会との間で、埋蔵文化財の取扱についての協議を重ねた。その結果、申請地全体の現状保存は困難であることから、埋蔵文化財の記録保存としての発掘調査を実施することで合意した。発掘調査にあたっては、申請地内北側等の確認調査において遺物・遺構等が確認されなかつた部分は本調査の対象から外し、同地内南・東縁の部分約2,200m<sup>2</sup>についても事業者側で緑地帯として活用するため本調査の対象から除外した。この申請地内現状保存地区については事業者、土浦市教育委員会との間で協定書を取りかわした。

発掘調査にあたっては、土浦市教育委員会が土浦市遺跡調査会に依頼し、緊急な開発事業のため、山武考古学研究所の協力のもとに実施するはこびとなった。

(土浦市教育委員会 関口 満)

## 第2章 遺跡の位置と環境

本遺跡は常磐自動車道土浦北インターチェンジより東南東に約2.5kmの地点、筑波山塊から南東方向に延びる新治台地上に位置し、霞ヶ浦に流れ込む小河川によって開析された樹枝状台地の先端部に立地する。遺跡地の標高は約26m、周辺低地に営まれる水田面との比高は約15mを測る。調査区の現況は栗林及び畑地であるが、周辺は南側の針葉樹林を残して住宅地及び工場用地に変貌している。

本遺跡の所在する土浦市は茨城県南部のほぼ中央に位置し、県南部の商・工業の中心地として桜川が霞ヶ浦に流れ込む河口付近に市街地が形成されている。土浦市の位置する霞ヶ浦沿岸地方は旧石器時代から近世にわたる多数の遺跡が所在し、東京湾周辺と並んで多数の貝塚が存在する地域である。桜川周辺でも20ヶ所近い貝塚が確認されており、特に、国指定史跡上高津貝塚は縄文時代後・晩期の馬蹄形貝塚としてその存在

が早くから知られ、史跡整備に伴う発掘調査で豊富な資料が検出されている。市内では貝塚以外にも縄文時代の遺跡が多数あり、縄文土器包蔵地は 150ヶ所以上周知されている。中でも中期の遺跡は多く、最近の調査事例としては本遺跡の南東約 1.5km に位置する木田余台遺跡群(17・20・26・27・28)の東台遺跡(26)、御冥遺跡(27)、糀買場遺跡(28)があり、いずれも中期中葉～後半の集落・土坑群等が検出され、該期の豊富な遺物が出土している。尚、御冥遺跡の出土遺物には完形の硬玉製大珠が含まれている。

弥生時代の遺跡では、永国遺跡や前述の木田余台遺跡群の宝積遺跡(20)、東台遺跡(26)から検出された集落が目立つ程度であったが、近年、市の北部天の川沿いに位置する原田西・原田北・原出口・西原遺跡の発掘調査が茨城県教育財団によって実施され、後期後半の大集落が検出されている。天の川の下流約 1 km には当該期の土器「上稻吉式」の標識遺跡である千代田町上稻吉西原遺跡が存在しており、流域に多数の集落が存在したことを窺わせている。

古墳・歴史時代の遺跡は、集落・包蔵地・古墳等多数の遺跡が確認されている。本遺跡の周辺でも板谷遺跡(2)、八坂前遺跡(29)、八幡坂下遺跡(34)等が周知され、南西約 2 km に位置する八幡下遺跡(38)では古墳～平安時代の住居跡12軒が検出され、円面鏡の破片等が出土している。又、市街地の北東に位置し、奈良・平安時代の大集落を主体とする田村・沖宿遺跡群からは、古墳時代前期の玉作り工房跡・鍛冶工房跡、平安時代初期の寺院跡等が検出され、注目されている。

表一 周辺遺跡一覧表

番号	遺跡名	所在地	県番号	市番号	番号	遺跡名	所在地	県番号	市番号
1	東山団地遺跡	板谷七丁目他	5309	C-24	20	宝積遺跡	木田余町四区字宝積	5299	C-14
2	板谷遺跡	板谷町	5310	C-25	21	手野城址	手野町大字手野字立		D-140
3	西山遺跡	中貫町字西山	5312	C-27	22	立遺跡	手野町大字手野字立	5341	D-3
4	西後遺跡	中貫町字西後	5311	C-26	23	后塚古墳	手野町大字手野字后塚	1797	D-2
5	尻冷遺跡	神立町字尻冷	5308	C-23	24	姫塚遺跡	手野町字姫塚	5352	D-14
6	前山遺跡	神立町字前山	5307	C-22	25	王塚古墳	手野町大字手野字大塚	1798	D-1
7	松山遺跡	神立町一区字松山	5291	C-6	26	東台遺跡・古墳群	木田余町四区	2827	
8	八幡遺跡	神立町一区字天神平	5292	C-7	27	御冥遺跡	木田余町字御冥	5303	C-18
9	青木遺跡	神立町一区字青木	5290	C-5	28	糀買場遺跡	木田余町字糀買場	5304	C-19
10	天神平遺跡	神立町一区字天神平	5293	C-8	29	八坂前遺跡	木田余町字八坂前	5305	C-20
11	坪内遺跡	神立町一区字坪ノ内	5294	C-9	30	浅間塚古墳	木田余町字浅間台	5306	C-21
12	花輪遺跡	神立町字花輪	5295	C-10	31	浅間塚西遺跡	木田余町字浅間塚		C-70
13	蟹久保遺跡	神立町字蟹久保	5296	C-11	32	木田余城址	木田余町	3996	
14	中道遺跡	神立町一区字中道	5297	C-12	33	真鍋愛宕神社古墳	大字西真鍋町		C-75
15	前神田遺跡	神立町一区	5298	C-13	34	八幡坂下遺跡	常名町字常名	5315	C-31
16	天王前遺跡	手野町字天王前	5362	D-24	35	殿里遺跡	殿里町	2824	C-29
17	一丁目台東遺跡	木田余町一丁目台		C-68	36	殿里古墳	殿里町字八幡台	1804	
18	宮崎遺跡	木田余町字宮崎	5301	C-16	37	八幡台遺跡	殿里町	5314	C-30
19	宮脇遺跡	木田余町字宮脇	5300	C-15	38	八幡下遺跡	常名町字八幡下		C-74
					39	中都遺跡	中都町	5330	C-52

# 第3章 調査の方法と経過

## 第1節 調査の方法

本遺跡の調査は確認調査によって得られた成果に基づき全面調査を実施した。調査区の座標は公共座標を基準に20m×20mの正方形大グリッドのメッシュを設定し、更に4m×4mの小グリッドを設定して調査区の全域をカバーした。大グリッドの座標杭には北から南にA・B・C…、西から東に1・2・3…と仮称を付し、各西隅の杭仮称をグリッド呼称として使用した。小グリッドは北西隅を01～北東隅05～南東隅25の仮称を付した。

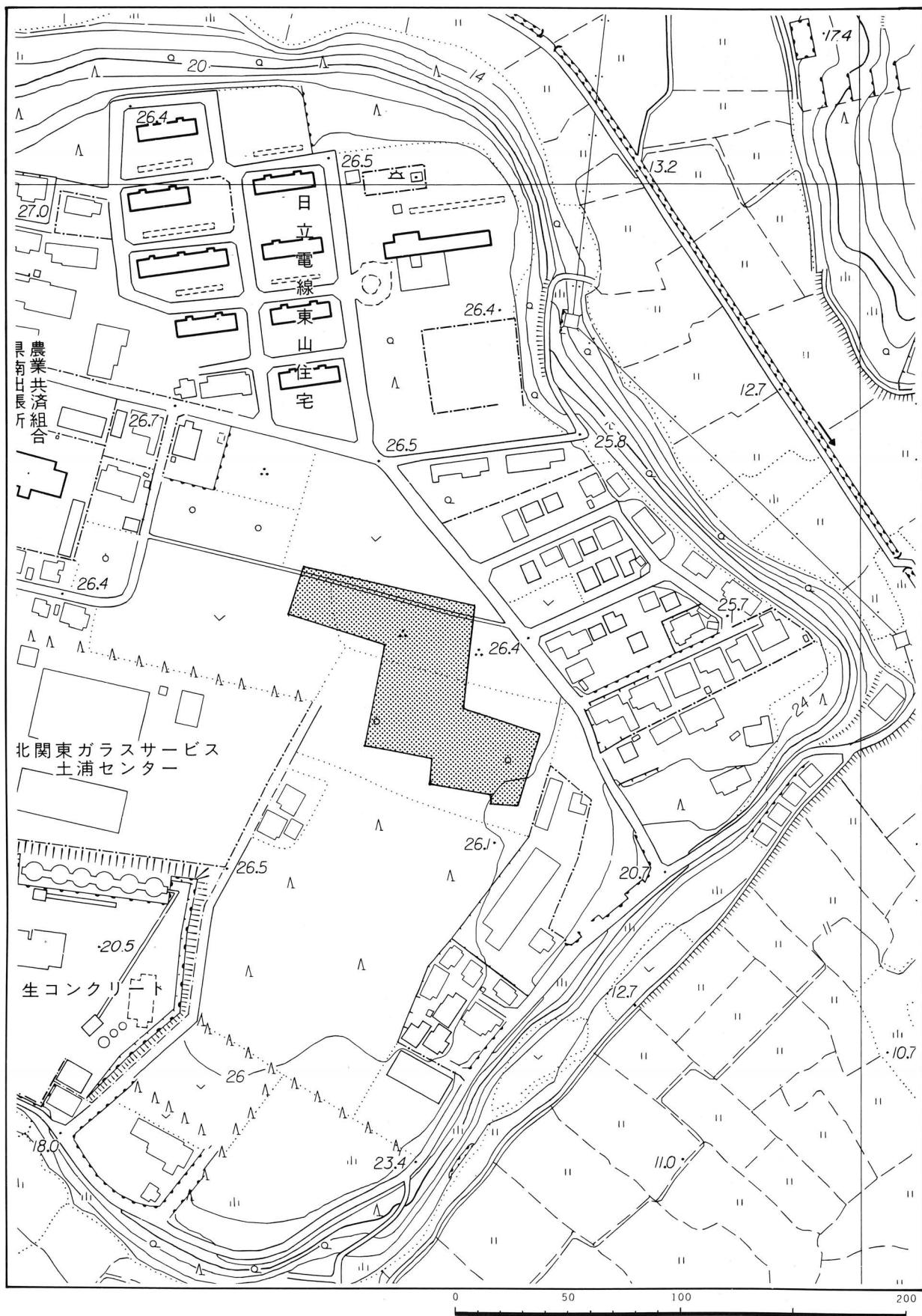
各遺構の調査は、住居跡には土層観察用ベルトを設定して掘り下げを行い、土坑は二分割での掘り下げを行った。遺構内出土遺物は原則として出土地点・高さを記入して個別に取り上げを行い、遺構外出土遺物については、小グリッドごとに一括して取り上げを行った。尚、鍛造剥片抽出の為、鍛冶工房跡の床面直上土を小グリッドを基準とした1mメッシュで取り上げ、床面土は25cmメッシュでの取り上げを行った。鍛冶施設覆土は上・中・下層での取り上げを行った。

遺構・遺物の平面実測は水糸方眼地張り測量と平板測量で行い、土層断面・遺構断面の実測は水平にセッショントした水糸を基準として実測を行った。縮尺は20分の1を基本とし、必要に応じて10分の1の縮尺で微細図を作成した。遺跡全体図は200分の1の縮尺で作成した。写真撮影は3台のカメラ（白黒プローニー6×7、白黒35mm、カラースライド35mm）を使用し、調査の各段階での記録を行った。

旧石器時代試掘調査は2m×2mのテストピットを調査区南側に約4%設定して掘り下げを行い、合わせて基本堆積土層の観察を行った。

## 第2節 調査の経過

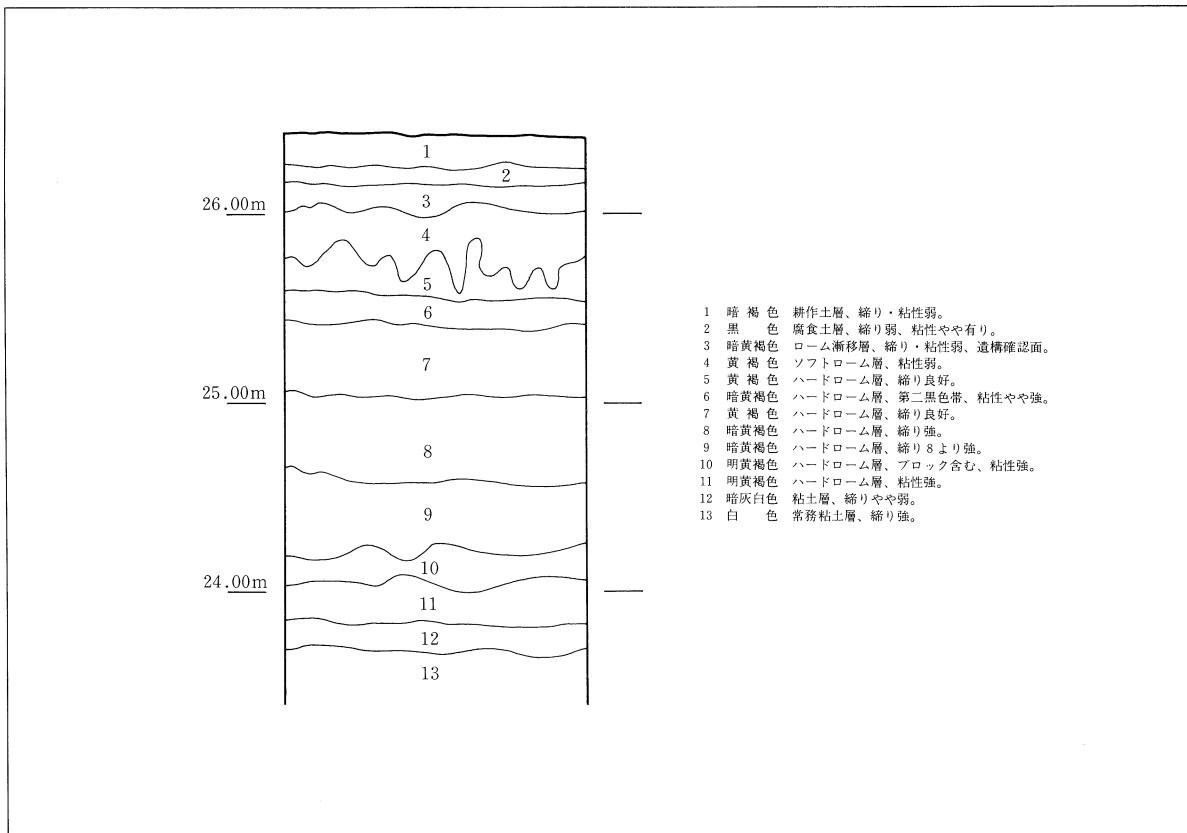
- 10月中旬 20日より調査を開始、発掘準備・打ち合わせ・遺構検出作業を行う。
- 下旬 21日～28日、遺構検出作業、黒色土掘り下げを中心に調査を行う。29日・31日、調査区南端に位置するSI-8部分の拡張作業を行う。31日、遺構確認状況図を作成する。
- 11月上旬 1日、住居跡の掘り下げを調査区南側(SI-6～8)より開始する。4日、調査区南側の攪乱・落ち込みの掘り下げを開始する。5日、SI-6～8の土層セクション図を作成し、セクションベルト写真撮影の後に除去を行う。7日・8日、SI-6～8の実測、写真撮影、完掘作業を行う。9日・10日、SI-4・5の掘り下げを行う。
- 中旬 11日、SI-1～3の掘り下げを開始する。12日～19日、SI-1～3の掘り下げ・実測を継続。17日、SI-4・5の平面図を作成する。18日、SI-6～8の床下調査を行う。19日、SI-1のセクションベルトを除去し、遺物出土状況の撮影を行う。
- 下旬 21日・22日、SI-2～5の実測、写真撮影、遺物上げ、完掘作業を行う。24日、調査区中央部の攪乱・落ち込みの掘り下げを行い、旧石器時代調査を調査区南側より開始する。25日、SI-1の遺物平面図の作成を開始する。28日・29日、井戸跡・土坑の掘り下げを行う。
- 12月上旬 1日、SI-1の床面直上土の取り上げを開始する。2日、SI-1の貯蔵穴・カマド・鍛冶炉・溝の掘り下げを開始する。7日、SI-1の床面土の取り上げを開始する。
- 中旬 12日、SI-7付近の旧石器時代確認掘り下げを開始する。14日、SI-1の柱穴・ピットの掘り下げを行う。15日・16日、現地説明会準備・全体清掃を行う。17日、午前10時より12時まで現地説明会を実施する。(来跡者約80名) 19日、終了全景写真の撮影を行う。
- 下旬 20日、井戸・土坑等危険箇所の埋め戻しを行う。21日、機材搬出を行い、調査を終了する。



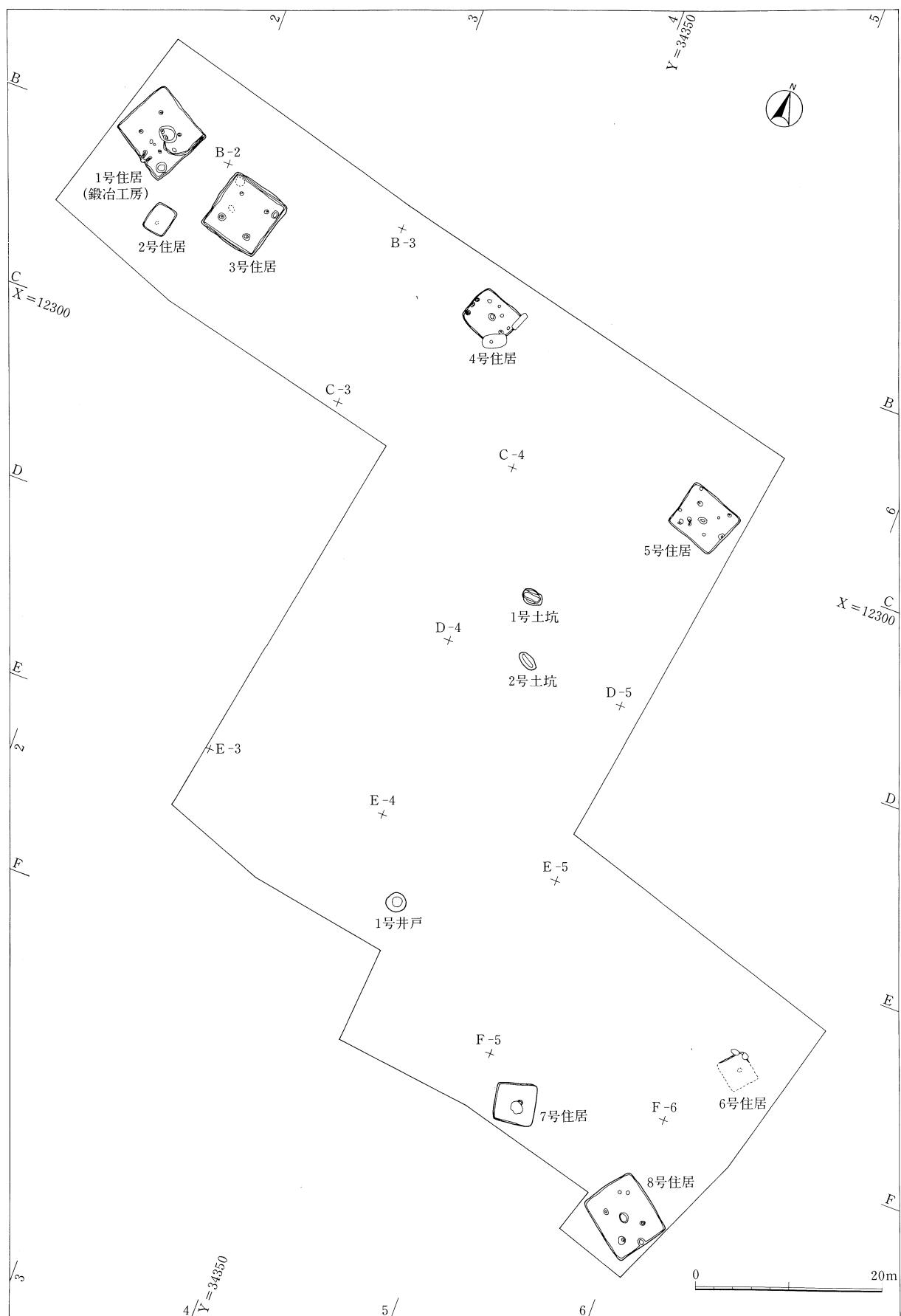
第3図 遺跡周辺地形図

## 第4章 遺跡の土層

調査区内の層序については、基本堆積土層試掘坑2ヶ所及び旧石器時代テストピットを利用して観察を行った。第3図は調査区北側で作図した基本堆積土層図である。第1層は暗褐色を呈する耕作土、第2層は黒色の腐食土層、第3層は暗黄褐色のローム漸移層。第4層がソフトローム層となり、第5層以下にハードローム層が堆積する。ソフトローム層とハードローム層との境は不明瞭で、ソフトローム化が第6層まで進行する場所も見受けられた。第5層はAT含有層に相当する黄褐色のハードローム層。第6層は立川ローム第2黑色帯と考えられる暗黄褐色のハードローム層。第7層は黄褐色ハードローム層。第8層は立川ロームと武蔵野ロームの境となる層と考えられる。第9層は暗黄褐色を呈し締まり・粘性が強く全体に均質である。第10層・第11層は明黄色を呈し固く締まっている。第10層はブロック状を呈し、第11層は均質である。第12層は暗灰白色の粘土層で締まりがやや弱い。武蔵野ローム層と下末吉ローム層の境となる層と考えられる。第13層は白色を呈する粘土層で締まりが非常に強い。いわゆる常総粘土層・武蔵野ローム層上部である。本遺跡の立地する新治台地は常総粘土層の下に河成層の龍ヶ崎砂礫層、その下に海成層の成田層が基盤として存在することが確認されている。尚、遺構の確認面は第3層上面もしくは第4層上面であった。



第4図 基本堆積土層図

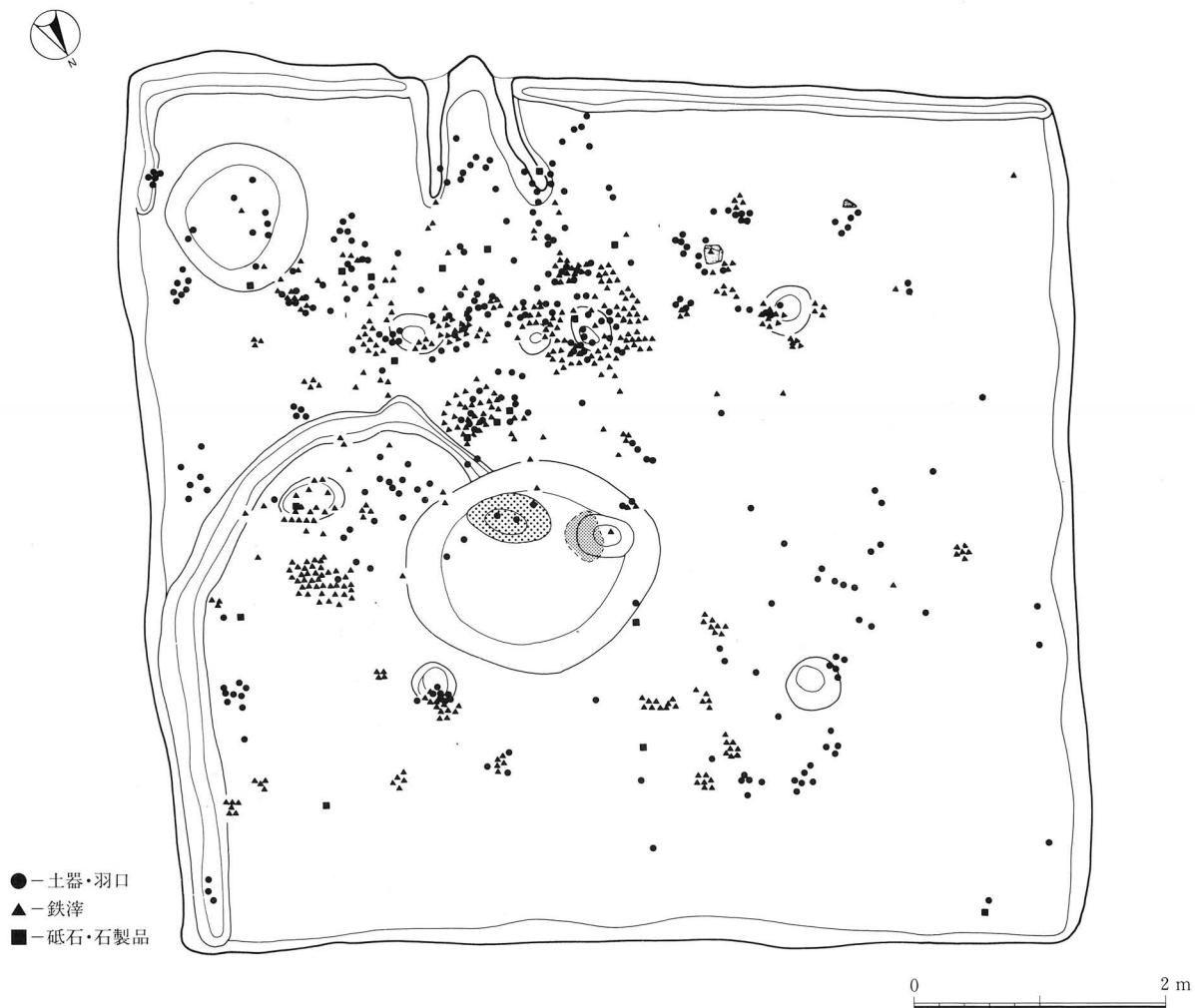


第5図 遺構配置図

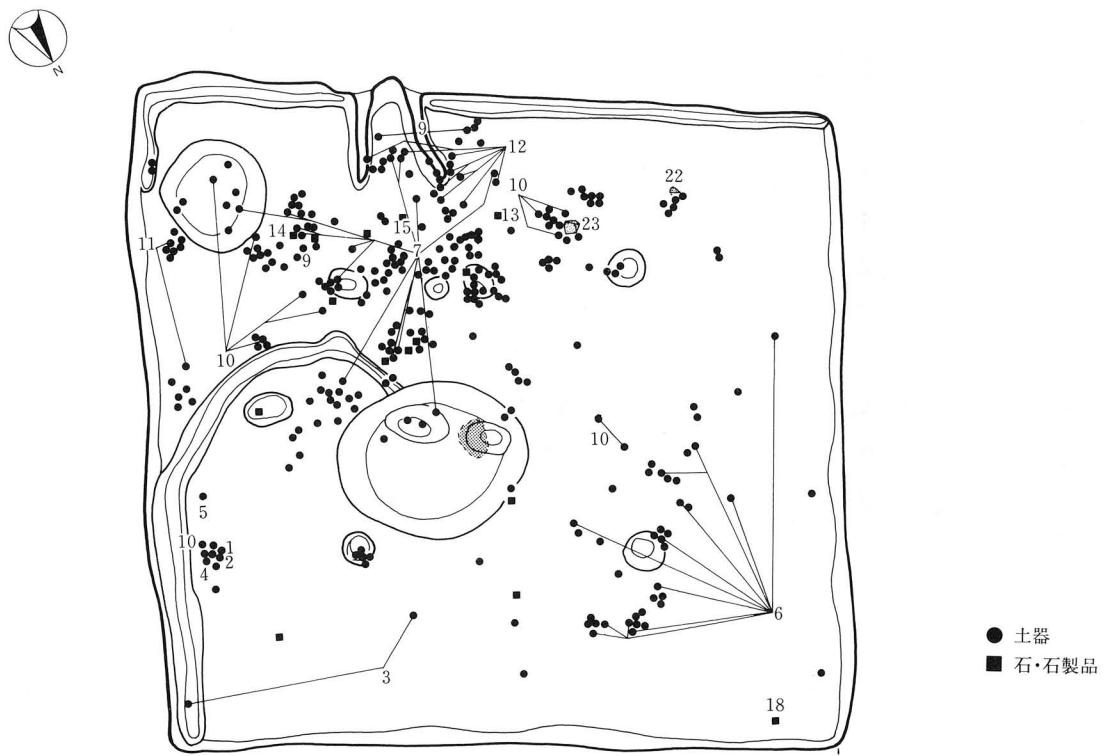
## 第5章 検出された遺構と遺物

本遺跡の調査の結果、弥生時代後期住居跡5軒、古墳時代中期住居跡2軒、古墳時代後期住居跡（鍛冶工房）1軒、時期不明土坑2基、時期不明井戸跡1基が検出され、近・現代の道跡が現道（第2図参照）の下から硬化面として確認されている。主な遺物は弥生時代後期土器、土製紡錘車・土製勾玉・磨製石鏃・磨石兼叩き石、古墳時代中期土師器（壺・甕）、古墳時代後期土師器（壺・甕・壺・甕）、羽口・鉄滓・砥石・鍛造剥片・滑石製模造品・臼玉・支脚等が出土し、他にナイフ形石器・剥片、縄文時代早期～中期土器片、石鏃等がグリッド遺物として少量出土している。

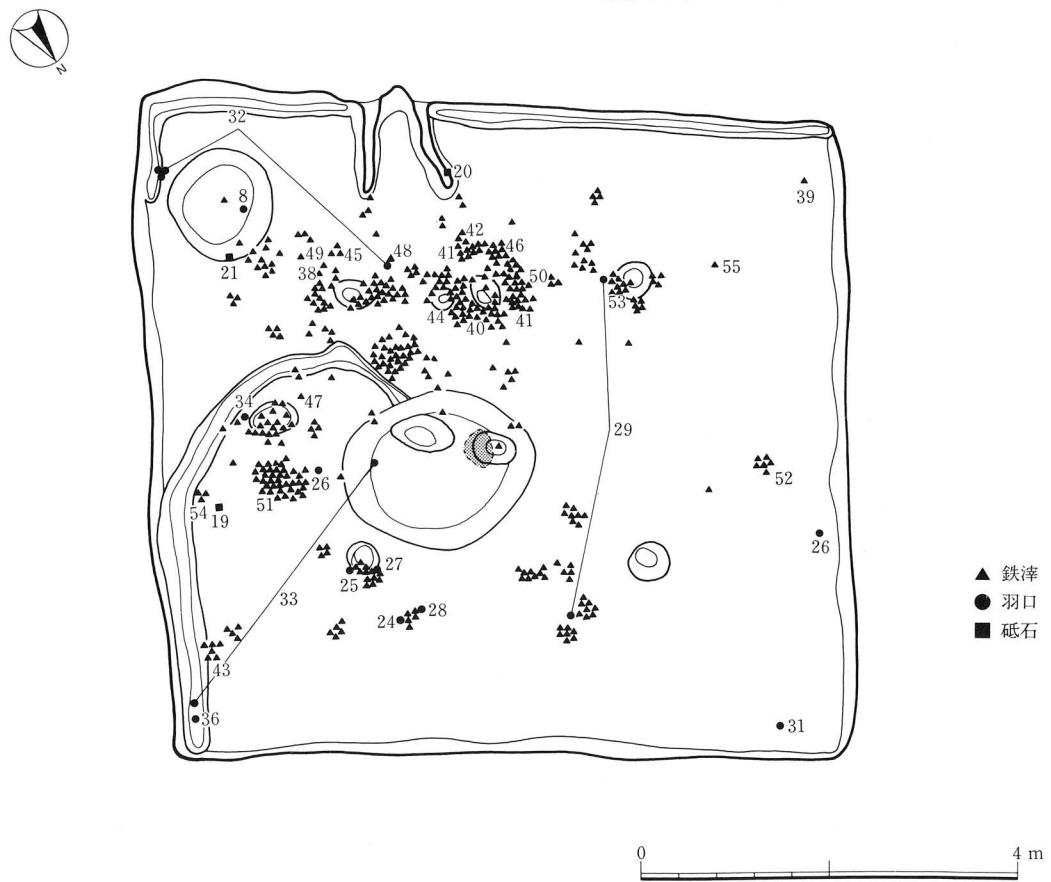
検出された遺構の配置状況を見ると、総数8軒検出された住居跡は弥生時代後期の住居跡が調査区南東端に3軒（6～8号住居跡）、北東側に2軒（4・5号住居跡）、古墳時代中期の住居跡（2・3号住居跡）及び後期の1号住居跡（鍛冶工房）は北西端に集中して検出され、調査区の中央部からは検出されていない。土坑は調査区のほぼ中央から2基が検出され、井戸跡は中央南端部から検出されている。又、道跡とした硬化面は調査区北側を東西方向に走行し、轍状を呈して検出された。



第6図 1号住居跡遺物分布図



第7図 1号居住跡土器分布図



第8図 1号居住跡鍛冶関連遺物分布図

## 第1節 住居跡

1号住居跡 [鍛冶工房] (第6~16・33・34図、表-2~4、図版1~7・17)

位置 調査区北西端A-1・B-1グリッドに位置し、南側に2号住居跡、東側に3号住居跡が近接して位置する。平面形 東西に長い方形を呈す。主軸方向 N-36°-E 規模 長軸 7.20m、短軸 6.50m、壁高60cmを測る。主柱穴 P1~P4がこれに相当し、径36cm~43cm、深さ51cm~55cmを測る。

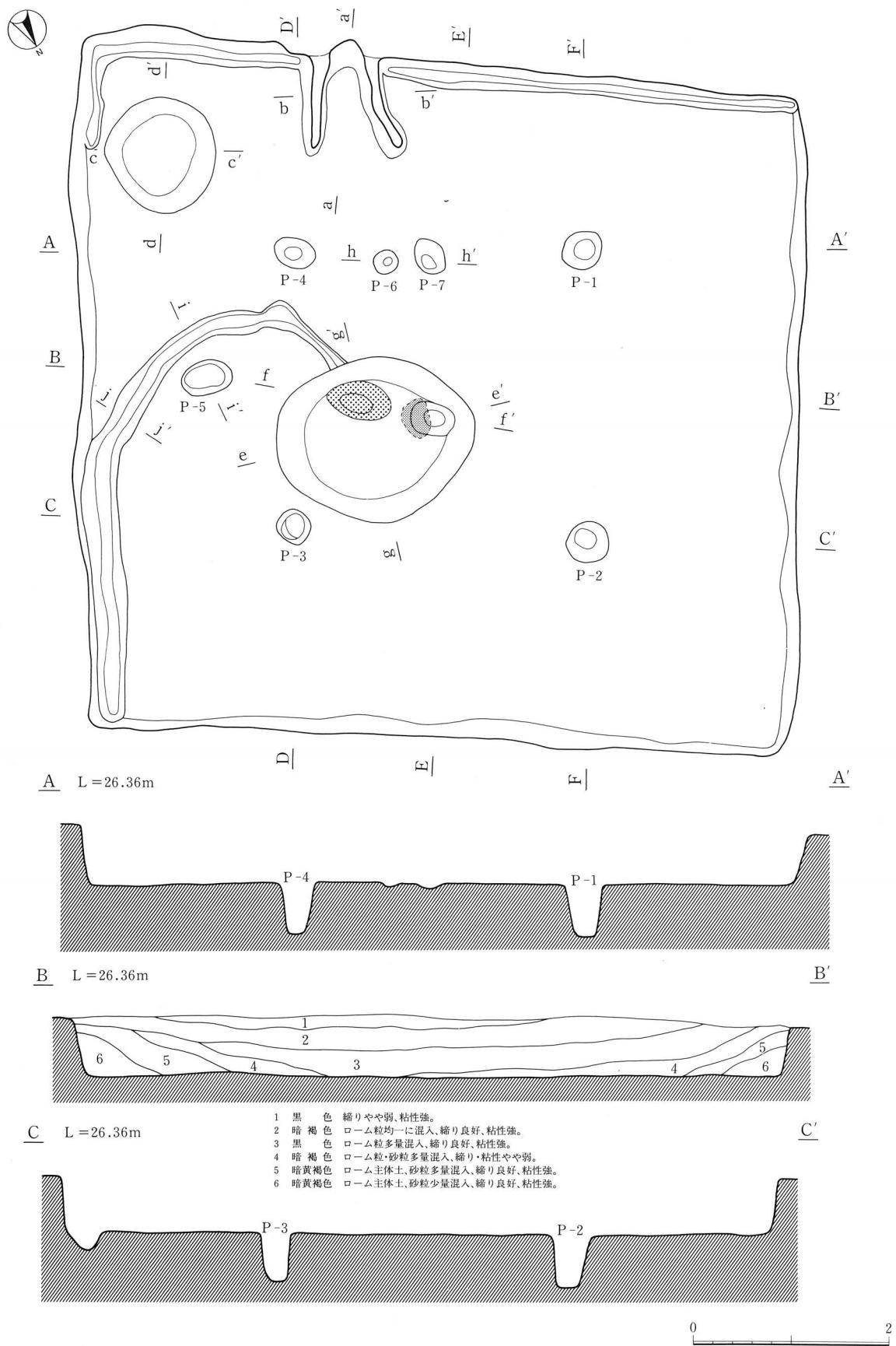
貯蔵穴 南コーナー部分に位置する。円形を呈し、径1.10m~1.16m、深さ42cmを測る。カマド 南西壁の南コーナー寄りに位置し、袖部は粘土・山砂の混和土で構築されている。燃焼部からは土製の支脚が据えられた状態で検出されたが、焼土・披熱痕は僅かに観察される程度であった。形態的には住居内に長くハの字状に延びる袖部を有し、煙道部は床面からほぼ垂直に立ち上がり、壁外に僅かに掘り込まれるタイプであり、初原的な形態を呈していると言えよう。壁溝 南西壁及び南コーナーからカマド部分を除いて検出された。幅18cm~28cm、深さ14cmを測る。床面 全体に面を成し、カマド付近には顯著な踏み固めが観察された。

鍛冶施設 中央やや東寄りに位置し、土坑状の浅い掘り込みの中から鍛冶炉と覆土中に多量の鍛造剥片を含む小ピットが検出されている。土坑状の掘り込みは楕円形を呈し、東西2.08m、南北1.67m、深さ18cmを測る。鍛冶炉は土坑状の掘り込みの西端部、住居跡のほぼ中央に位置する。平面形は楕円形を呈し、長径45cm、短径34cm、深さ20cmを測り、東側が披熱により著しく赤化していた。溝 鍛冶施設から弧状に南東壁中央に延び、更に東コーナーまで壁溝状を呈して続くものが検出された。弧状部分は幅12cm~30cm、深さ20cm、壁部分は幅27cm~36cm、深さ20cmを測る。小ピット 3基検出された。鍛冶施設の東側、溝に近接するP5は長径52cm、短径35cm、深さ12cmを測り、覆土中に鉄滓が多量に含まれていた。P6・P7は鍛冶施設の南側に位置する。P6 径26cm、深さ15cm、P7 長径40cm、短径30cm、深さ15cmを測る。

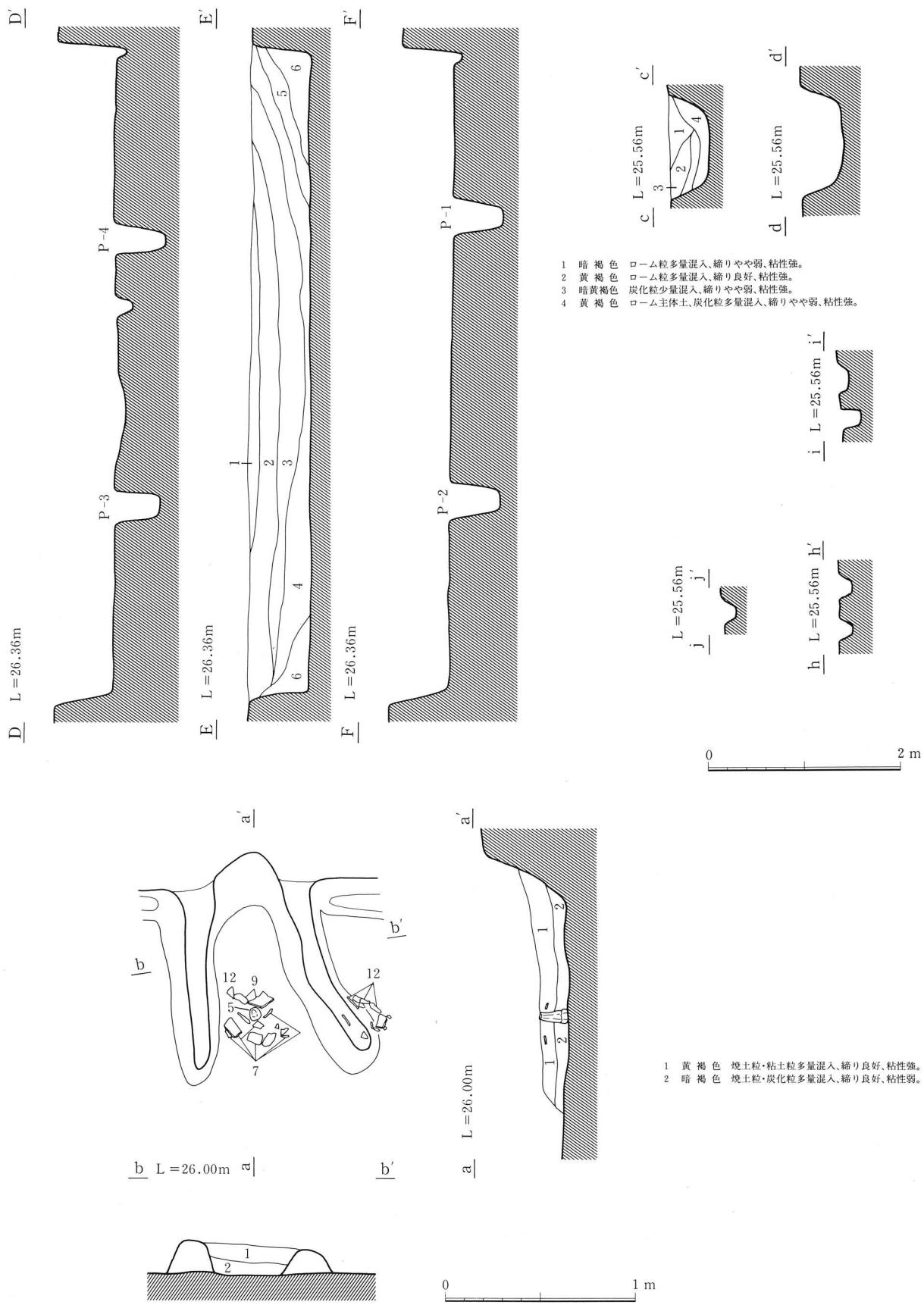
遺物出土状況 遺物は床面及び床面直上から鍛冶関連遺物が多量に出土している。出土状況を見ると、鉄滓はカマド付近の住居跡南側に非常に多く、羽口はいずれも専用羽口で全体から出土しているが、完形のものは北側からの出土が目立っている。砥石は大形のものが東壁際中央から、小形有孔砥石がカマド付近から出土している。土師器の壺・甕・甌等は全体に散在して破片で検出され、貯蔵穴からは口縁部を欠損するほぼ完形の壺が出土し、床面出土の破片とも接合している。その他の遺物としては覆土中層から滑石製模造品、床面から臼玉2点が出土している。尚、鍛冶施設内の小ピットから多量に出土した鍛造剥片・粒状滓は床面及び床面直上土からも抽出されている。

時期 カマドの形態、出土遺物から推測される所属時期は6世紀初頭と考えられる。

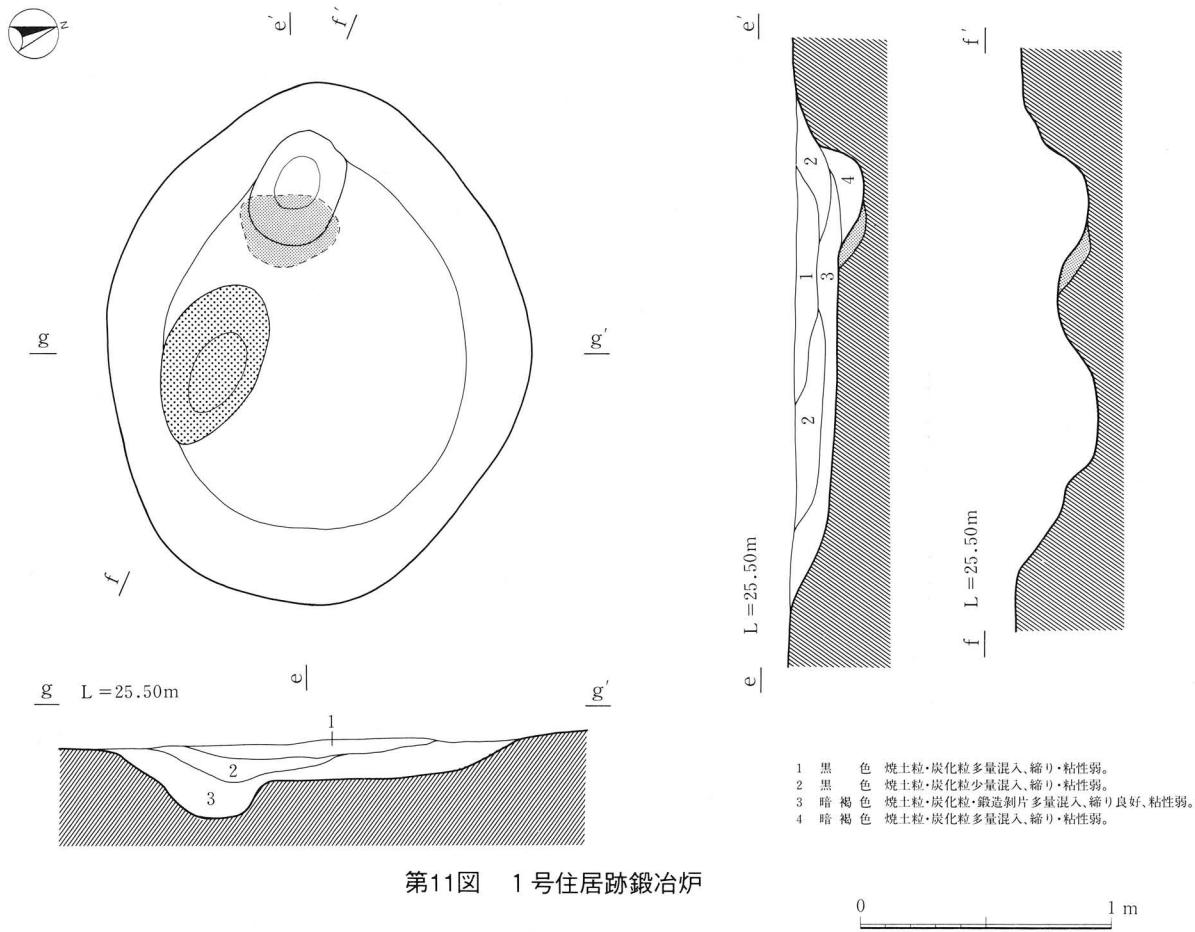
出土遺物は55点掲載し、詳細については観察表にまとめた。



第9図 1号住居跡 (1)



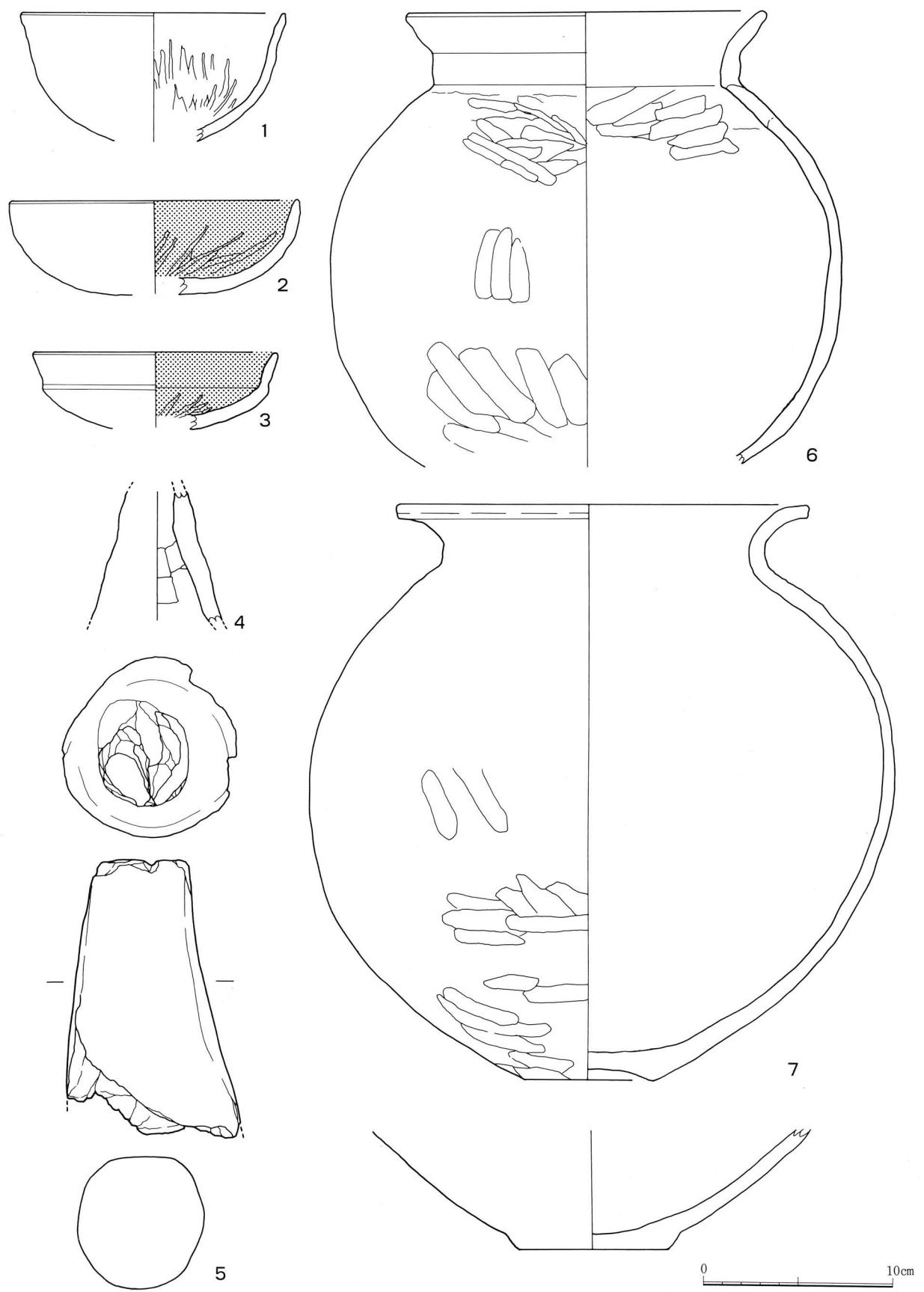
第10図 1号住居跡（2）・カマド



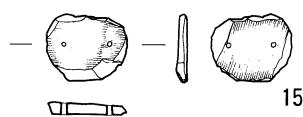
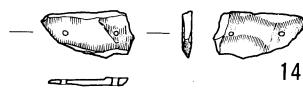
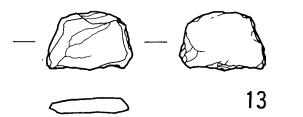
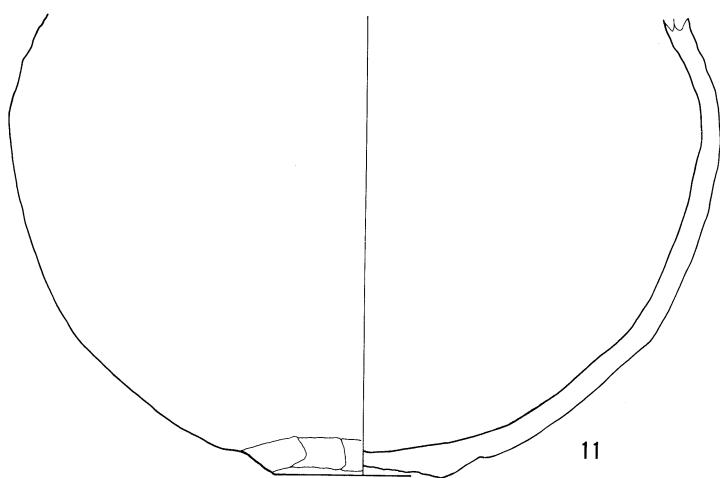
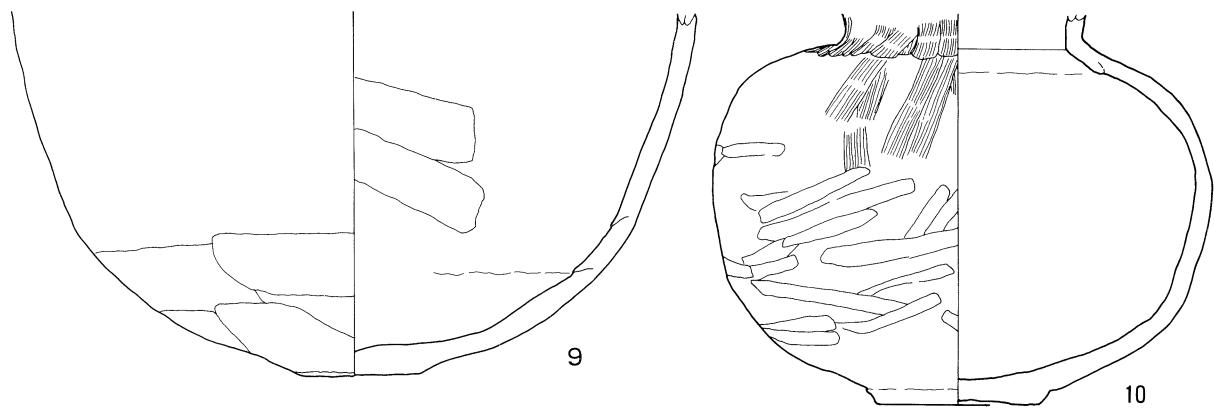
第11図 1号住居跡鍛冶炉

表一2 1号住居跡出土遺物観察表 (1)

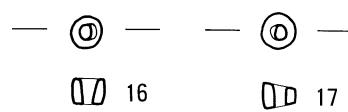
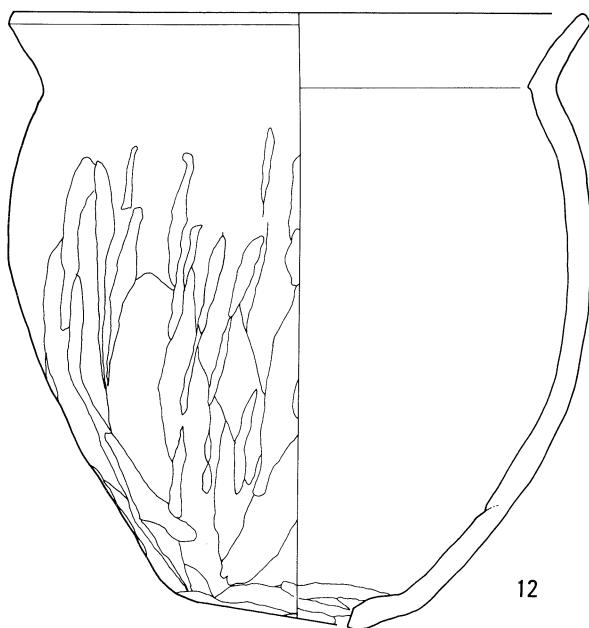
番号	器種	法量(cm)	器形・成整形の特徴	色調	胎土	焼成	備考
1	土師器壺	器高 口径 底径 <u>(14.2)</u>	体部は内湾し、口縁部は僅かに外反する。対部内面ヘラケズリ、口縁部内外面ヨコナデ。	淡赤褐色	細砂粒少	良 好	3分の2欠
2	土師器壺	器高 口径 底径 <u>(5.1) (15.4)</u>	体部は内湾し、口縁部は直立気味に立ち上がる。体部内面ヘラケズリ、口縁部内外面ヨコナデ。	内面赤彩	細砂粒少	良 好	3分の2欠
3	土師器壺	器高 口径 底径 <u>(13.0)</u>	体部は内湾し、口縁下位に稜を持つ。口縁部は僅かに外反する。体部内面ヘラケズリ、口縁部内外面ヨコナデ。	内面赤彩	細砂粒 雲母片多	良 好	口縁部破片2点
4	土師器壺	器高 口径 底径 <u>—</u>	脚部はハの字状に開く。脚部内面ヘラケズリ。	暗黄褐色	砂粒少	概良好	脚部
5	土製支脚	器高 口径 底径 <u>15.0 4.6 (9.2)</u>	断面ハの字状を呈する。	淡黄色	砂粒多	概良好	
6	土師器甕	器高 口径 底径 <u>(24.2) 19.2 —</u>	胴部は球形を呈し、頸部から直立気味に立ち上がり、口縁部は外傾する。胴部内外面ヘラケズリ、口縁部内外面ヨコナデ。	明黃白色	細砂粒 金雲母	良 好	底部及び胴部2分の1欠
7	土師器甕	器高 口径 底径 <u>30.8 22.0 6.8</u>	胴部は球形を呈し、口縁部は大きく外反する。底部は上げ底。胴部外面・底部ヘラケズリ、口縁部内外面ヨコナデ。	褐 色	砂粒・ 石英多	良 好	口縁2分の1、胴部の一部欠
8	土師器甕	器高 口径 底径 <u>— — 7.8</u>	平底の底部から大きく開いて立ち上がる。	明黃褐色	砂粒・ 長石・ 石英多	良 好	底部
9	土師器甕	器高 口径 底径 <u>— — 4.9</u>	丸底気味の底部から緩やかに開いて立ち上がる。底部・胴部内外面雜なヘラケズリ。内面に明瞭な輪積み痕を残す。	黄褐色 ～ 黒色	砂粒多	良 好	胴上半部・口縁部欠
10	土師器壺	器高 口径 底径 <u>15.5 — 6.4</u>	胴部はつぶれた球形を呈し、底部は厚い平底。口縁部～胴上半部刷毛目、胴下半部粗雑なミガキ。外面煤付着。	褐 色	細砂粒	概良好	口縁部欠 貯蔵穴出土
11	土師器甕	器高 口径 底径 <u>— — 6.8</u>	胴部は球形を呈し、底部は上げ底気味の平底。底部及び底部直上ヘラケズリ、胴部内外面ヘラナデ。	淡黃白色 ～ 黑色	石英多	良 好	口縁部及び胴部4分3欠



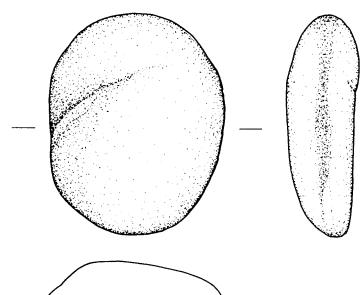
第12図 1号住居跡出土遺物（1）



0 10cm

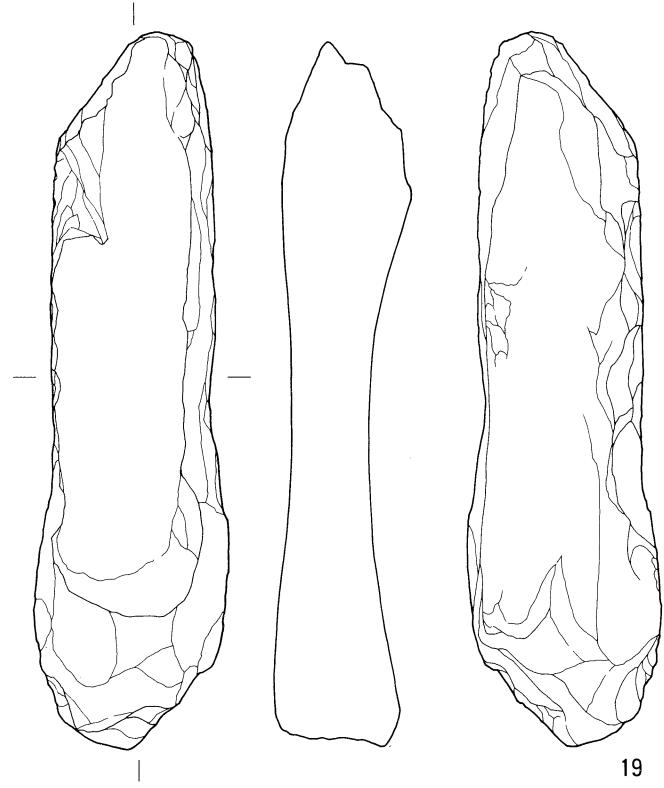


0 2.5cm

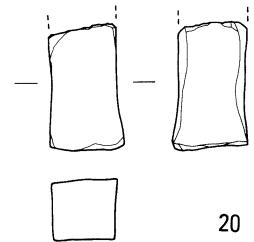


0 10cm

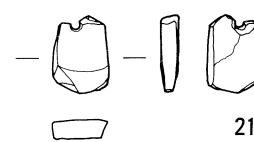
第13図 1号住居跡出土遺物（2）



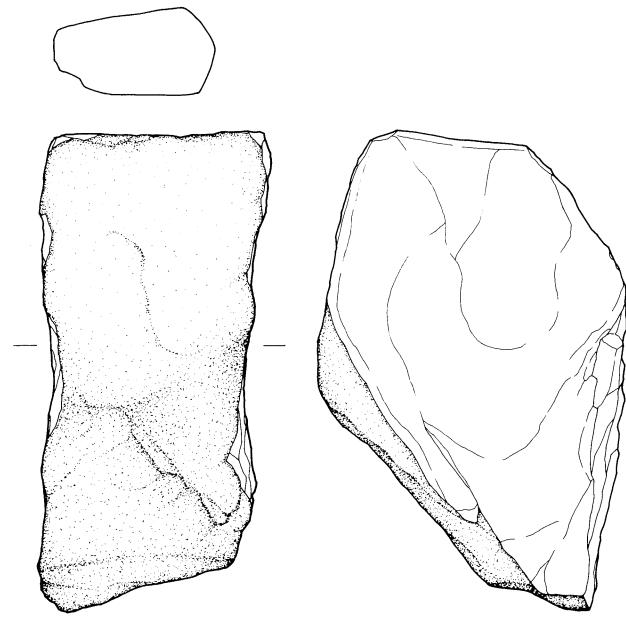
19



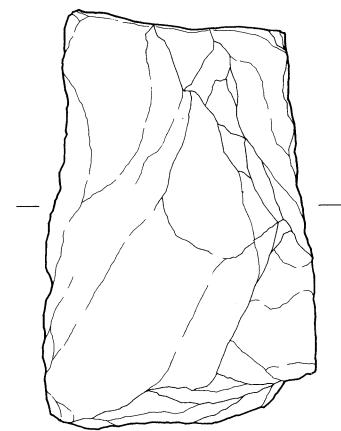
20



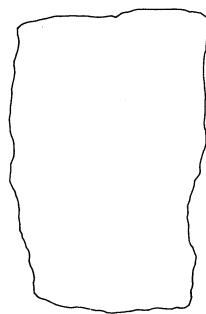
21



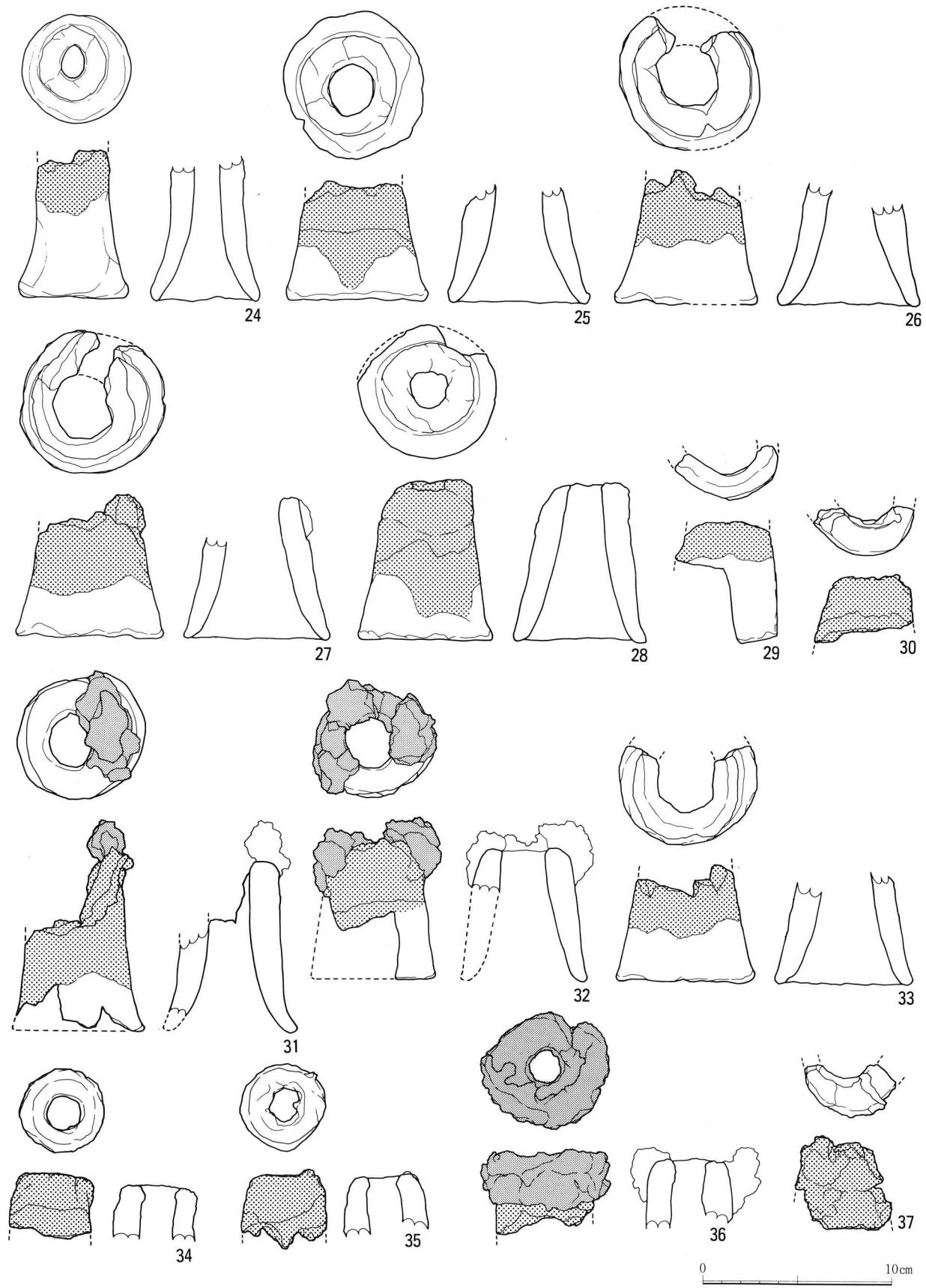
22



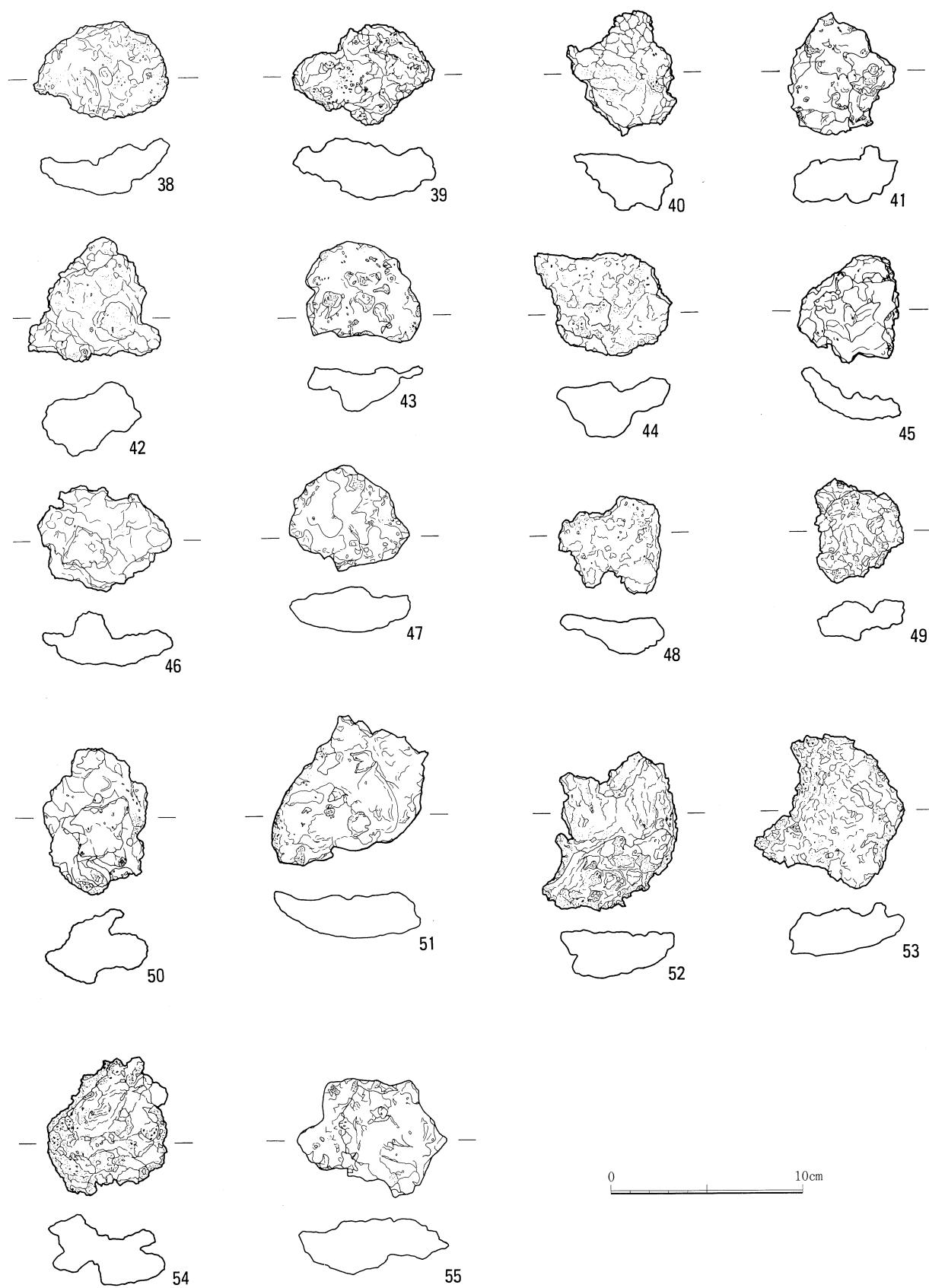
23



第14図 1号住居跡出土遺物（3）



第15図 1号住居跡出土遺物（4）



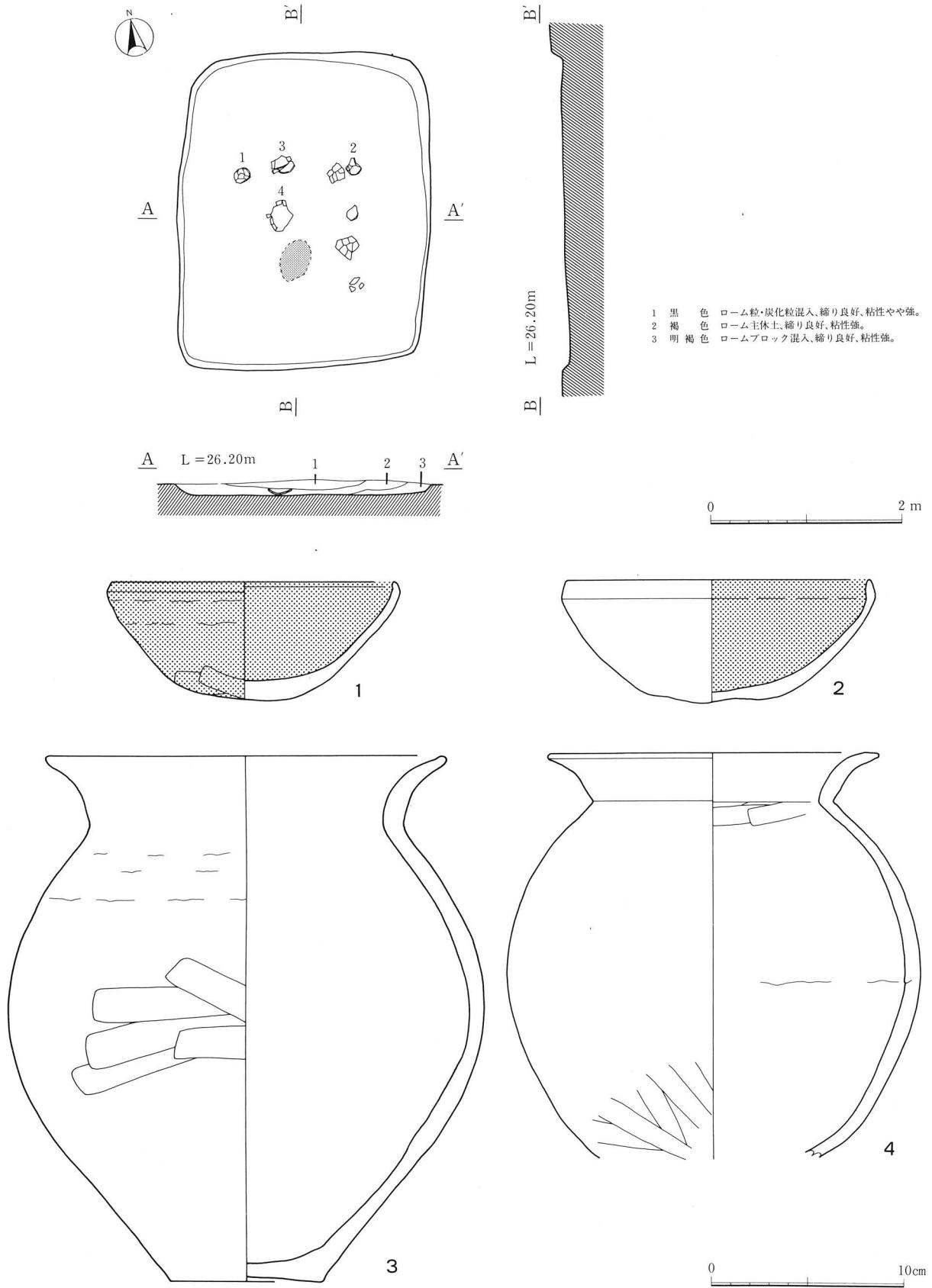
第16図 1号住居跡出土遺物（5）

表一 3 1号住居跡出土遺物観察表（2）

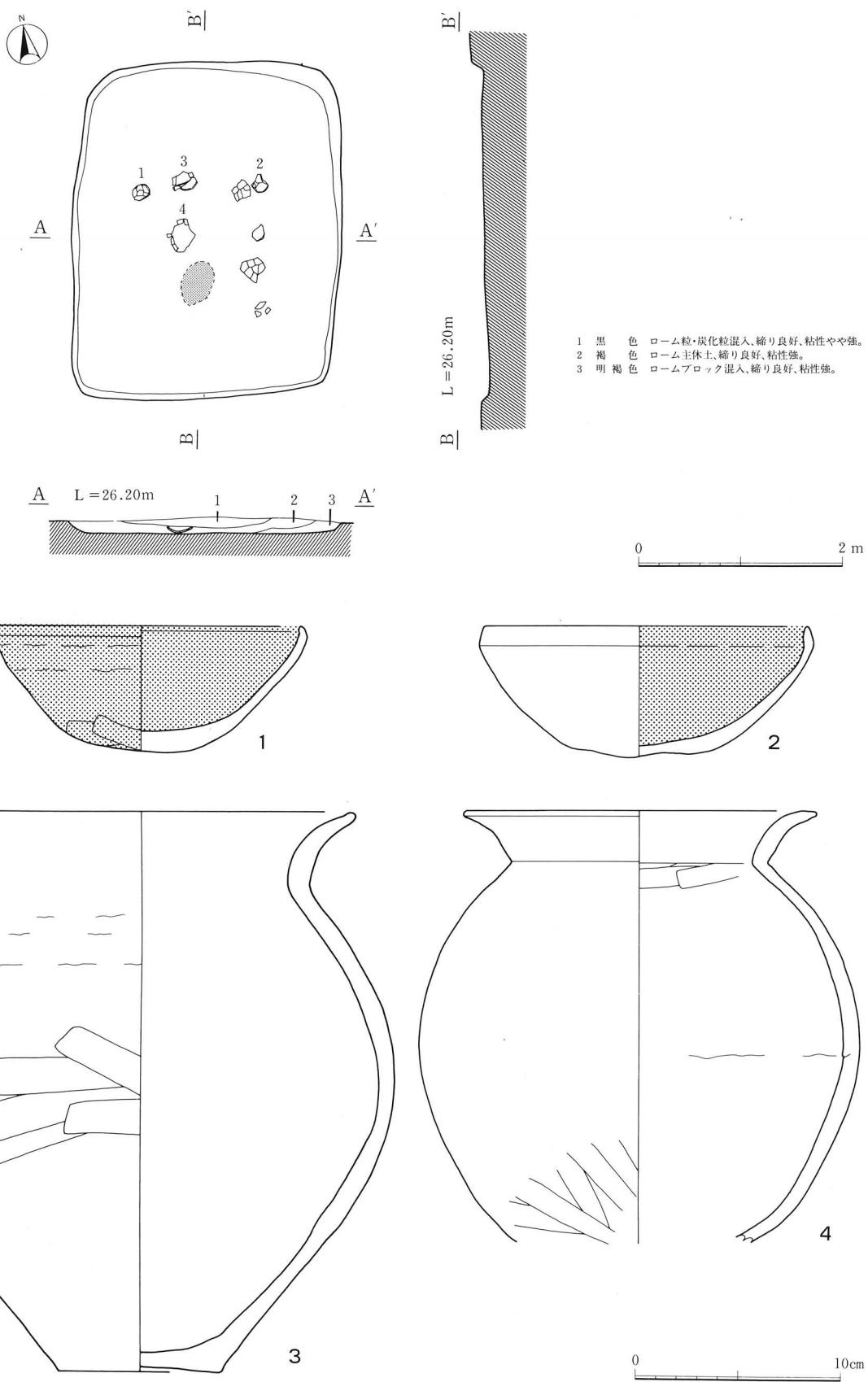
番号	器種	法量(cm)	器形・成整形の特徴	色調	胎土	焼成	備考
12	土師器甌	器高 24.5 口径 23.0 底径 6.8	胴部は長胴菱形を呈し、口縁部は大きく外傾する。底部は単孔。外面及び内面下部に粗雑なヘラケズリ、口縁部内面ヨコナデ。	黒色 内面 黄褐色	砂粒多	良好	3分の1欠
13	滑石製未製品	台形を呈する。 縦 2.3cm 横 3.3cm 厚さ 0.6cm 重量 6.4g					覆土
14	滑石製模造品	双孔が穿たれ、略台形を呈する。 縦 1.9cm 横 3.7cm 厚さ 0.4cm 重量 3.3g					覆土
15	滑石製模造品	双孔が穿たれ、円板形を呈する。 縦 2.7cm 横 3.3cm 厚さ 0.5cm 重量 6.3g					覆土
16	滑石製白玉	直径 0.40cm 孔径 0.20cm 厚さ 0.35cm					床面
17	滑石製白玉	直径 0.40cm 孔径 0.15cm 厚さ 0.35cm					床面
18	叩き石	側面に使用痕有り。 縦 8.8cm 横 7.0cm 厚さ 2.7cm 重量 250g					瑪瑙
19	砥石	両面に研磨痕が顕著で、側断面は撥形状を呈す。 長 28.4cm 幅 6.4cm~7.5cm 厚さ 3.5cm~5.5cm 重量 1480g					粘板岩
20	砥石	四側面を使用し、断面形は方形を呈す。 長 5.0cm 横 2.9cm 重量 80g					砂岩
21	有孔砥石	両面を使用し、側面に自然面を残す。上部に一孔が穿たれる。 縦 8.8cm 横 7.0cm 厚さ 2.7cm 重量 250g					粘板岩
22	自然石	自然面を残し、雲母を多量に含む。カマド構築材の可能性有り。 縦 19.2cm 横 8.9cm 厚さ 12.0cm 重量 2590g					花崗岩
23	自然石	自然面を残し、雲母を多量に含む。カマド構築材の可能性有り。 縦 16.7cm 横 9.9cm 厚さ 10.8cm 重量 2280g					花崗岩
24	羽口	断面ラッパ状。残先端部は被熱により暗青灰色を呈す。 残長 7.9cm 基部内径 5.0cm 外径 5.8cm 残先端部内径 1.4cm 外径 3.9cm	明黄褐色	砂粒	良好		先端部欠
25	羽口	断面ハの字状。残先端部は青灰色を呈し、硬質化。 残長 6.4cm 基部内径 6.2cm 外径 7.6cm 残先端部内径 2.5cm 外径 5.4cm	明黄褐色	砂粒	良好		先端部欠
26	羽口	断面ハの字状。残先端部は青灰色を呈し、硬質化。 残長 7.2cm 基部内径 6.7cm 外径 7.6cm 残先端部内径 2.5cm 外径 5.4cm	淡赤褐色	細砂粒	良好		先端部欠
27	羽口	断面ラッパ状。残先端部は青灰色を呈し、鉄滓付着。 残長 7.6cm 基部内径 7.2cm 外径 7.8cm 残先端部内径 2.9cm 外径 5.5cm	黄褐色	細砂粒	良好		先端部欠
28	羽口	断面ハの字状。先端部は青灰色を呈し、硬質化。 長 8.6cm 基部内径 6.2cm 外径 7.1cm 先端部内径 1.8cm 外径 4.0cm	淡赤褐色	細砂粒	良好		ほぼ完形
29	羽口	残先端部は暗青灰色を呈する。残長 6.5cm	淡赤褐色	細砂粒	良好		基部破片
30	羽口	先端部は青灰色を呈し、硬質化が著しい。	——	細砂粒	——		先端部破片
31	羽口	断面ラッパ状。基部付近まで青灰色を呈し、硬質化が著しい。 鉄滓多量付着。長 9.0cm 基部内径 6.0cm 外径 7.2cm 残先端部内径 2.2cm 外径 5.3cm	暗赤褐色	砂粒雲母	良好		先端部 3分の2欠
32	羽口	断面ハの字状。先端部は青灰色を呈し、硬質化が著しい。鉄滓多量付着。 長 8.5cm 先端部内径 2.5cm 外径 4.6cm	明赤褐色	砂粒	良好		2分の1欠
33	羽口	断面ハの字状。残先端部は暗青灰色を呈す。 残長 5.8cm 基部内径 6.2cm 外径 7.4cm	黄褐色	細砂粒	良好		先端部欠

表一 4 1号住居跡出土遺物観察表（3）

番号	器種	法量(cm)	器形・成整形の特徴	色調	胎土	焼成	備考
34	羽口		先端部は青灰色を呈し、硬質化が著しい。 残長 3.4cm 先端部内径 2.2cm 外径 4.0cm	—	石英多	—	先端部
35	羽口		先端部は青灰色を呈し、硬質化が著しい。 残長 4.0cm 先端部内径 2.0cm 外径 4.0cm	—	細砂粒	—	先端部
36	羽口		先端部は青灰色を呈し、硬質化が著しい。鉄滓多量付着。 残長 3.6cm 先端部内径 2.0cm 外径 4.0cm	—	細砂粒	—	先端部
37	羽口		先端部は青灰色を呈し、硬質化が著しい。鉄滓付着。 残長 4.5cm	—	細砂粒	—	先端部破片
38	鉄滓		楕形滓 長 6.9cm 短 5.1cm 厚さ 2.3cm 重量 44 g				
39	鉄滓		楕形滓 長 7.3cm 短 5.1cm 厚さ 3.0cm 重量 99 g				
40	鉄滓		楕形滓 長 6.3cm 短 5.2cm 厚さ 2.8cm 重量 79 g				
41	鉄滓		楕形滓 長 6.4cm 短 5.6cm 厚さ 3.0cm 重量 70 g				
42	鉄滓		楕形滓 長 6.8cm 短 6.2cm 厚さ 2.9cm 重量 120 g				
43	鉄滓		楕形滓 長 6.0cm 短 5.4cm 厚さ 2.4cm 重量 48 g				
44	鉄滓		楕形滓 長 5.9cm 短 5.5cm 厚さ 3.1cm 重量 113 g				
45	鉄滓		楕形滓 長 5.2cm 短 5.0cm 厚さ 1.4cm 重量 39 g				
46	鉄滓		楕形滓 長 6.8cm 短 5.4cm 厚さ 2.8cm 重量 108 g				
47	鉄滓		楕形滓 長 6.3cm 短 5.5cm 厚さ 2.4cm 重量 80 g				
48	鉄滓		楕形滓 長 5.4cm 短 5.2cm 厚さ 2.2cm 重量 50 g				
49	鉄滓		楕形滓 長 5.5cm 短 4.6cm 厚さ 2.1cm 重量 43 g				
50	鉄滓		楕形滓 長 7.7cm 短 5.4cm 厚さ 3.1cm 重量 120 g				
51	鉄滓		楕形滓 長 8.2cm 短 7.7cm 厚さ 2.5cm 重量 117 g				
52	鉄滓		楕形滓 長 8.3cm 短 5.9cm 厚さ 2.6cm 重量 160 g				
53	鉄滓		楕形滓 長 8.1cm 短 5.9cm 厚さ 2.8cm 重量 123 g				
54	鉄滓		楕形滓 長 7.2cm 短 6.0cm 厚さ 3.7cm 重量 111 g				
55	鉄滓		楕形滓 長 7.8cm 短 6.1cm 厚さ 2.8cm 重量 138 g				



第17図 2号住居跡・出土遺物



第17図 2号住居跡・出土遺物

## 2号住居跡（第17図、表－5、図版8）

**位 置** 調査区北西B-1グリッドに位置し、北側に1号住居跡、北東に3号住居跡が近接して位置する。  
**形 態** 南北に長い長方形を呈す。 **規 模** 長軸3.15m、短軸2.54m、壁高14cmを測る。 **炉** 中央南側より地床炉が検出されている。楕円形を呈し、長径45cm、短径30cmを測る。 **床 面** 面を成すが顯著な踏み固めは観察されなかった。 **柱穴・壁溝・貯蔵穴** なし。 **遺 物** 中央部床面より壺2点、甕2点が出土している。 **時 期** 出土遺物より5世紀後半と推測される。

表－5 2号住居跡出土遺物観察表

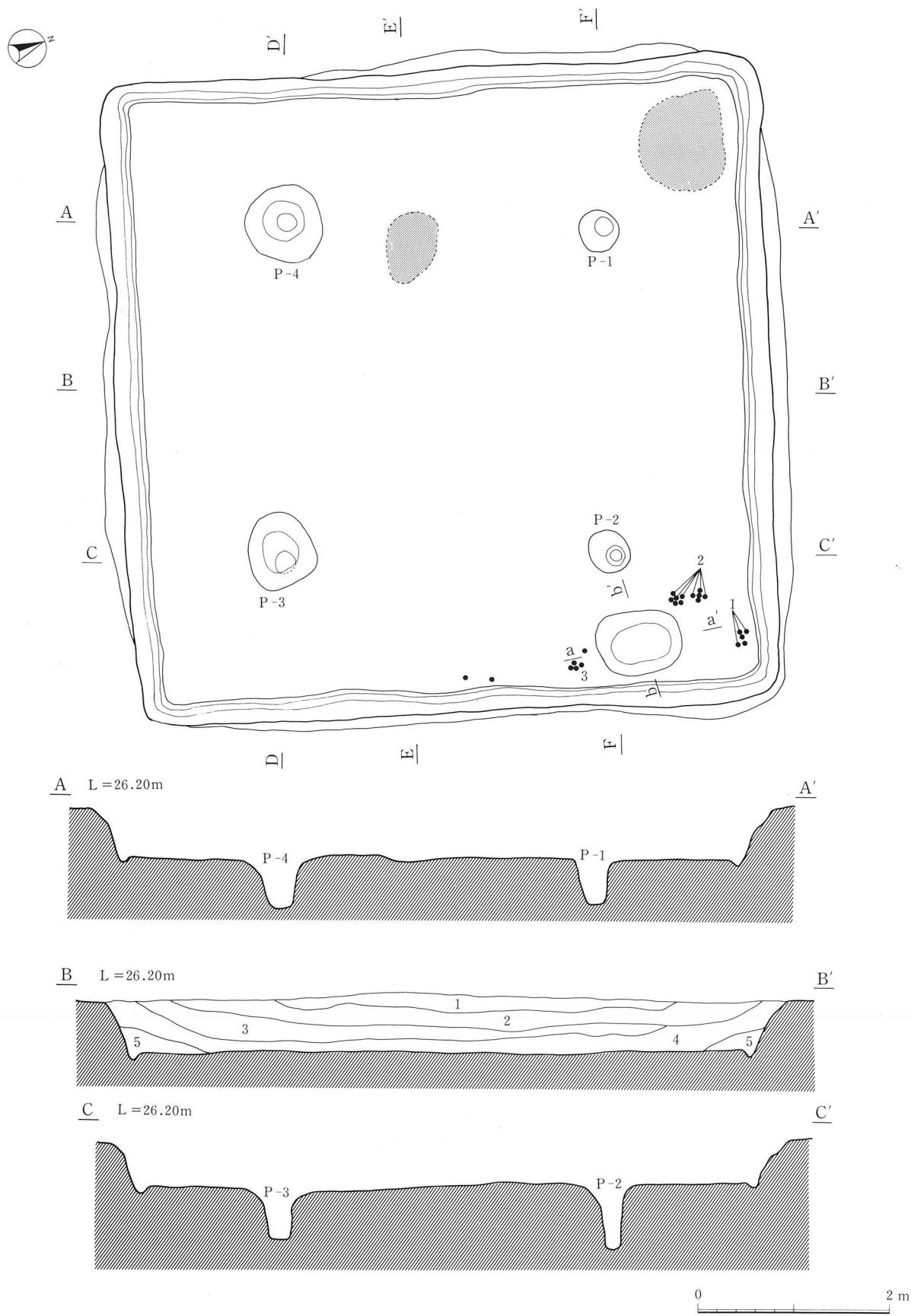
番号	器種	法量(cm)	器形・成整形の特徴	色調	胎土	焼成	備考
1	土師器壺	器高 6.2 口径 14.7 底径 ——	体部は緩やかに内湾して立ち上がり、口縁部は内傾する。底部は丸底。体部下端ヘラケズり、口縁部内外面ヨコナデ。	内外面赤彩	金雲母多	良 好	ほぼ完形
2	土師器壺	器高 6.4 口径 15.8 底径 ——	体部は緩やかに内湾して立ち上がり、口縁部は内傾する。底部は丸底。口縁部内外面ヨコナデ。外面煤付着。	内面赤彩	金雲母多	良 好	ほぼ完形
3	土師器甕	器高 (27.5) 口径 (20.8) 底径 (8.0)	胴部は球形を呈し、口縁部は外反する。胴部外面ヘラケズり、口縁部内外面ヨコナデ。	褐色～黒色	石英・長石多	良 好	3分の2欠
4	土師器甕	器高 21.2 口径 17.0 底径 ——	胴部は球形を呈す。口縁部は外傾し、口唇部で外反する。胴部外面ヘラケズり後ヘラナデ、口縁部内外面ヨコナデ。	黄褐色～黒色	石英多	良 好	2分の1欠

## 3号住居跡（第18・19図、表－6、図版9）

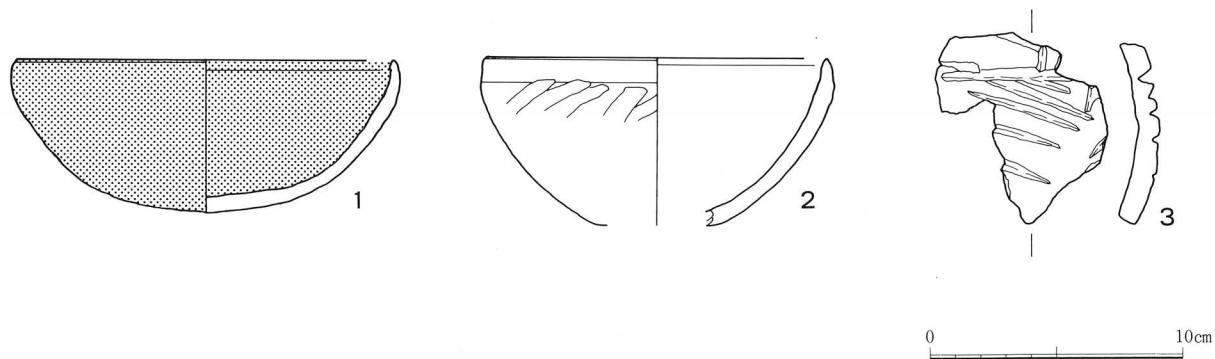
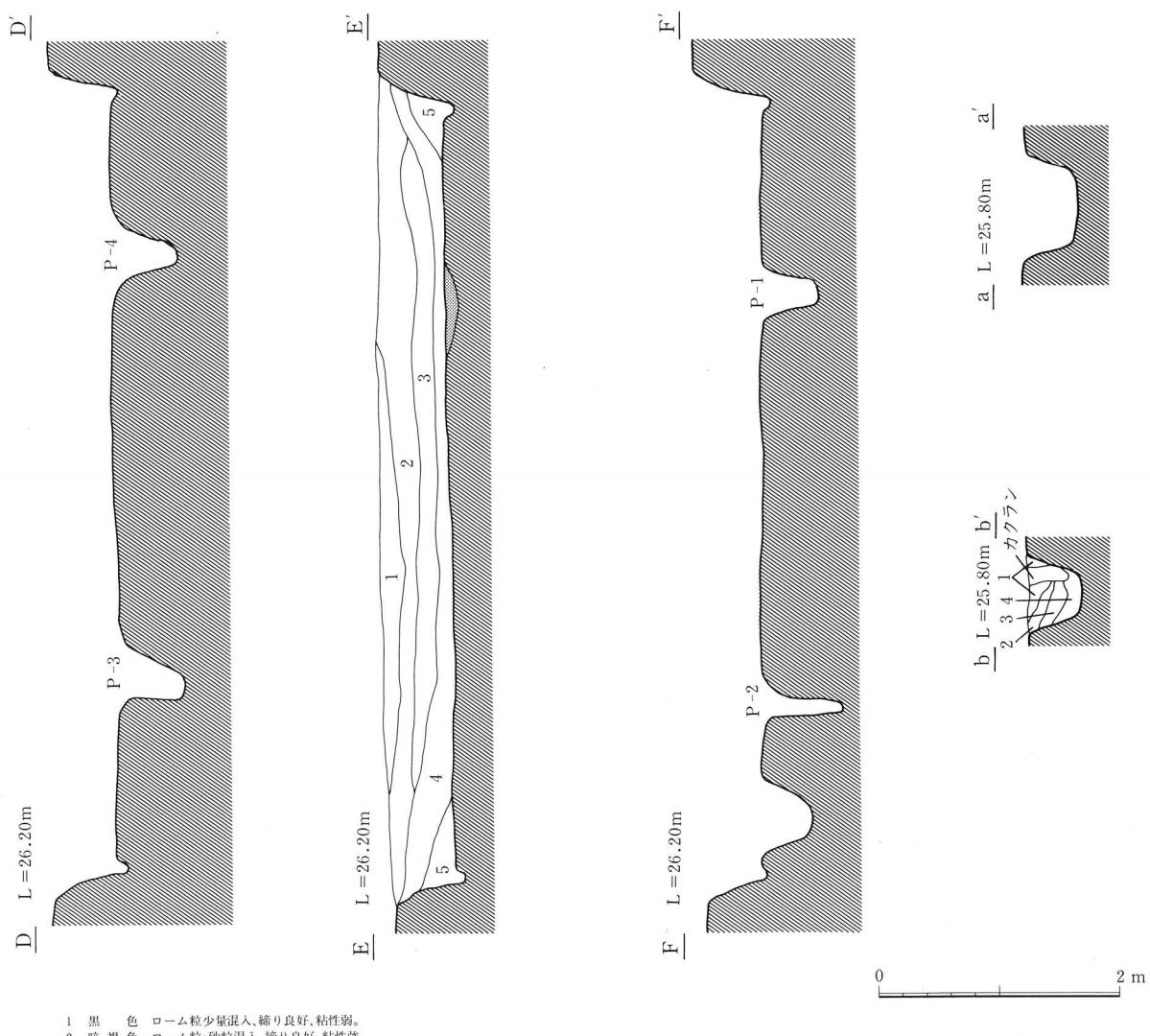
**位 置** 調査区北西B-1・2グリッドに位置し、西側に1号住居跡、南西に2号住居跡が近接して位置する。  
**形 態** 方形を呈す。 **規 模** 南北6.26m、東西6.20m、壁高60cmを測る。 **主柱穴** P1～P4の基本的配列で検出されている。径45cm～80cm、深さ52cm～68cmを測る。 **炉** 西側主柱穴間中央より地床炉が検出されている。楕円形を呈し、長径70cm、短径50cmを測る。他に北西コーナー部分より長径110cm、短径100cmを測る焼土跡が検出されている。**貯蔵穴** 北東コーナー部分に位置する。隅丸方形を呈し、長軸90cm、短軸65cm、深さ46cmを測る。 **壁 溝** 幅20cm～30cm、深さ10cmを測り、全周している。 **床 面** 面を成すが軟弱で顯著な踏み固めは観察されなかった。 **遺 物** 貯蔵穴周辺及び貯蔵穴覆土中より少量の土師器細片が出土している。 **時 期** 出土遺物より5世紀後半と推測される。

表－6 3号住居跡出土遺物観察表

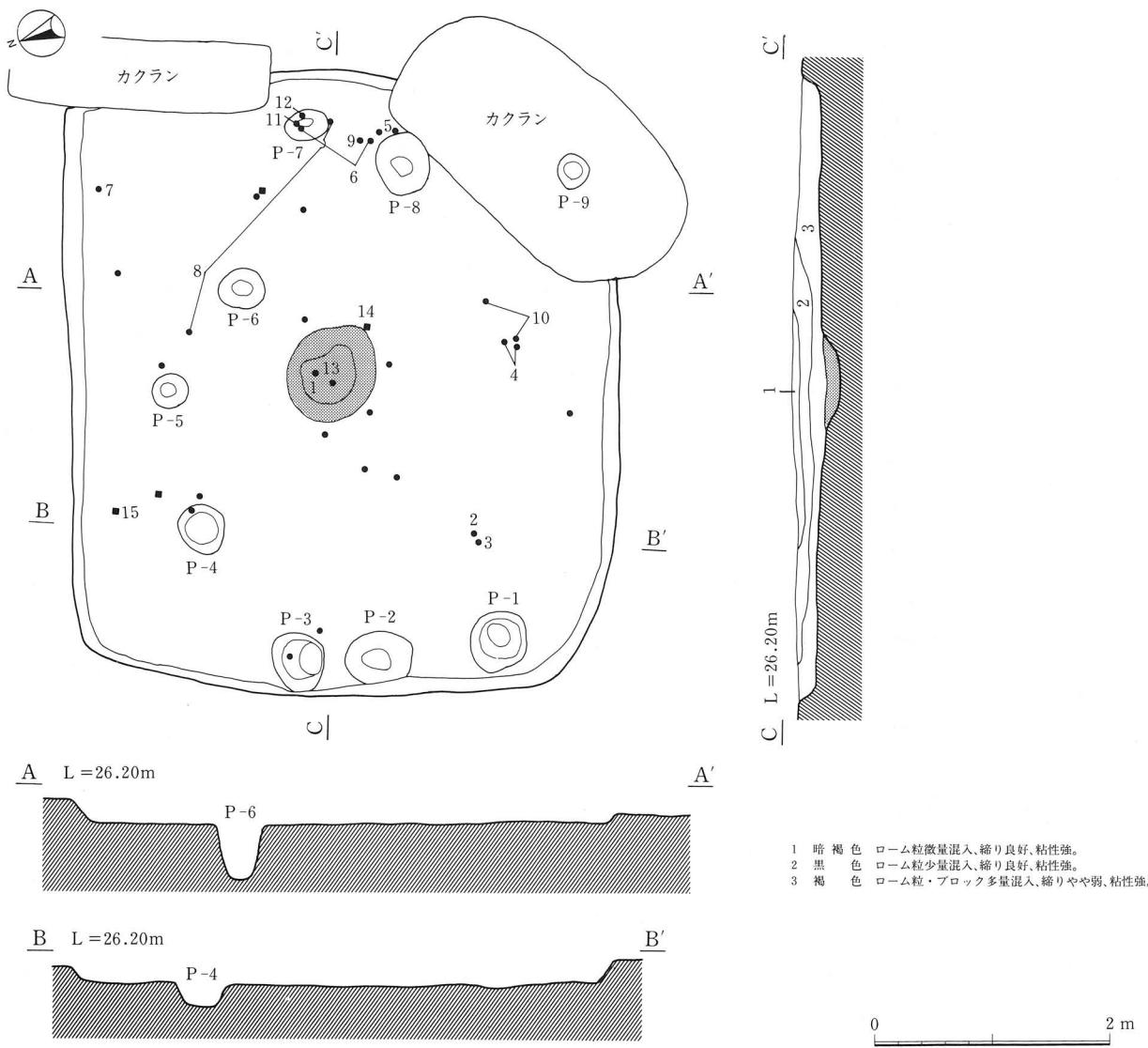
番号	器種	法量(cm)	器形・成整形の特徴	色調	胎土	焼成	備考
1	土師器壺	器高 6.1 口径 (14.2) 底径 ——	体部は緩やかに内湾し、口縁部は直立気味に立ち上がる。底部は丸底。体部外面ヘラナデ、口縁部内外面ヨコナデ。	内外面赤彩	細砂粒	良 好	ほぼ完形
2	土師器壺	器高 6.7 口径 (13.6) 底径 ——	体部は緩やかに内湾し、口縁部は直立気味に立ち上がる。体部外面ヘラケズり、ヘラナデ、口縁部内外面ヨコナデ。	黄褐色	細砂粒	良 好	3分の2欠
3	土師器 転用砥石	器高 —— 口径 —— 底径 ——	外面に筋状の使用痕顯著。	黄褐色	細砂粒	良 好	



第18図 3号住居跡（1）



第19図 3号住居跡(2)・出土遺物



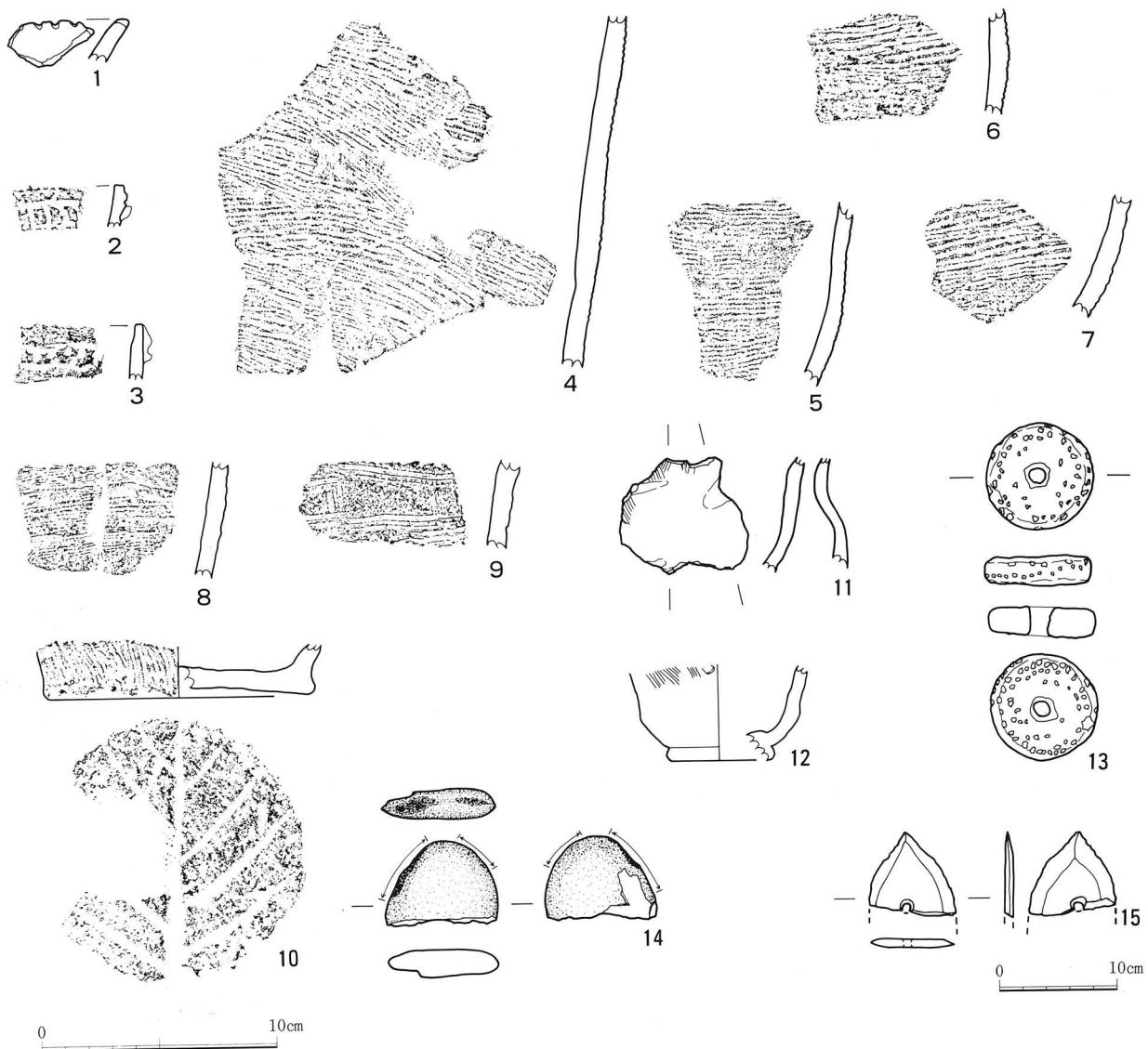
第20図 4号住居跡

#### 4号住居跡 (第20・21図、図版10)

**位置** 調査区北側B-3グリッドに位置する。  
**形態** 東西に長い隅丸長方形を呈し、東側コーナー部分2ヶ所が攪乱により消失している。  
**規模** 東西5.64m、南北4.46m、壁高22cmを測る。  
**炉** 中央部より地床炉が検出されている。楕円形を呈し、長径84cm、短径72cmを測る。  
**小ピット** 不規則に9本検出されているが、主柱穴状のピットは検出されていない。東壁面中央に接して位置するP2、西壁面中央に接して位置するP7・P8は入口部に伴うピットの可能性がある。  
**床面** 面を成し、比較的硬質であった。  
**遺物** 弥生時代後期土器片が散在して出土し、磨製石鏃、土製紡錘車、叩き石、手捏土器等が出土している。  
**時期** 出土遺物から弥生時代後期初頭～前半と推測される。

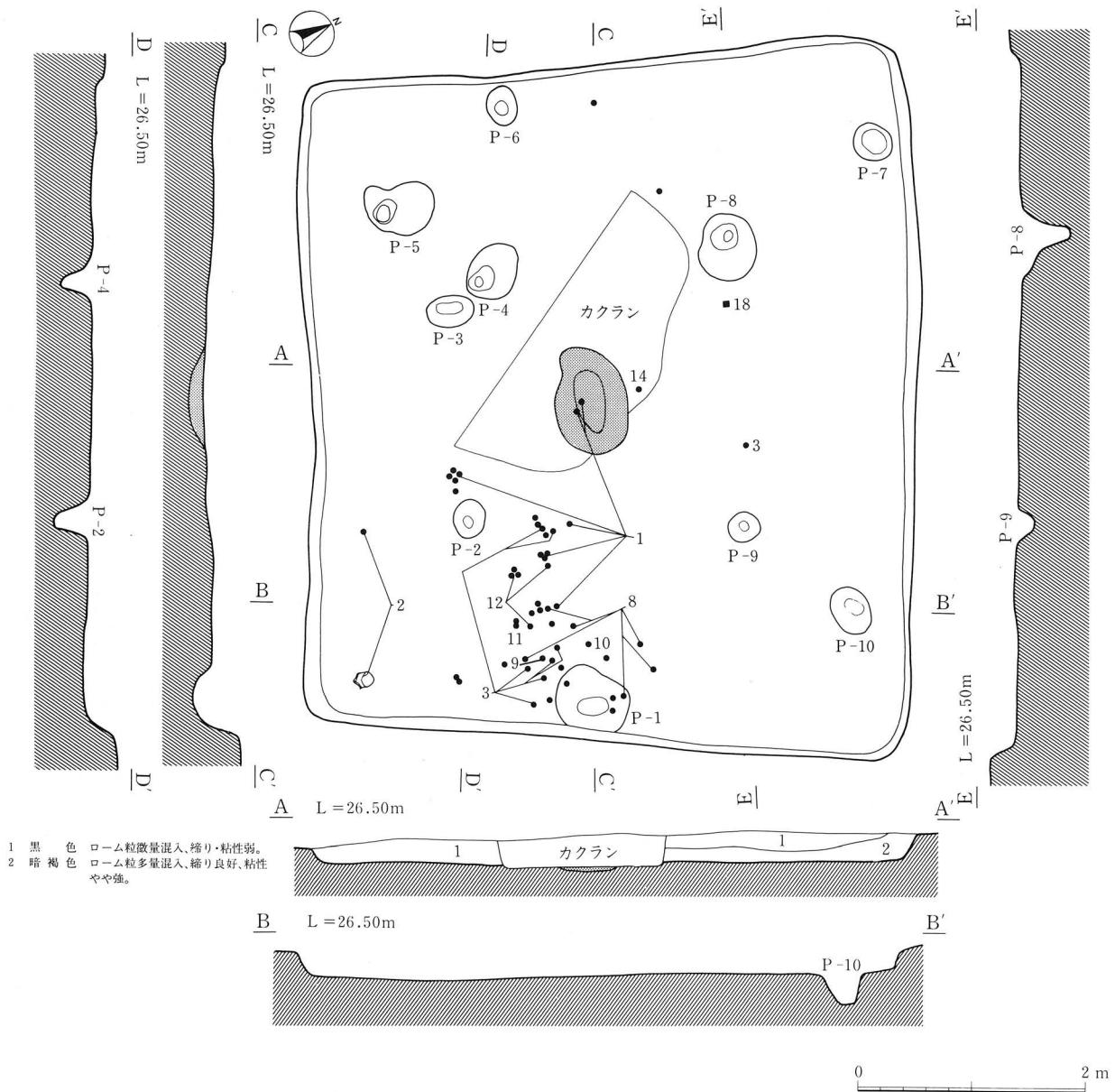
#### 4号住居跡出土遺物

1～3は口縁部の破片である。1は口唇部に刻みが施され、胎土に砂粒を多量に含んでいる。2は口唇部に繩文押圧、口唇直下に粘土紐を貼り付け、刻みが施される。3は折り返しの複合口縁を呈し、下端に棒状工具による押圧が加えられる。色調はいずれも褐色、胎土に雲母細片を多量に含み、外面に煤が付着している。



第21図 4号住居跡出土遺物

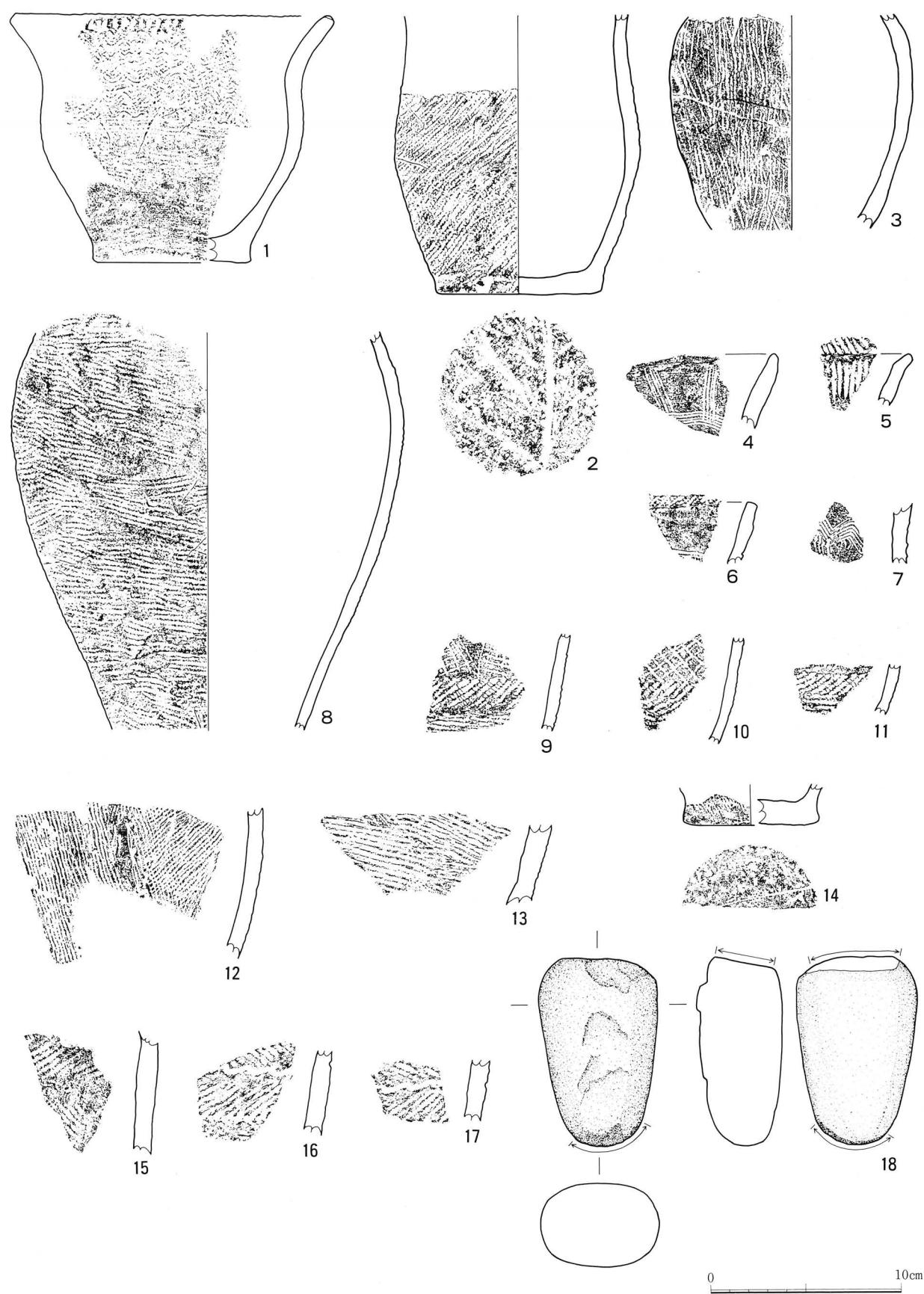
4は胴部大形破片で全面に横位の撚糸文が施文され、内面は良く磨かれている。色調褐色、胎土に雲母細片・砂粒を含み、焼成は良好。5は胴部の破片で横位の撚糸文が施文されている。色調暗褐色、胎土に石英粒を多量に含み、焼成は良好。6・7は同一個体の胴部破片で横位の撚糸文が施文されている。色調黒色、胎土に石英粒を含み、焼成は概良好。外面に多量の煤が付着している。8・9は同一個体の破片で8は横位の撚糸文が施文される胴部破片。9は櫛状工具による横線文と縦区画が施される頸部破片である。色調暗灰褐色、胎土に石英粒を含み、焼成は良好。10は底部で底部直上まで縦位の撚糸文が施文され、底部には木葉痕を残している。色調明黄褐色、胎土に石英粒・雲母細片を含み、焼成は非常に良好。11・12は同一個体の手捏土器破片である。色調淡赤褐色、胎土に細砂粒を少量含み、焼成は良好。13は完形の土製紡錘車で全面に細竹管状工具による刺突が施される。径4.6cm、厚さ1.3cm、孔径0.8cmを測る。色調明褐色、胎土に石英粒を多量に含み、焼成は非常に良好。14は叩き石の破片で側面上端に使用痕が観察される。現存長3.6cm、幅4.8cm、厚さ1.2cm、重量30.6gを測る。石材は安山岩。15は基部を欠損する磨製石鎌で中央部に孔一個が穿たれている。残存長1.8cm、幅1.8cm、厚さ0.8cm、重量0.7gを測る。石材は粘板岩。



第22図 5号住居跡

5号住居跡（第22・23図、図版11）

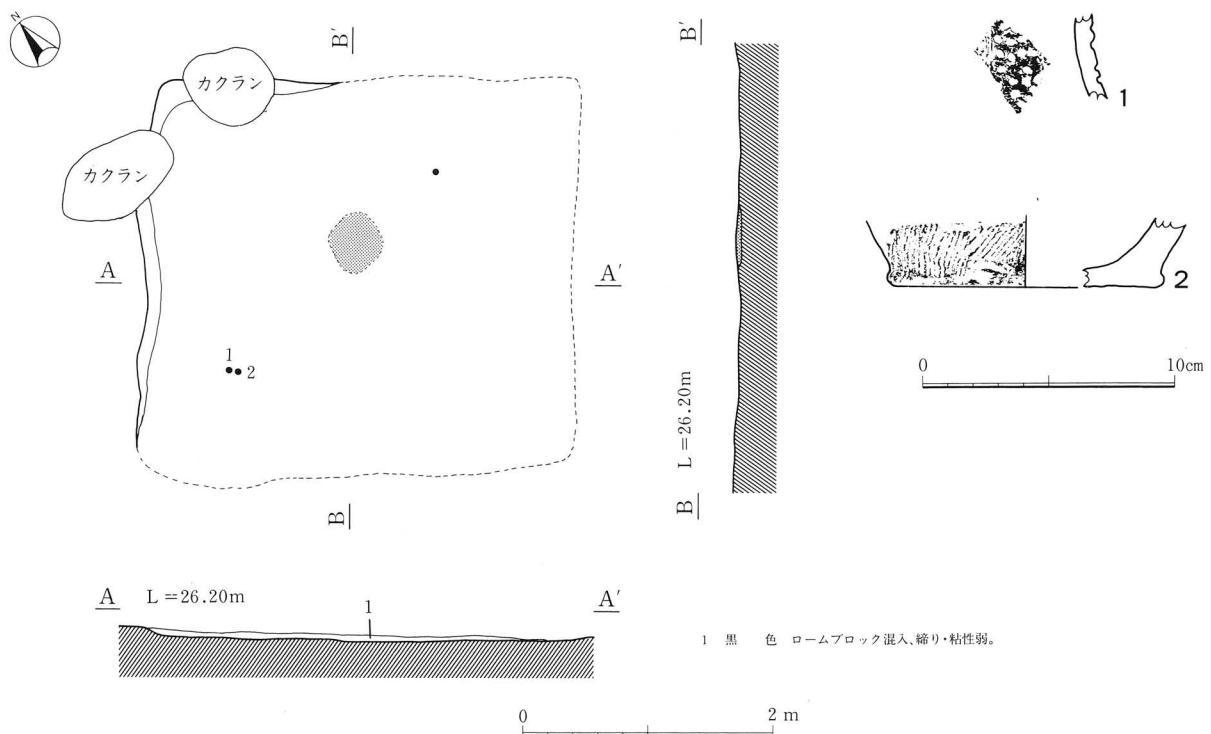
**位 置** 調査区北側B-4グリッド南東に位置する。 **形 態** 東西に長い隅丸台形を呈し、南壁に対して北壁が広い形態になっている。 **規 模** 東西5.50m～5.80m～6.20m、南北5.30m、壁高28cmを測る。 **柱 穴** 柱穴状のピットは10基検出され、P-2・P-3・P-8・P-9は位置的に主柱穴の可能性が高い。径28cm～58cm、深さ18cm～45cmを測る。又、東壁中央に接して位置するP-1は入口部に伴うピットの可能性が考えられる。径66cm、深さ20cmを測る。 **炉** 中央部より地床炉を検出している。楕円形を呈し、長径90cm、短径68cmを測る。 **床 面** 比較的硬質だが凹凸がある。 **遺物出土状況** P-1・P-2付近に弥生時代後期土器破片が集中し、他に磨石兼叩き石、流れ込みと考えられる縄文土器片等が出土している。又、南東コーナー部分からは口縁部を欠損する小形壺形土器が出土している。遺物量は比較的多く、破片遺物からの接合資料には良好なものがある。 **時 期** 出土遺物から弥生時代後期初頭～前半と推測される



第23図 5号住居跡出土遺物

## 5号住居跡出土遺物

1は小形壺形土器の接合資料で器高13.2cm、推定口径16.8cm、底径8.4cmを測る。器形的には口唇部に最大径を持ち、胴部の最大径は上半部に持っている。文様は口唇部に刻みが施され、口縁部～頸部は櫛状工具による波状文が施文される。胴部とは櫛状工具による横走文で区画される。胴部は僅かに撫糸文が観察され、底部には木葉痕が残されている。色調淡褐色、胎土に多量の石英粒と雲母細片を含み、焼成は良好。2は口縁部を欠損する小形壺形土器で残高14.9cm、底径8.8cmを測る。器形的には胴部の張り、頸部の屈曲が弱く寸胴な器形である。文様は頸部無文、胴部には附加条第1種縄文が施文され、底部には木葉痕が残されている。色調黄褐色～暗褐色、胎土に多量の石英粒と雲母細片を含み、焼成は概良好。外面には煤の付着が見られる。3は小形壺形土器の胴部大形破片で縦位の撫糸文がまばらに施文されている。色調黄褐色～黒色、胎土に細砂粒を多量に含み、焼成は良好。4は口縁部の破片で櫛状工具による縦区画と下位に横走文が施される。色調黄白色、胎土に大粒の石英を多量に含み、焼成は非常に良好。5は口縁部の破片で受け口状を呈する口唇部の内面と口縁部に縦位の条線が施されている。色調淡黄褐色、胎土に石英粒を含み、焼成は良好。6は口縁部の破片で口唇部に不明瞭な縄文が施文され、無文の口縁下位に沈線が僅かに見られる。色調淡黄褐色、胎土に石英粒と雲母細片を多量に含み、焼成は良好。7は頸部の破片で櫛状工具による鋸歯状文が施文されている。色調黒色、胎土に雲母細片を含み、焼成は概良好。8は壺形土器の胴部大形破片で器厚が比較的薄く、全面に横位の撫糸文が施文されている。色調明黄褐色、胎土に多量の石英粒と雲母細片を含み、焼成は良好。9～11は同一個体の破片で単沈線による格子状文が施文され、下位に単節斜縄文が施文される。色調明黄褐色、胎土には石英粒・砂粒を多量に含み、焼成は良好。12は胴部の破片で斜位及び縦位の撫糸文が施文されている。色調黄褐色、胎土に石英粒を多量に含み、焼成は良好。13は胴部の破片で横位の撫糸文が施文されている。色調淡黄褐色、胎土に石英粒を多量に含み、焼成は良好。内面に煤の付着が見られる。14は底部の破片で底部直上まで撫糸文が施文され、底部には木葉痕が残されている。色調黄褐色、胎土に大粒の石英を含み、焼成は良好。15～17は縄文時代中期初頭の遺物と推測される破片で、16・17には結節縄文が施文されている。色調にぶい灰褐色、胎土に大粒の石英を多量に含み、焼成は概良好。18は磨石兼叩き石で下端に叩き痕、上端に顕著な摩擦痕が観察される。長10.0cm、最大幅6.3cm、厚さ4.5cm、重量480gを測る。石材は安山岩。



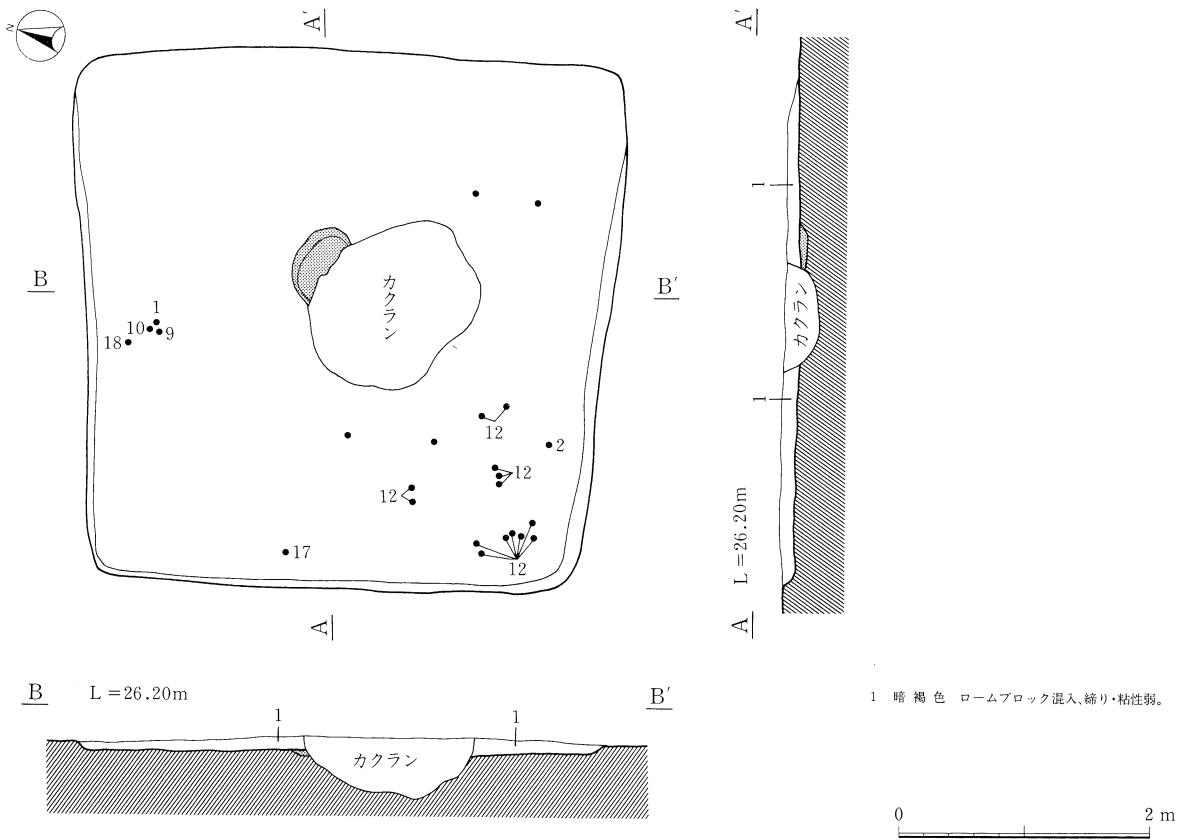
第24図 6号住居跡・出土遺物

#### 6号住居跡（第24図、図版12）

**位 置** 調査区南東E-6グリッドに位置する。  
**形 態** 西側壁部分以外は床面のみ遺存しており正確な形態は不明である。床面から推測される形態は隅丸方形基調と考えられる。  
**規 模** 東西3.20m+α、南北3.10m+α、壁高6cmを測る。  
**柱 穴** なし。  
**炉** 遺存床面のほぼ中央から地床炉を検出している。楕円形を呈し、長径50cm、短径45cmを測る。  
**床 面** 比較的硬質。  
**遺物出土状況** 弥生時代後期細片遺物が極少量出土している。  
**時 期** 出土遺物から弥生時代後期初頭から前半と推測される。

#### 6号住居跡出土遺物

1は頸部の破片で細竹管状工具による円形刺突が施文され、櫛状工具による縦区画が僅かに観察される。色調外面黒色、内面明褐色、胎土に石英粒を多量に含み、焼成は良好。2は底部の破片で底部直上まで縦位の撚糸文が施文され、底部はハの字状に外に張り出している。色調黄白色、胎土に石英粒と雲母細片を多量に含む。焼成は非常に良好。



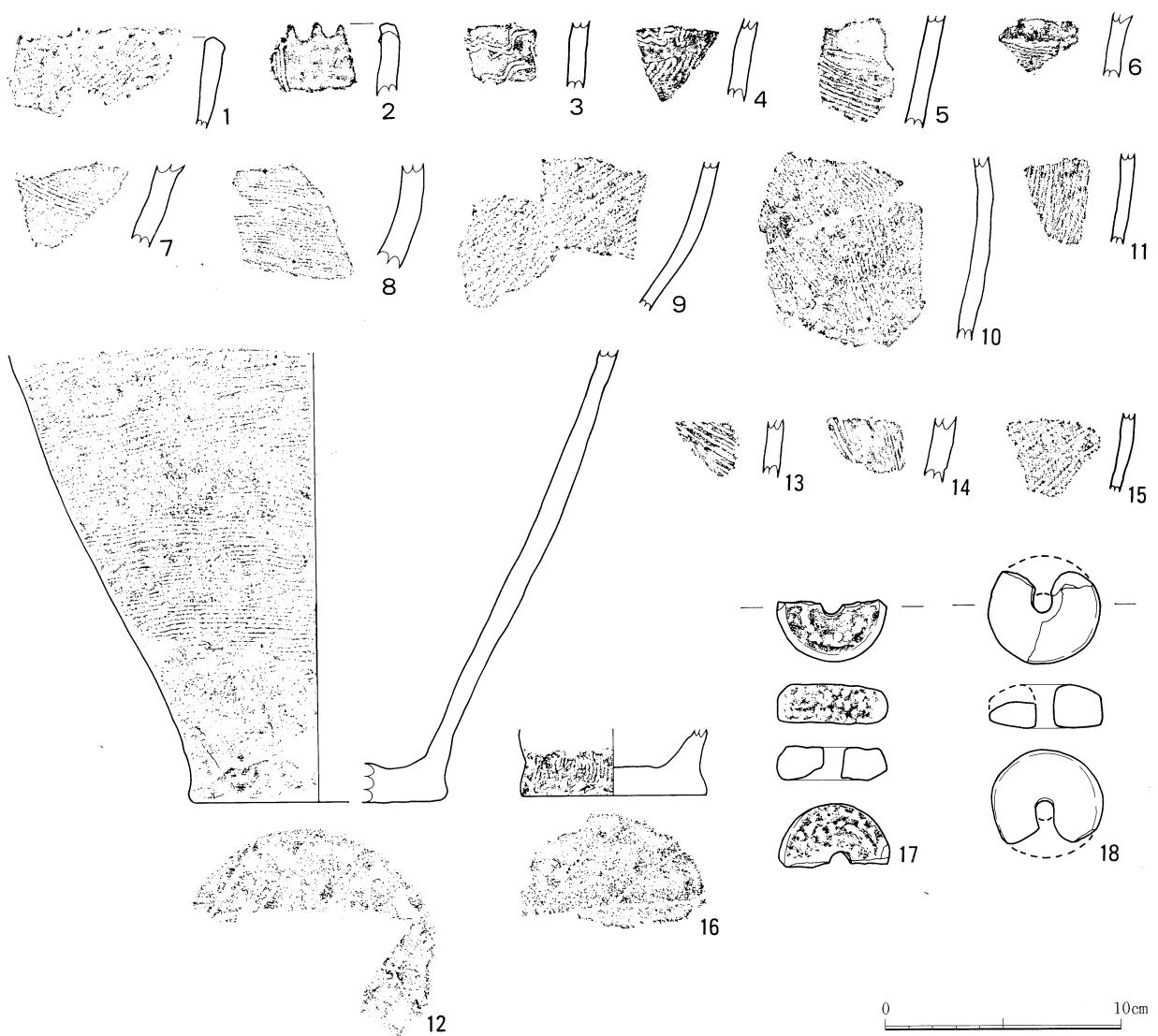
第25図 7号住居跡

#### 7号住居跡（第25・26図、図版12・13）

**位置** 調査区南側F-5グリッド北西に位置する。 **形態** 東側の壁部分が耕作によって消失しており性格な形態は不明である。床面から推測される形態は隅丸台形を呈する。 **規模** 東西4.20m、南北3.70m～3.90m～4.30m、壁高10cmを測る。 **柱穴** なし。 **炉** 中央部より地床炉を検出しているが木根により大部分が消失している。 **床面** 面を成すがやや軟弱である。 **遺物出土状況** 弥生時代後期土器破片が全体に散在して出土し、南側にやや集中している。遺物には大型壺下半部の接合資料、土製紡錘車等がある。 **時期** 出土遺物から弥生時代後期初頭～前半と推測される。

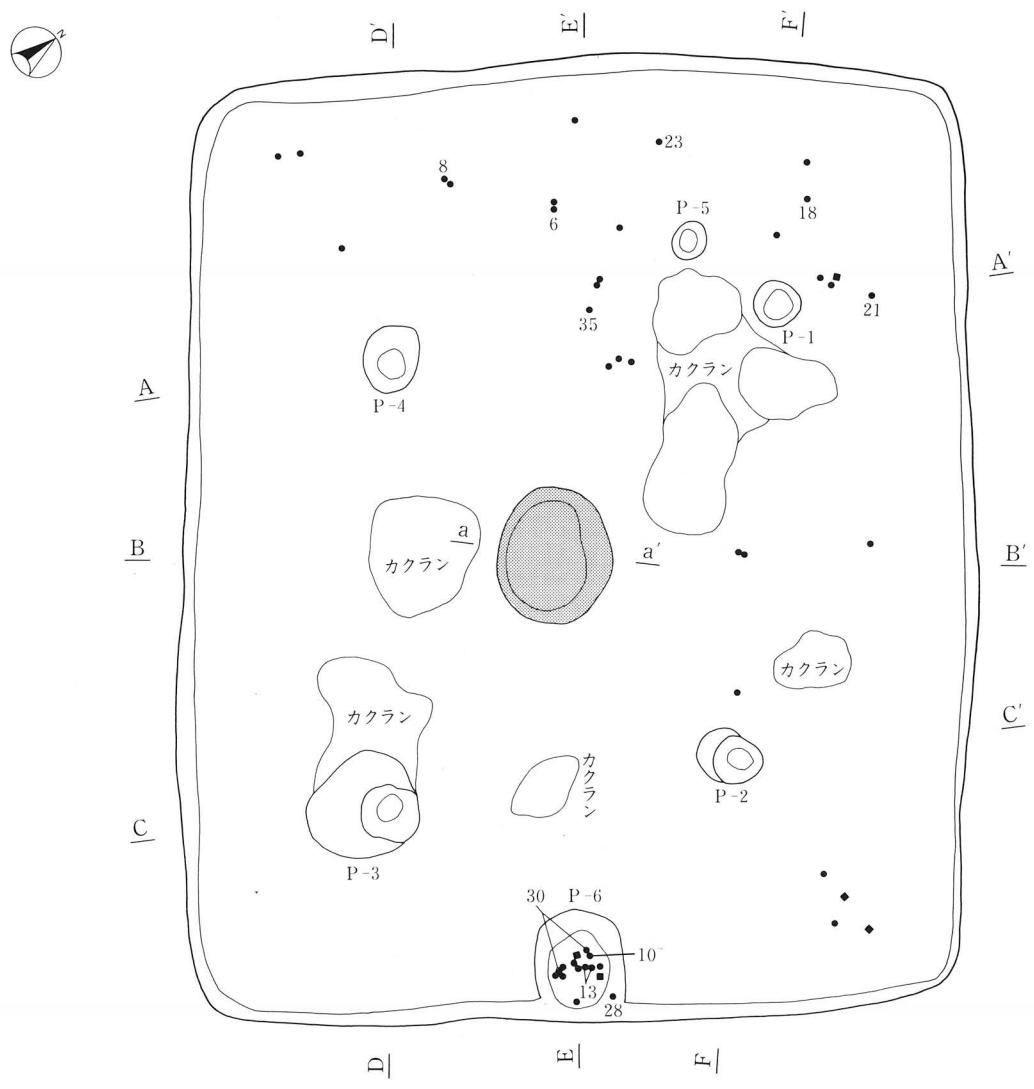
#### 7号住居跡出土遺物

1は口縁部の破片で横位の撲糸文がまばらに施文される。色調黒色、胎土に細砂粒を含み、焼成はやや不良。2は口縁部の破片で口唇部に棒状工具による押圧が加えられ、口縁部には櫛状工具による縦区画が僅かに観察される。色調灰白色、胎土に雲母細片を多量に含み、焼成は非常に良好。3は櫛状の二本同時施文具による波状文が施文される。色調灰白色、胎土に石英粒・雲母細片を含み、焼成は非常に良好。4は櫛状工具による波状文が施文され、下位に附加条第1種繩文が施文される。色調黒色、胎土に石英粒・雲母細片を含み、焼成は良好。5～8は胴部の破片でいずれも横位の撲糸文が施文されている。色調は6が灰褐色、5・7・8が黄褐色、胎土には石英粒・雲母細片を含み、焼成は5がやや不良、6・7・8は良好。9は胴部の破片で斜位の撲糸文が密に施文されている。色調暗褐色、細砂粒と雲母細片を多量に含み、焼成は概良好。外面に煤の付着が見られる。10は胴部の破片で、縦位の撲糸文がまばらに施文される。色調暗灰褐色、胎土に石英

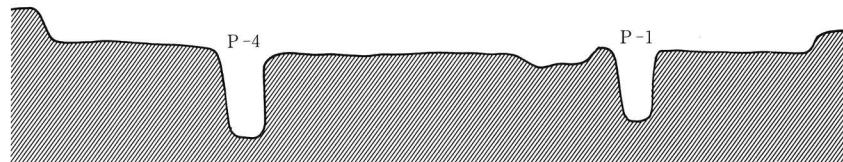


第26図 7号住居跡出土遺物

粒・砂粒を多量に含み、焼成は概良好。外面に煤の付着が見られる。11は胴部の小破片で縦位の撚糸文が施文されている。色調黄褐色、胎土に石英粒・雲母細片を含み、焼成は良好。12は底部から胴部中位に至る壺形土器の大形破片で推定底径11.0cmを測る。胴部には横位の撚糸文がまばらに施文され、ハの字状に外に張り出す底部には木葉痕が残されている。色調黄褐色～暗褐色、胎土に石英粒と雲母細片を含み、焼成は概良好。胴部中位には多量の煤が付着している。13～15は胴部の小破片で13・15は斜位の撚糸文、14は縦位の撚糸文が施文される。色調淡黄褐色、胎土に石英粒・雲母細片を含み、14は石英粒を多量に含んでいる。焼成は14がやや不良、13・15は良好。16はハの字状に外に張り出す底部の2分の1破片で底径8.0cmを測る。底部には木葉痕が残され、底部直上には縦位の撚糸文が施文されている。色調暗褐色～黄褐色、胎土に石英粒・砂粒を多量に含み、焼成はやや不良。17は約2分の1を欠損する土製紡錘車で全面に細かい刺突が加えられている。径4.6cm、孔径0.9cm、厚さ1.3cmを測る。色調褐色、胎土に大粒の石英を多量に含み、焼成は良好。18は約3分の1を欠損する無文の土製紡錘車で径4.7cm、孔径0.8cm、厚さ1.8cmを測る。色調灰褐色、胎土に石英粒を含み、焼成は概良好。

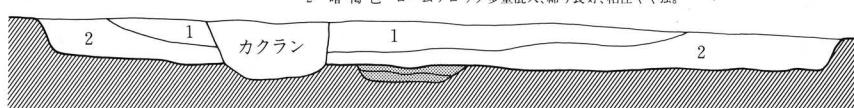


A L = 26.20m



B L = 26.20m

1 黒 色 ローム粒混入、縮り弱、粘性やや強。  
2 暗褐 色 ロームブロック多量混入、縮り良好、粘性やや強。

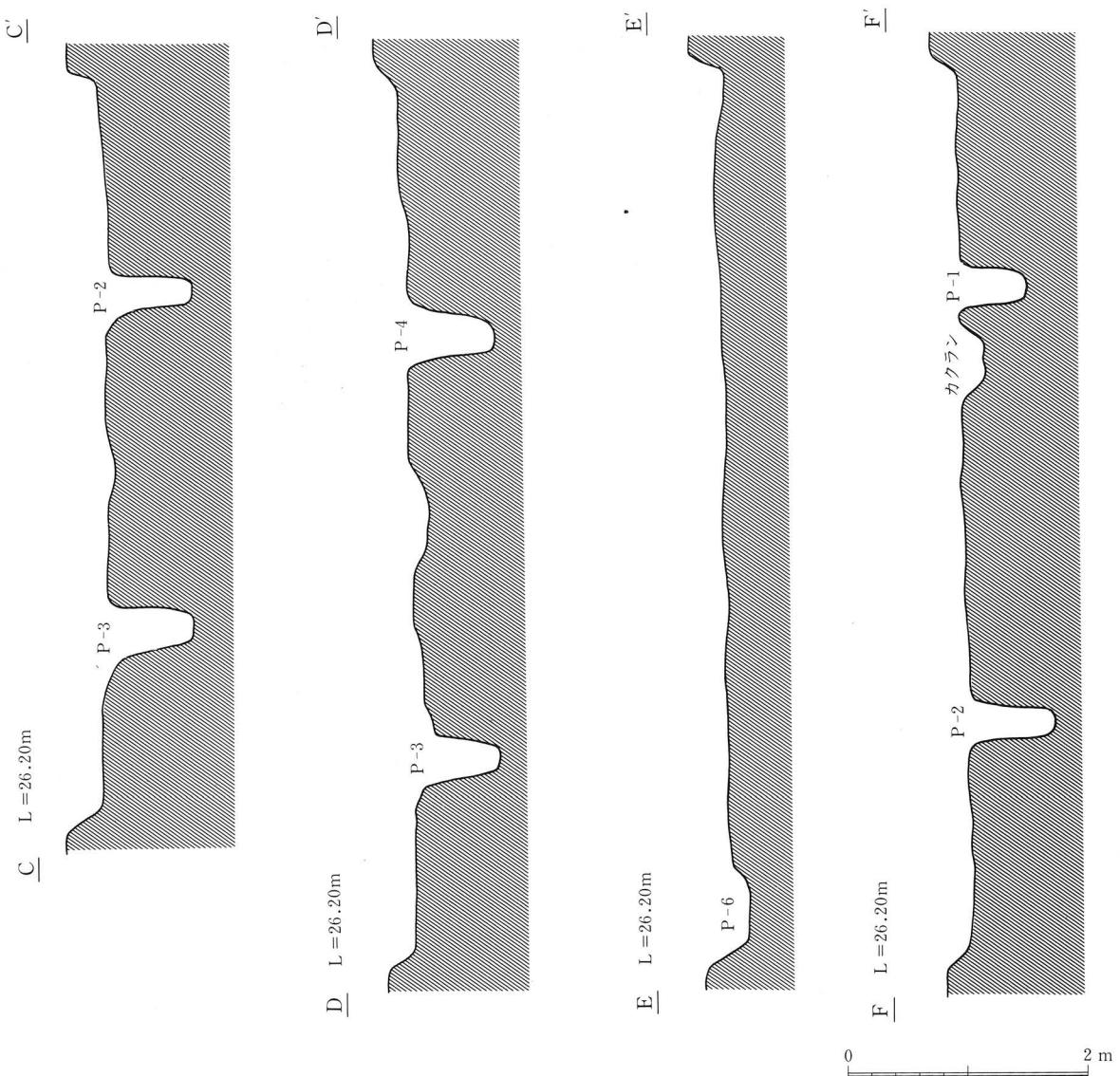


a L = 25.80m a'

1 暗赤褐色 焼土層、炭化粒混入、縮り・粘性弱。  
2 赤褐色 焼土層、縮り良好、粘性弱。



第27図 8号居住跡 (1)

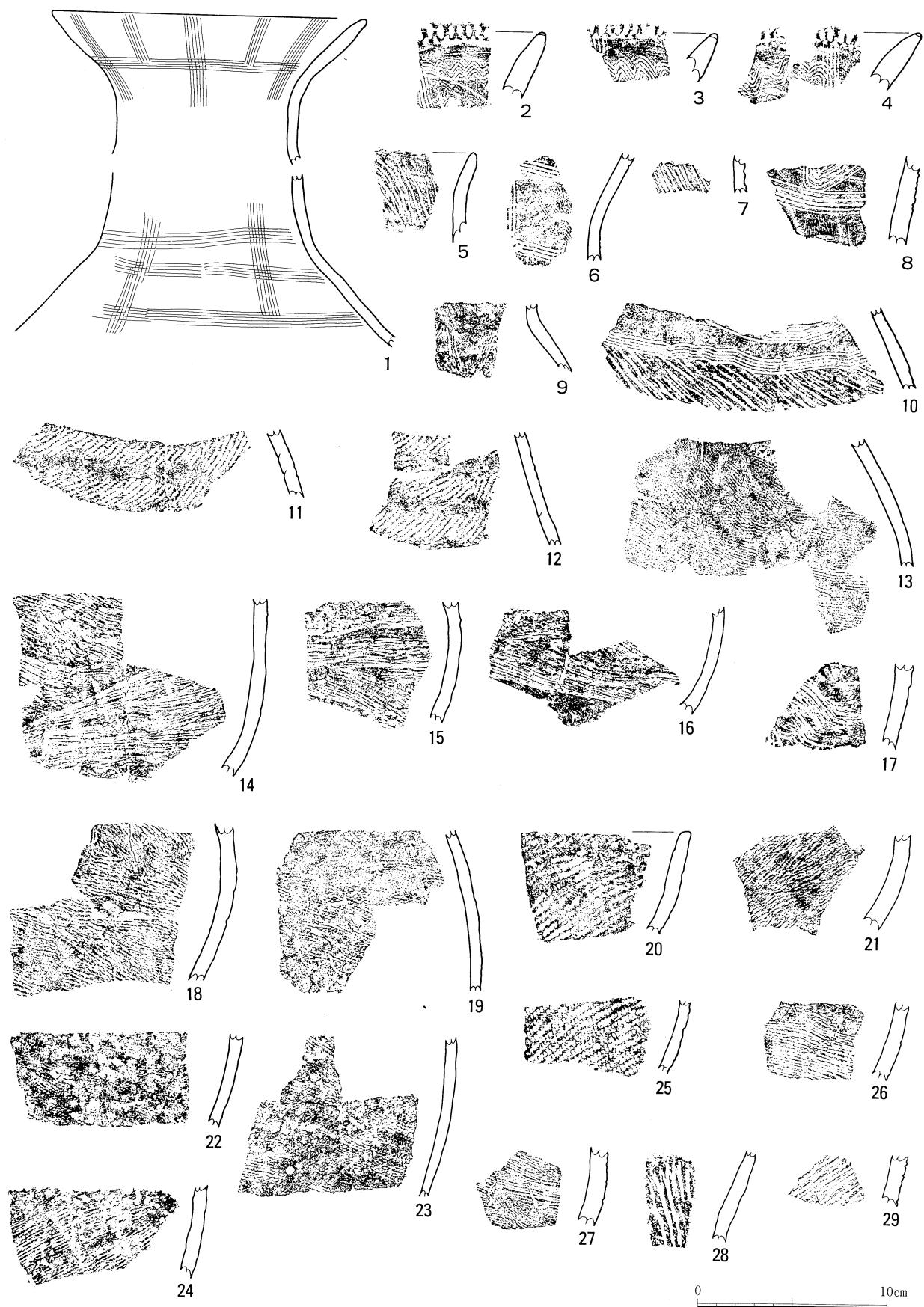


第28図 8号住居跡（2）

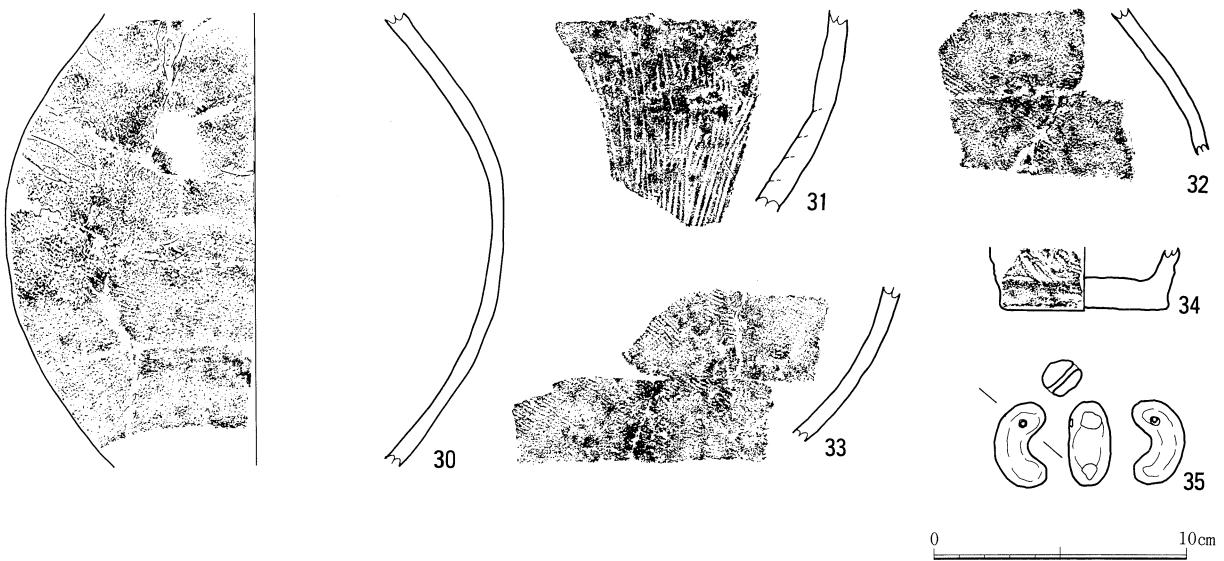
8号住居跡（第27～30図、図版14・15）

**位置** 調査区南端F-5・6グリッドに位置する。 **形態** 東西方向に長い隅丸長方形を呈する。 **規模** 長軸7.35m、短軸6.12m、壁高30cmを測る。主柱穴 P1～P4が相当し、径38cm～53cm、深60cm～70cmを測る。 **小ピット** P1横に位置するP5は柱穴状を呈し、径30cm、深さ26cmを測る。東壁中央に接して位置するP6は長径90cm、短径70cm、深さ20cmを測り、位置的に入口部に伴うピットの可能性が高い。 **炉** 中央部より地床炉を検出している。楕円形を呈し、長径108cm、短径90cmを測る。 **床面** 凹凸があり比較的軟弱であった。 **遺物出土状況** 弥生時代後期土器片が全体に散在して出土し、P6に細片遺物の集中が見られた。遺物量は比較的多く、土器破片の他に完形の土製勾玉一点が出土している。

**時期** 出土遺物から弥生時代後期初頭～前半と推測される。



第29図 8号住居跡出土遺物（1）



第30図 8号住居跡出土遺物（2）

#### 8号住居跡出土遺物

1は壺形土器の口縁部から頸部の破片接合資料で推定口径16.6cmを測る。口唇直下から頸部にかけて櫛状工具による縦区画と横線文が施文される。櫛状工具の櫛歯数は5もしくは6本。色調黄褐色～灰褐色、胎土に石英粒を含み、焼成は概良好。器面は風化が著しい。2・3・4は同一個体の口縁部破片である。いずれも先細る口唇部に刻みが施され、口縁部は櫛状工具による波状文と縦区画が施されている。櫛状工具の櫛歯数は5本。色調黒色～褐色、胎土に細砂粒を多量に含み、焼成は概良好。5は口縁部の破片で口唇部と口縁部に撲糸文が施文される。色調黄白色、胎土に石英粒と雲母細片を多量に含む。焼成は良好。6は頸部の破片で櫛状工具による縦区画と横線文が施文される。色調黄褐色、胎土に石英粒を多量に含み、焼成は良好。7は頸部の破片で撲糸文が施文されている。色調暗褐色、胎土に細砂粒と雲母細片を含み、焼成は概良好。8は胴部上位の破片と推測され、櫛状工具による横線文と波状を呈すると推測される曲線文が施文され、下位には撲糸文が見られる。櫛状工具の櫛歯数は5本。色調にぶい黄褐色、胎土に石英粒と雲母細片を多量に含み、焼成は良好。9は頸部の破片で櫛状工具による波状文が施文されている。櫛状工具の櫛歯数は4もしくは5本。色調暗褐色、胎土に石英粒を含み、焼成は概良好。外面には煤の付着が著しい。10は胴部上位の破片で頸部に櫛状工具による波状に近い横線文が施文され、下位に斜位の撲糸文が施文される。櫛状工具の櫛歯数は5本。色調、黄白色～淡赤褐色、胎土に砂粒・石英粒・雲母細片を含み、焼成は良好。11・12は胴部上位の破片で単節L R斜繩文が多段に施文され、繩文間に狭い空白部分を有する。色調淡赤褐色、胎土に石英粒と多量の雲母片を含み、焼成は良好。内面には明瞭な輪積痕を残している。13は胴部の破片で斜位及び横位の撲糸文がまばらに施文される。色調黒色～灰褐色、胎土に石英粒・砂粒を多量に含み、焼成は良好。14・15・16は同一個体の胴部破片でいずれも横位の撲糸文が施文されている。色調暗灰褐色～黒色、胎土に砂粒・石英粒・雲母細片を含み、焼成は概良好。外面には煤が多量に付着している。17は胴部の破片で撲糸文がまばらに施文されている。色調暗灰褐色、胎土に多量の石英粒・雲母細片を含み、焼成は良好。18と21は同

一個体の胴部破片で横位及び斜位の撚糸文が施文されている。色調外面黒色～暗褐色、内面淡褐色、胎土に細砂粒と石英粒を含み、焼成は概良好。19・22・23は同一個体の胴部破片でいずれも横位及び斜位の撚糸文がまばらに施文されている。色調黄白色～淡褐色、胎土に石英粒・雲母細片を含み、焼成は良好。20は胴部の破片で単節斜縄文が施文されている。色調褐色、胎土に石英粒・雲母細片を多量に含み、焼成はやや不良。外面には煤の付着が見られる。24は胴部の破片で斜位の撚糸文が施文されている。色調明黄褐色、胎土に大量の石英粒と雲母細片を含み、焼成は良好。25は胴部の破片で単節斜縄文が施文されている。色調外面褐色、内面黒色、胎土に細砂粒・雲母細片を含み、焼成はやや不良。外面には煤の付着が見られる。26は胴部の破片で横位の撚糸文が施文される。色調にぶい黄白色、胎土に少量の砂粒・雲母細片を含み、焼成は良好。27は胴部の破片で横位及び斜位の撚糸文が施文される。色調褐色、胎土に少量の細砂粒を含み、焼成は良好。28は胴部の破片で縦位の撚糸文が施文される。色調明外面黄褐色、内面黒色、胎土に多量の石英粒と雲母細片を含み、焼成は概良好。29は胴部の破片で斜位の撚糸文が施文される。色調暗褐色、胎土に石英粒・雲母細片を含み、焼成は概良好。30は胴部の破片接合資料で32・33は同一個体と思われる。斜位の撚糸文が施文されているが、器面が風化が著しく文様は不明瞭である。色調外面黄褐色、内面暗褐色、胎土に多量の石英粒を含み、焼成は概良好。31は胴部下位の破片で縦位の集合細沈線が密に施文されている。色調暗褐色、胎土に細砂粒を含み、焼成は良好。外面に煤が多量に付着している。34は底部の破片で胴部に撚糸文が施文されている。色調褐色、胎土に多量の石英粒・雲母細片を含み、焼成は良好。35は完形の土製勾玉で長3.4cm、厚さ1.5cm、孔径0.2cmを測る。色調淡黄褐色、胎土に多量の石英粒を含み、焼成は良好。

## 第2節 土坑（第31図、図版16）

土坑は調査区中央D-4グリッドより2基検出された。いずれも出土遺物はなく詳細は不明であるが、形態的に縄文時代の陥し穴状土坑の可能性が高い。

1号土坑 形態 隅丸長方形。 規模 上面長軸2.35m、短軸1.65m、底面長軸1.86m、短軸0.45m、深さ1.20mを測る。 長軸方向 N-82°-W。

2号土坑 形態 長楕円形。 規模 上面長軸2.43m、短軸1.20m、底面長軸1.80m、短軸0.36m、深さ1.12mを測る。 長軸方向 N-66°-W。

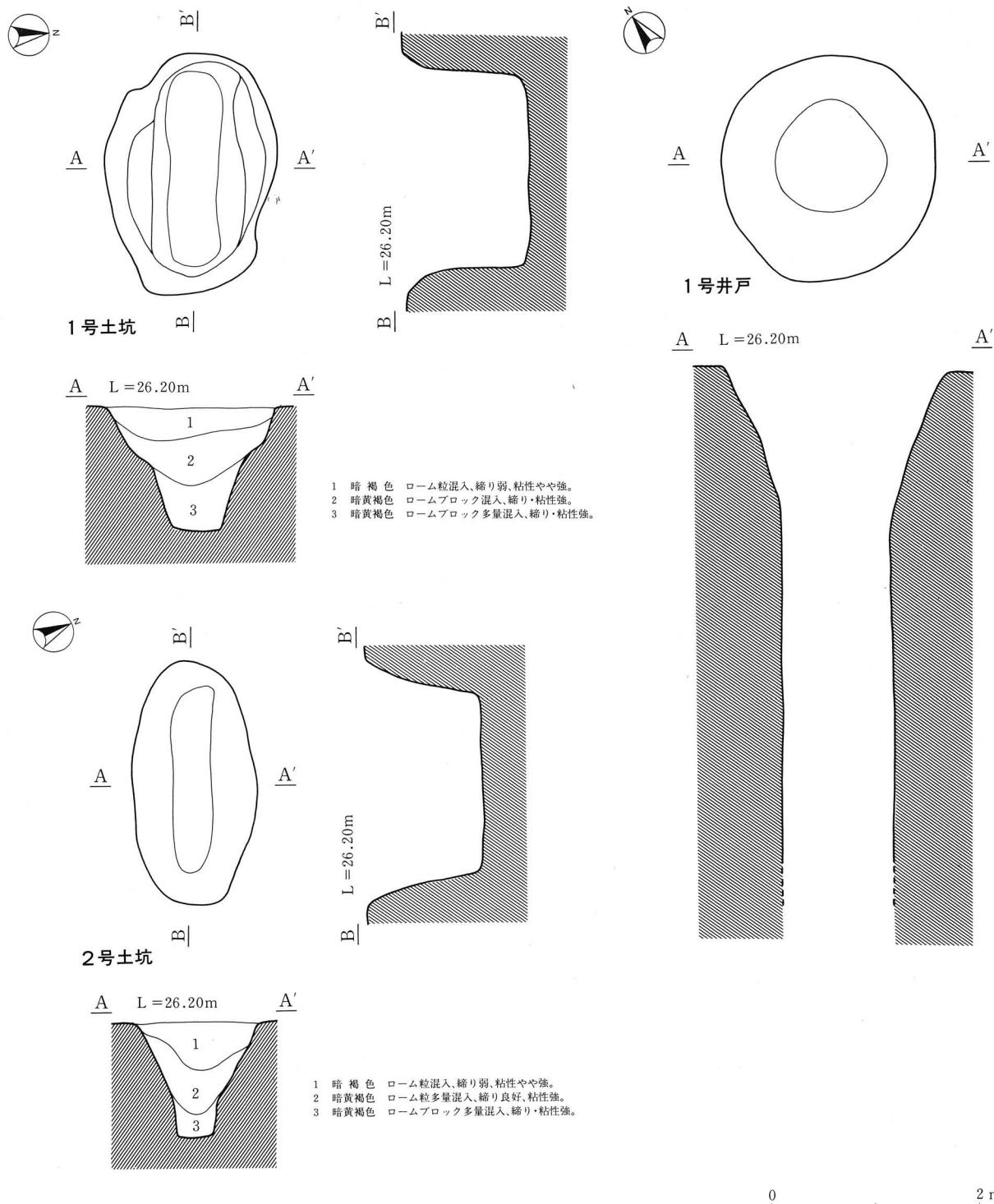
## 第3節 井戸跡（第31図、図版16）

井戸跡は調査区中央南側E-4グリッドに位置し、断面形が漏斗状を呈する素掘りの井戸である。上面径2.20m、上面以下は径1.10mを測り、深さは5m以上を測る。危険防止の為、完掘には至らず埋め戻しを行った。出土遺物がなく正確な時期は不明であるが、覆土の状況から近世以降の所産と推測される。

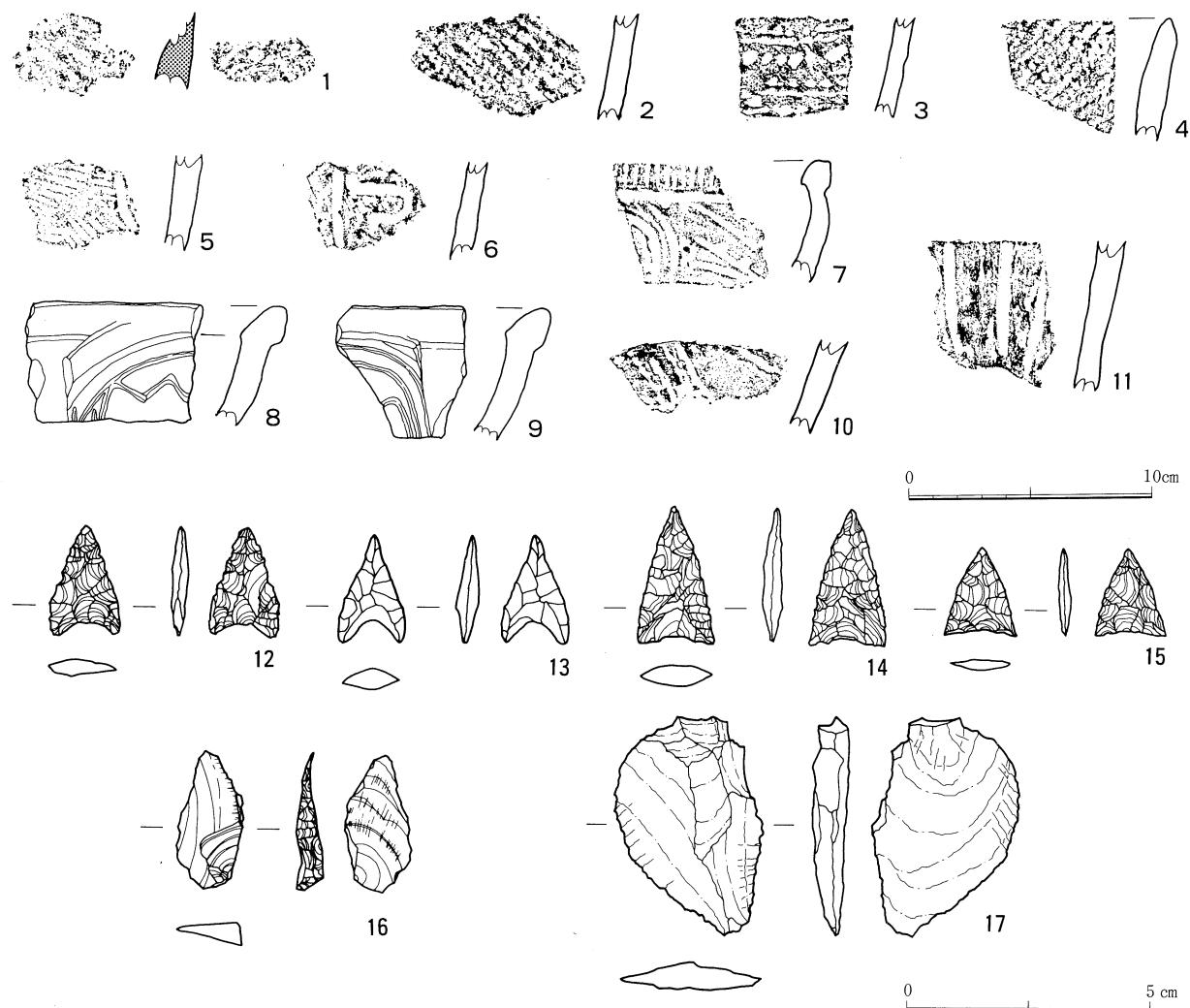
## 第4節 遺構外出土遺物（第32図、図版16）

### 縄文土器

1は早期末条痕文系の遺物で胎土に大量の纖維を含んでいる。色調外面黄褐色、内面暗褐色、焼成はやや不良。2～5は前期の遺物と考えられる。2は0段多条の縄文が施文され、胎土に細砂粒を含む。色調暗灰褐色、焼成はやや不良。3は浮島式の破片で連続爪形文が施文されている。色調淡赤褐色、胎土に細砂粒を含み、焼成は良好。4は縄文が施文される口縁部の破片で色調淡黄褐色、胎土に細砂粒を含み、焼成は良好。5は胴部の破片で無節縄文と曲沈線が施文されている。色調褐色、胎土に大粒の石英・長石等を大量に含み、



第31図 土坑・井戸跡



第32図 遺構外出土遺物

焼成は良好。6～9は中期前半五領ヶ台式から阿玉台式にかけての遺物と考えられる。6は太い曲沈線で文様が描かれ、地文に縄文が施文されている。色調暗赤褐色、胎土に細砂粒を含み、焼成は良好。7は口縁部の破片で沈線と印刻文で文様が構成される。色調淡赤褐色、石英粒・砂粒・雲母片を含み、焼成は良好。8・9は同一個体の口縁部破片で口縁内側に稜を持ち、口唇部から続く隆帯に沿って沈線で文様が構成される。色調8が黄褐色、9が暗褐色、胎土に石英粒を多量に含み、焼成は概良好。10は中期中葉阿玉台式の遺物と考えられる。隆帯に沿って半截竹管の押し引き文が施文される。色調暗褐色、胎土に石英粒と雲母片を含み、焼成は良好。11の胴部下位の破片は中期後半の遺物と考えられる。太い縦位の沈線が引かれ、色調明褐色、胎土に石英粒と雲母細片を含み、焼成は良好。

#### 石 器

12～15は石鏃である。12・13は基部の抉りが大きい凹基無茎鏃、14・15は基部の抉りが僅かで三角鏃に近い形状を呈している。12は長2.3cm、厚さ0.3cm、重量0.9gを測る。石材はチャート。13は長2.2cm、厚さ0.4cm、重量0.7gを測り、白色で非常に軟質な石材を使用している。14は長2.8cm、厚さ0.4cm、重量1.5gを測る。石材はチャート。15は長1.8cm、厚さ0.2cm、重量0.6gを測る。石材はチャート。16は黒曜石製のナイフ形石器と考えられる。調整は一方の側縁のみ施されている。長2.8cm、最大幅1.3cm、厚さ0.5cm、重量1.4gを測る。17は安山岩の剥片で長4.6cm、最大幅2.9cm、厚さ0.6cm、重量8.0gを測る。

## 第6章 調査の成果

東山団地遺跡の調査の結果、弥生時代後期の住居跡5軒、古墳時代中期の住居跡2軒、古墳時代後期の住居兼鍛冶工房跡1軒が検出され、遺跡の立地する台地上に当該期の集落が展開することが確認された。本章では本遺跡の主体となる弥生時代後期の住居跡と、古墳時代後期の鍛冶工房跡について補足の説明を加え、調査のまとめとしたい。

### 弥生時代

総数5軒検出された弥生時代後期の住居跡は、平面隅丸方形・長方形を基本としていずれも中央部分に地床炉を有している。確認面からの掘り込みは浅く、床面は比較的軟弱であった。柱穴は最も大形の8号住居跡と4号住居跡から位置的に主柱穴と考えられるピットを検出しているが、他の住居跡からは不規則な小ピットを検出したに留まっている。尚、4・5・8号住居跡からは床面中央線上の壁際から深い掘り込みが検出されている。この掘り込みは当該期の住居に用いられる入口施設に伴うピット、いわゆる入口ピットの可能性が指摘される。

出土土器はほとんどが小破片であったが、接合資料に器形の窺えるものが数点あり、比較的良好な資料と思われる。器種は壺形・甕形土器で、施文の特徴を見ると、口唇部は刻み・弾圧が加えられるものが最も多く、無文のもの、縄文が施文されるものが見受けられる。口縁には複合口縁と単口縁があり、口縁部～頸部にかけては、櫛状工具による波状文・横線文・縦線文、細沈線による格子状文等の文様が描かれ、細竹管状工具による刺突文、撚糸文が施文されるものも見受けられる。又、頸部に無文帯を有するものもある。胴部には撚糸文・附加条第1種縄文・単節縄文が施文され、主体となる撚糸文は縦位・斜位・横位のいずれか一定方向に施文されるが、比較的ランダムな施文の印象を受ける。底部は木葉痕を残すタイプがポピュラーである。周辺地域での類例として竜ヶ崎市屋代遺跡出土土器（仮称屋代式土器）が挙げられ、時期的には後期の初頭～前半と推測される。供出する土製品には土製紡錘車、土製勾玉、手捏土器等があり、土製紡錘車は細竹管状工具による刺突列が施されるタイプが目立つ。石器では磨石・叩き石・磨製石鎌が出土している。

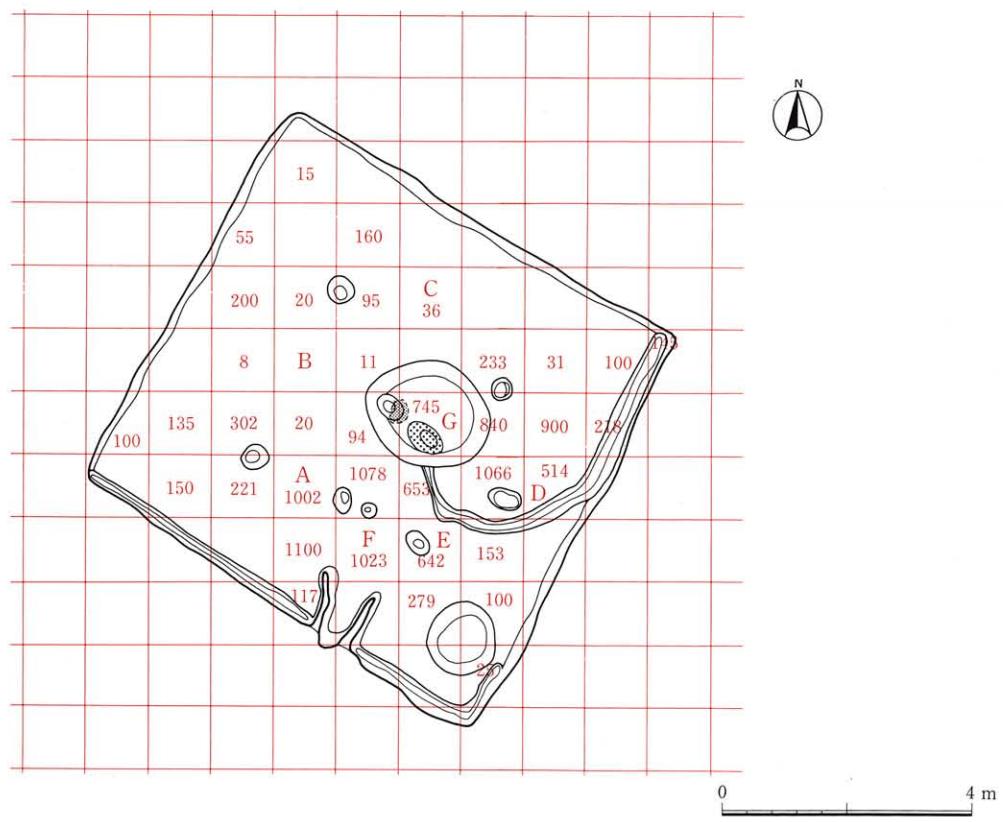
### 4号住居跡出土の磨製

石鎌は茨城県内での出土事例が殆どないが、同じ北関東の群馬県では熊野堂遺跡、内匠日影周地遺跡、白倉下原遺跡等で弥生時代後期前半の磨製石鎌工房跡が検出され<sup>(注1)</sup>、遺跡からの出土事例も多い。当該期の地域的な文化の違いと地域間の交流が想起される遺物といえよう。

### 古墳時代後期鍛冶工房跡

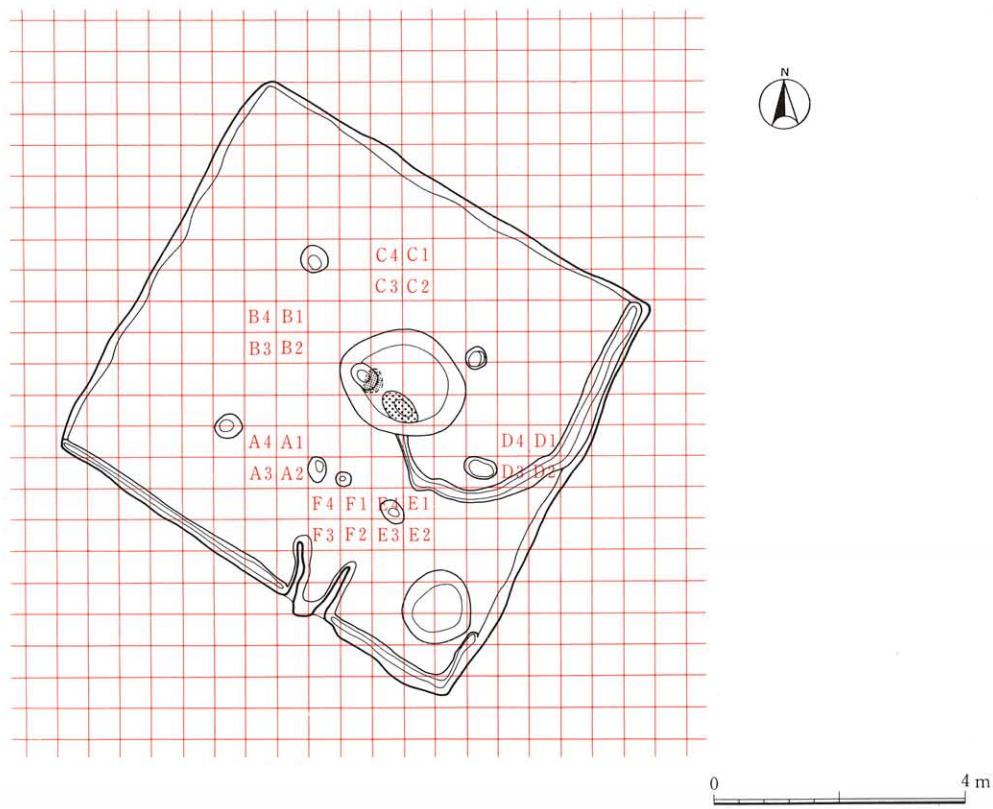
本遺跡から検出された鍛冶工房跡は調査区の北西端から検出された1号住居跡である。初原的なカマドが南側に付設される住居からは鉄滓・羽口・砥石・鍛造剥片・粒状滓等の鍛冶関連遺物が多量に出土し、鍛冶炉は中央部に位置する楕円形の深い掘り込み（鍛冶施設）西端部から検出された。

本構造の調査は鍛冶作業の段階及び作業空間を明らかにする目的で、覆土最下層・床面土の取り上げ調査を行った。その際、グリッド杭に合わせた1m方眼で覆土最下層の取り上げを行い、床面土は1m方眼を16分割して25cm方眼での取り上げを行った。整理作業段階において全面洗浄・選別が不可能であった為、覆土最下層は鍛冶施設の周辺5ヶ所（A～E）+1ヶ所（F）を抽出して50cm方眼での洗浄・選別を行った。更に、鍛冶施設内に位置する鍛造剥片が集中するピットの覆土（G）も洗浄・選別作業を行い、鍛造剥片・粒状滓を抽出した。第33・34図がその抽出位置図である。抽出された鍛造剥片・粒状滓は図下に重量で表し、



第33図 1号住居跡方眼抽出図（覆土）

A	鍛造剥片 103.44 g	粒状滓 0.51 g	鉄滓 1,002 g	
B	鍛造剥片 0.44 g	粒状滓 0.15 g	鉄滓 0 g	
C	鍛造剥片 0.28 g	粒状滓 0.10 g	鉄滓 36 g	
D	鍛造剥片 0.64 g	粒状滓 0.15 g	鉄滓 514 g	
E	鍛造剥片 18.68 g	粒状滓 0.42 g	鉄滓 642 g	
F	鍛造剥片 ——	粒状滓 ——	鉄滓 1,023 g	※床面のみ抽出
G	鍛造剥片 436.05 g	粒状滓 6.54 g	鉄滓 745 g	※鍛造剥片集中ピット覆土



第34図 1号住居跡方眼抽出図（床面）

A - 1	鍛造剥片 25.17 g	粒状滓 0.42 g	D - 1	鍛造剥片 0.40 g	粒状滓 なし
A - 2	鍛造剥片 22.47 g	粒状滓 0.37 g	D - 2	鍛造剥片 0.22 g	粒状滓 なし
A - 3	鍛造剥片 4.59 g	粒状滓 0.16 g	D - 3	鍛造剥片 0.44 g	粒状滓 0.11 g
A - 4	鍛造剥片 25.79 g	粒状滓 0.31 g	D - 4	鍛造剥片 1.12 g	粒状滓 0.13 g
B - 1	鍛造剥片 0.41 g	粒状滓 0.13 g	E - 1	鍛造剥片 3.27 g	粒状滓 0.19 g
B - 2	鍛造剥片 0.78 g	粒状滓 0.08 g	E - 2	鍛造剥片 0.90 g	粒状滓 0.12 g
B - 3	鍛造剥片 0.69 g	粒状滓 0.14 g	E - 3	鍛造剥片 2.52 g	粒状滓 0.12 g
B - 4	鍛造剥片 0.38 g	粒状滓 なし	E - 4	鍛造剥片 12.22 g	粒状滓 0.25 g
C - 1	鍛造剥片 0.27 g	粒状滓 なし	F - 1	鍛造剥片 28.41 g	粒状滓 0.52 g
C - 2	鍛造剥片 0.30 g	粒状滓 0.12 g	F - 2	鍛造剥片 1.29 g	粒状滓 なし
C - 3	鍛造剥片 0.29 g	粒状滓 なし	F - 3	鍛造剥片 1.44 g	粒状滓 なし
C - 4	鍛造剥片 0.22 g	粒状滓 なし	F - 4	鍛造剥片 21.77 g	粒状滓 0.22 g

# HIGASHIYAMADANCHI SITE

## ARCHAEOLOGICAL EXCAVATION REPORT

### CONTENTS

Preface

Aknowlegement

Legend

1. Background of the investigation.....	1
2. Location and environment of the sites .....	1
3. Method and Process of the investigation .....	3
3-1. Proces of the investigation .....	3
3-2. Proceedings of the investigation .....	3
4. Stratification of the sites.....	5
5. Excavated remains and artifacts .....	7
5-1. Pit dwelling .....	9
5-2. Earthen pit .....	36
5-3. Well .....	36
5-4. Artifacts from external .....	38
6. Result of the investigation .....	39

English abstract

Photo plate

Abstract

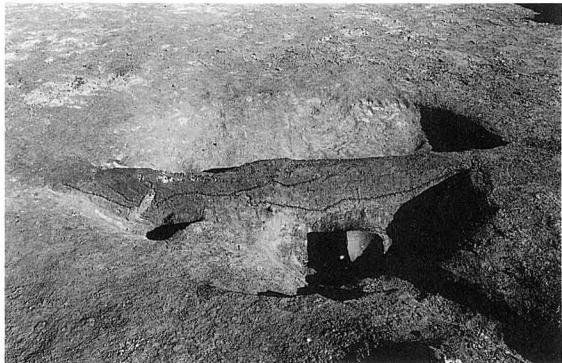
# 写 真 図 版



1. 1号住居跡遺物出土全景



2. 同 鍛冶施設全景



1. 1号住居跡鍛冶施設土層状況



2. 同 鍛冶施設全景



3. 同 鍛冶炉近景



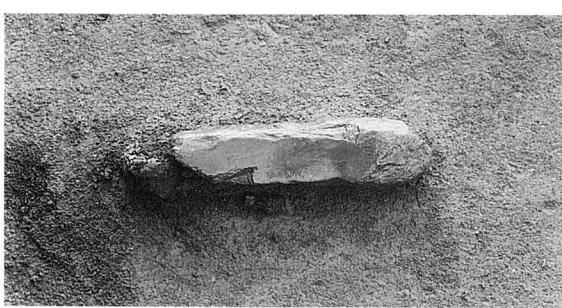
4. 同 遺物出土状況



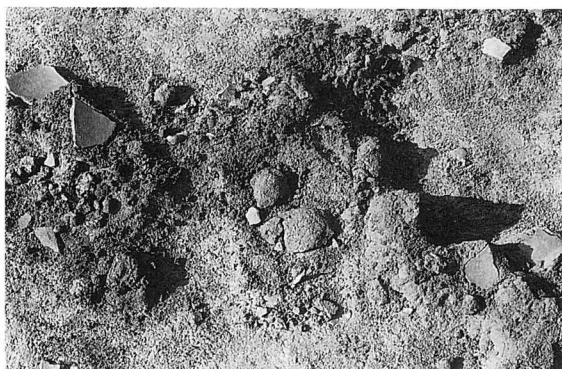
5. 同 羽口出土近景



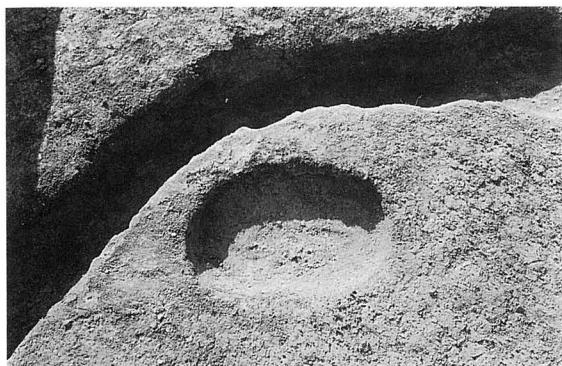
6. 同 遺物出土状況



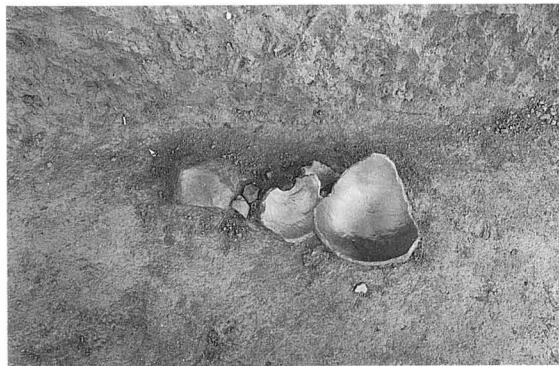
7. 同 砥石出土近景



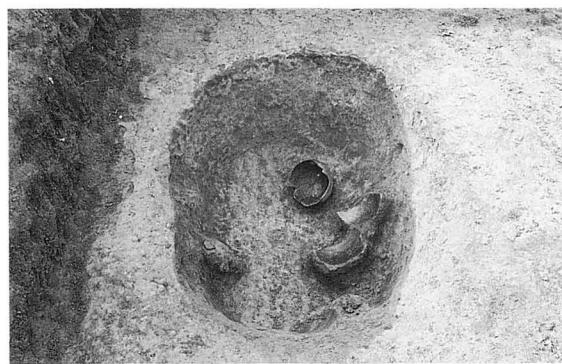
8. 同 鉄滓出土近景



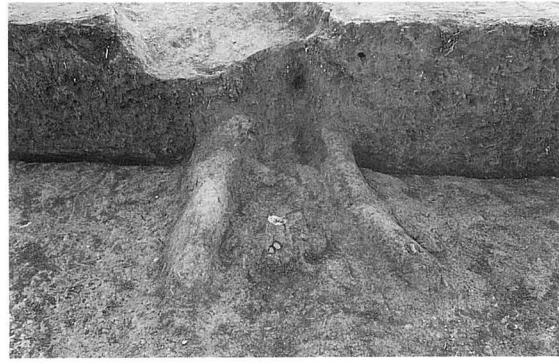
1. 1号住居跡 P 5・溝近景



2. 同 遺物出土近景



3. 同 貯蔵穴遺物出土状況



4. 同 カマド近景



5. 同 完掘全景

図版  
4

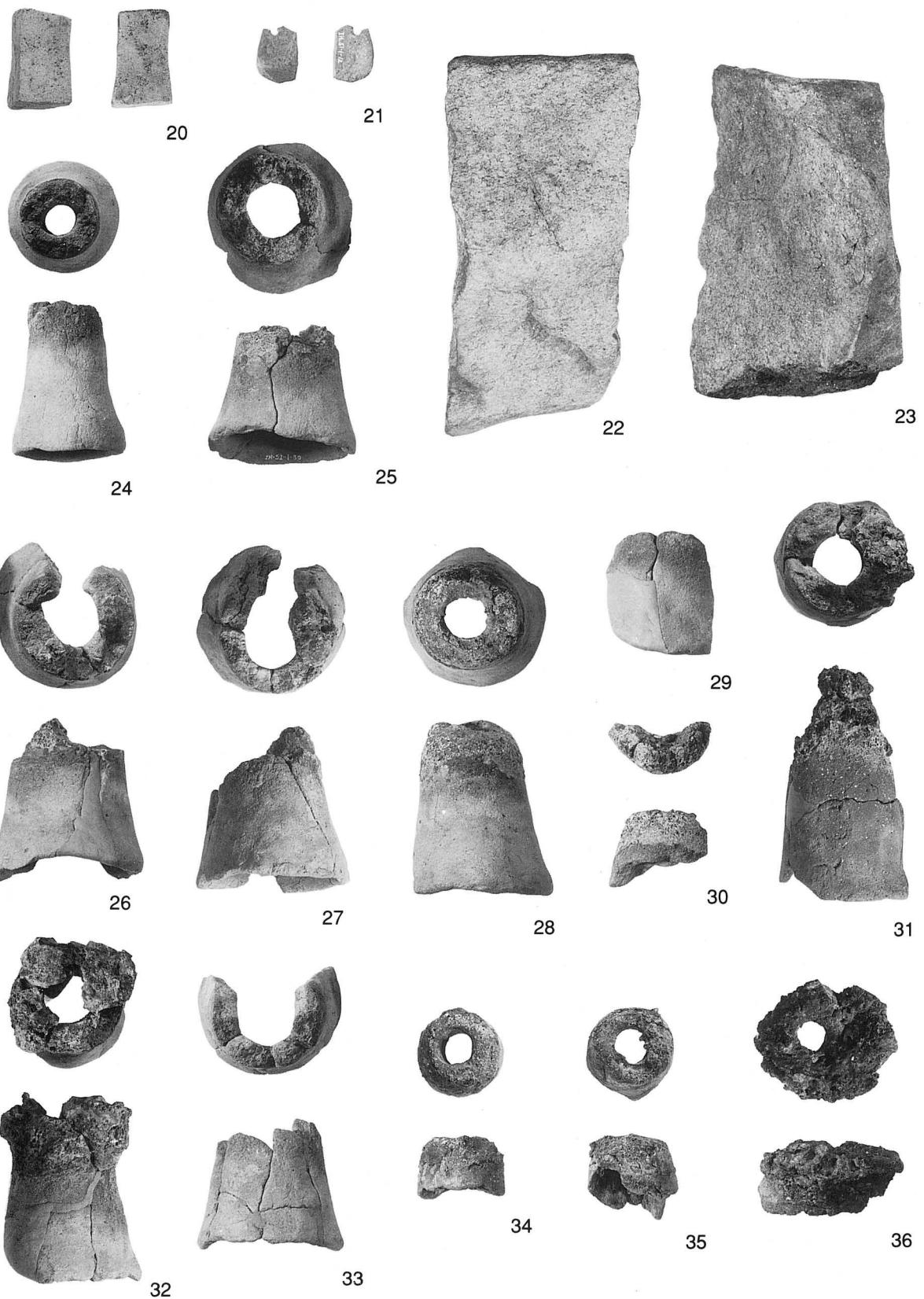


1号住居跡出土遺物（1）

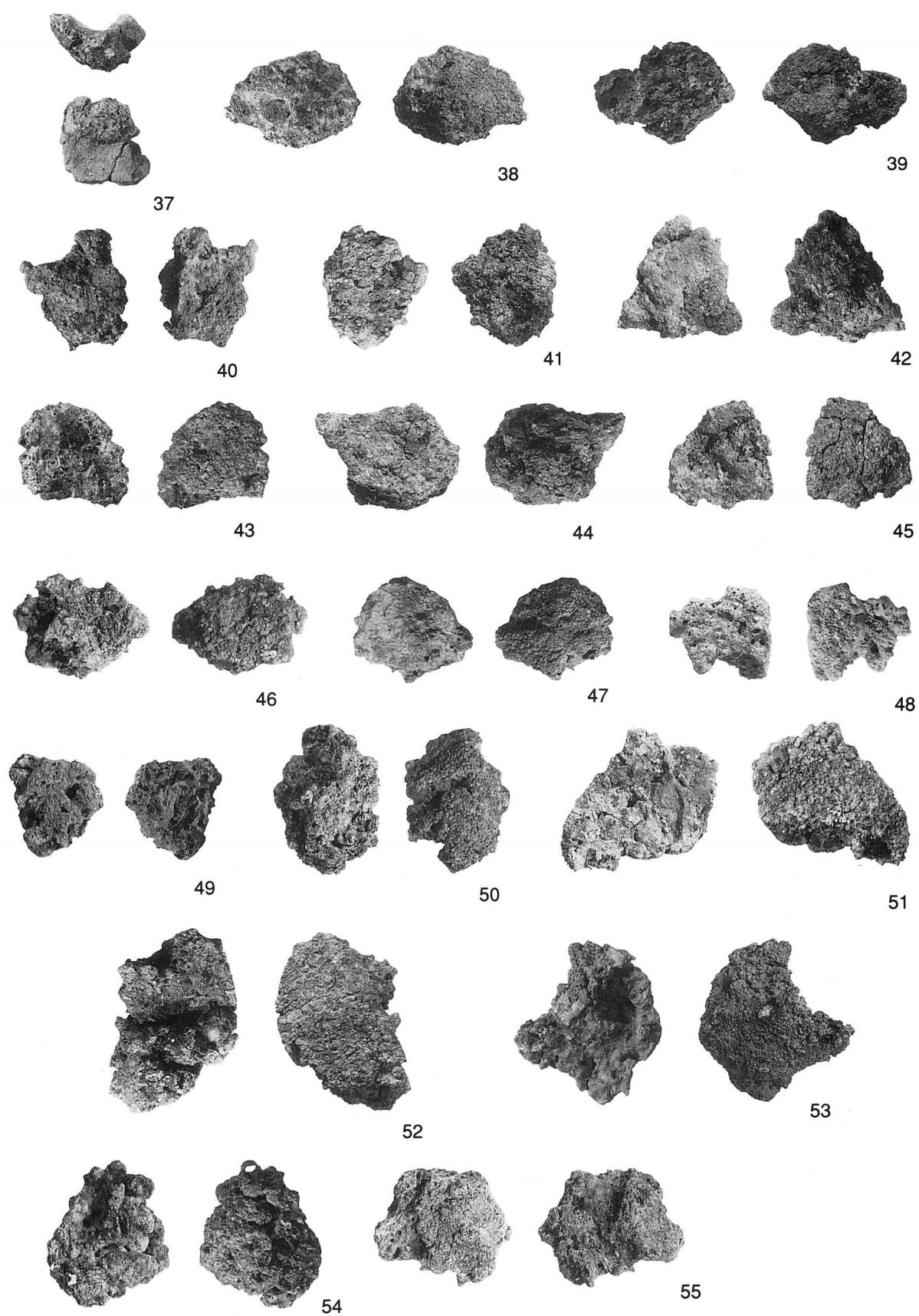


1号住居跡出土遺物（2）

図版  
6



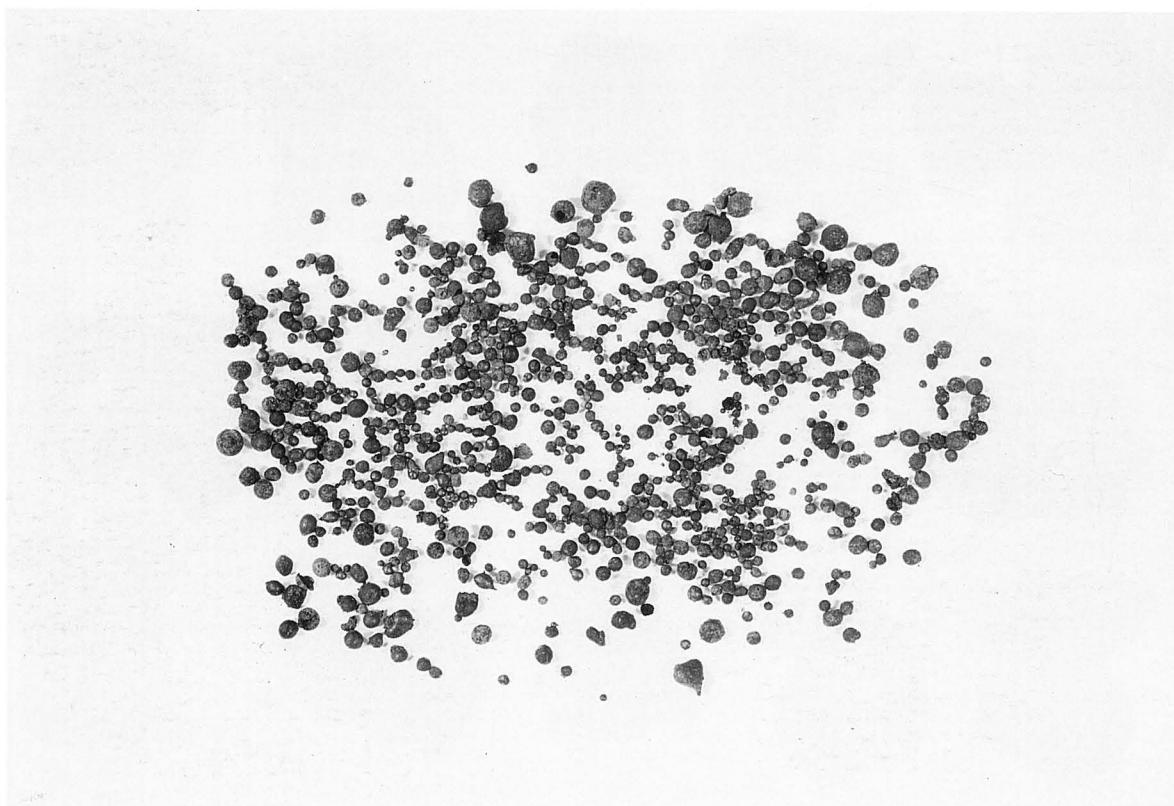
1号住居跡出土遺物（3）



1号住居跡出土遺物（4）



1. 1号住居跡出土鍛造剥片



2. 同 粒状滓



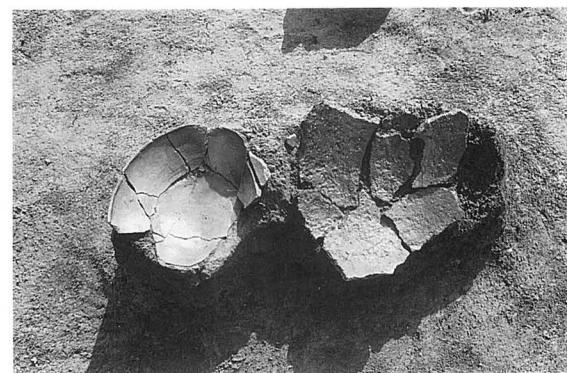
1. 2号住居跡土層状況



2. 同 遺物出土全景



3. 同 遺物出土近景



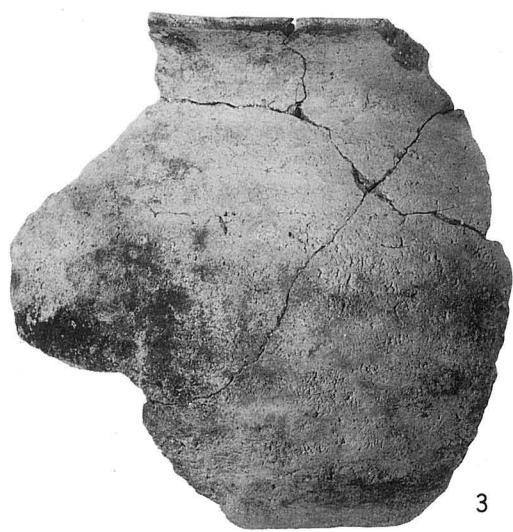
4. 同 遺物出土近景



1



2



3



4

5. 同 出土遺物



1. 3号住居跡土層狀況



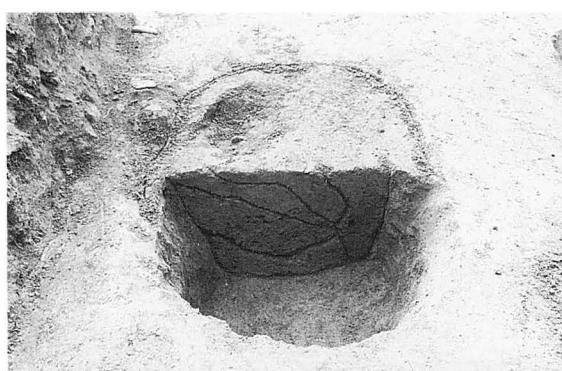
2. 同 遺物出土全景



3. 同 遺物出土近景



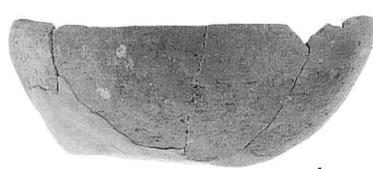
4. 同 炉確認状況



5. 同 貯藏穴土層狀況



6. 同 貯藏穴



1



2

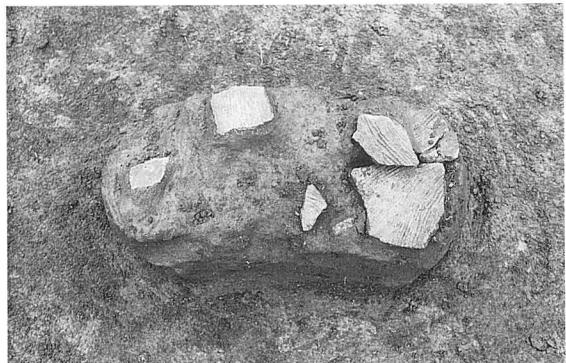


3

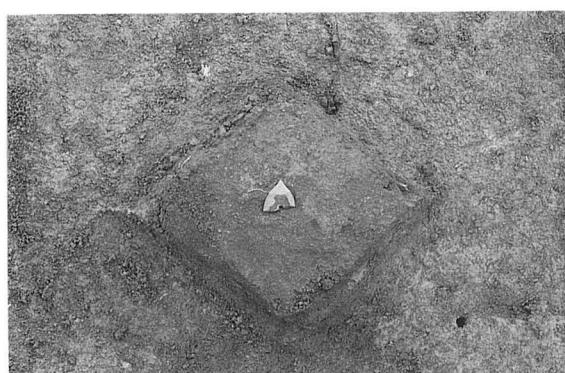
7. 同 出土遺物



1. 4号住居跡遺物出土全景



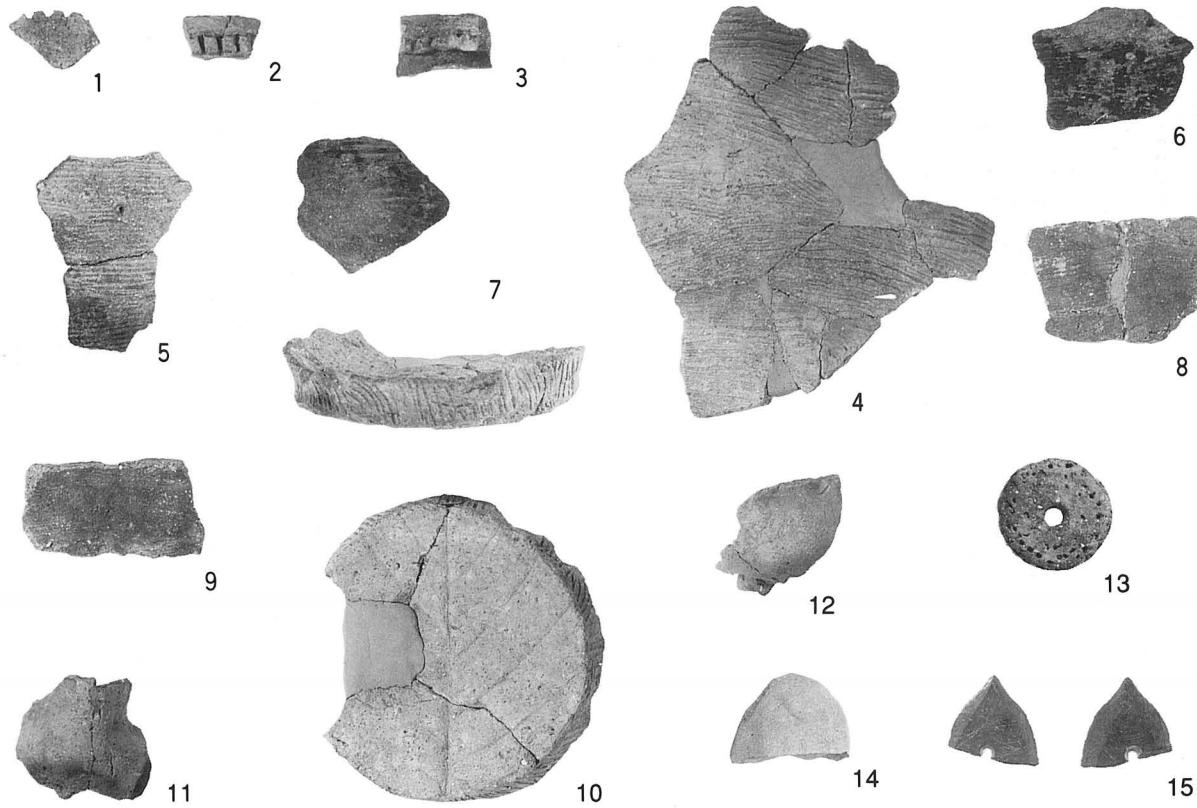
2. 同 遺物出土近景



3. 同 磨製石鏟出土近景

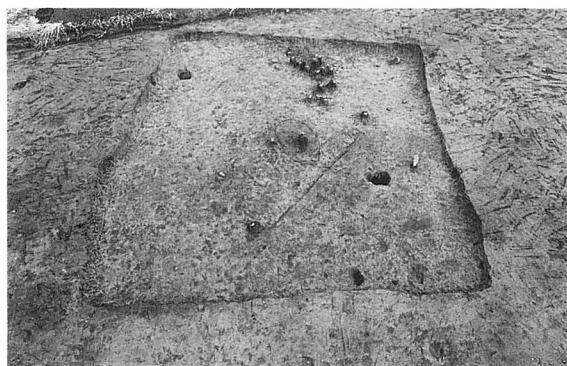


4. 同 爐遺物出土状況



5. 同 出土遺物

図版  
12



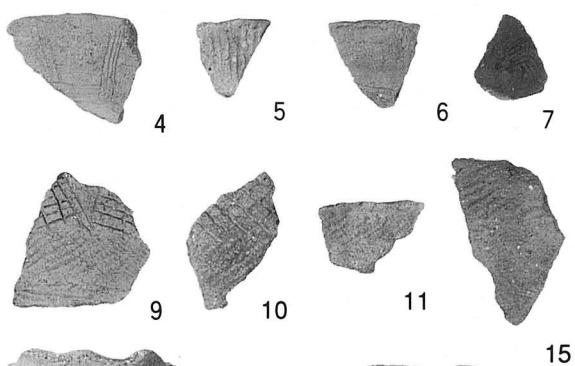
1. 5号住居跡遺物出土全景



2. 同 遺物出土近景



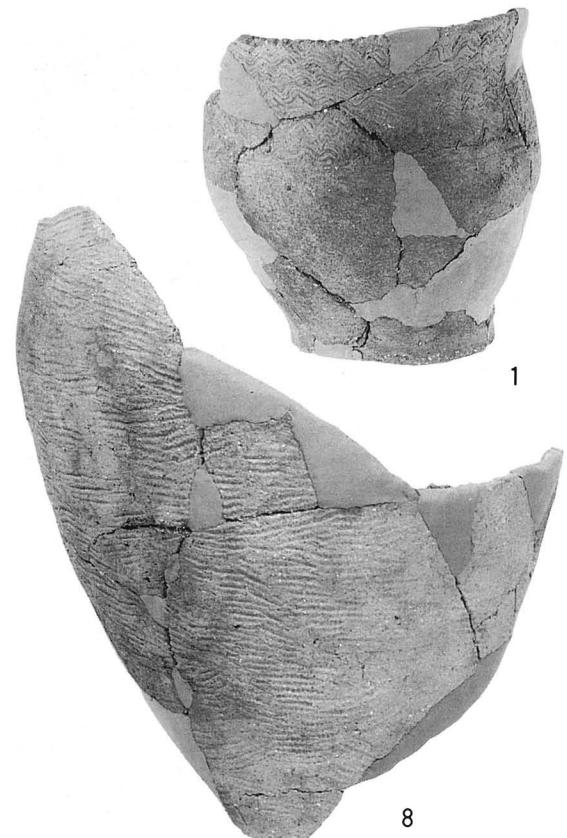
3. 同 遺物出土近景



4 5 6 7

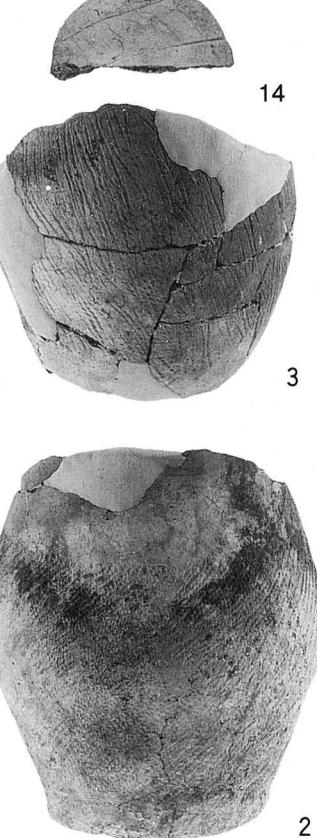
9 10 11

15



1

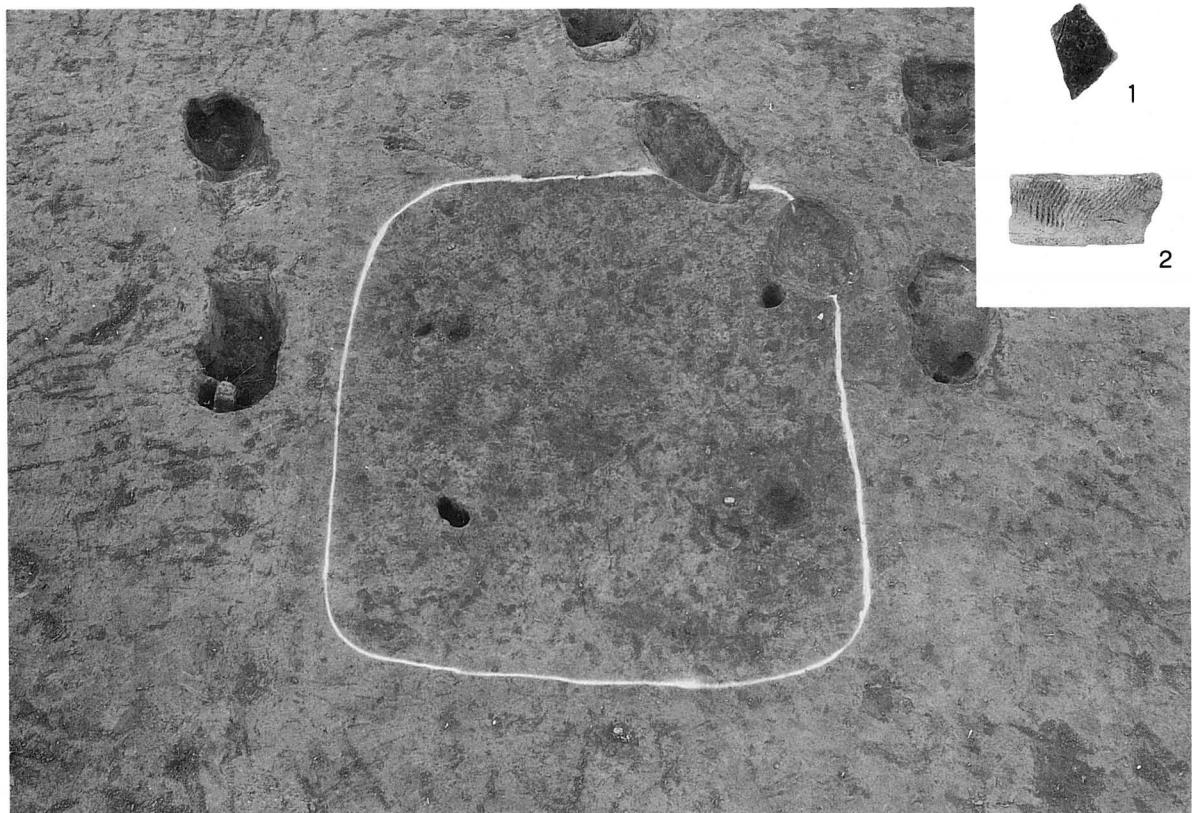
8



2

18

4. 同 出土遺物



1. 6号住居跡全景・出土遺物

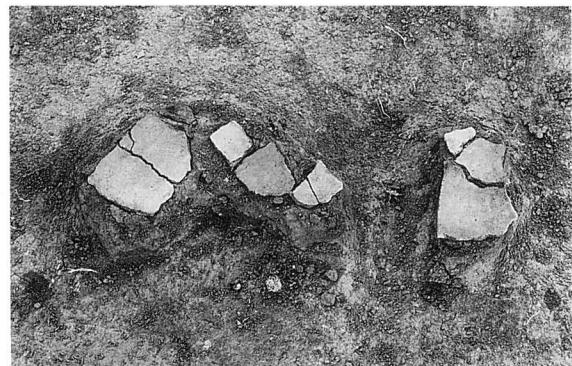


2. 7号住居跡遺物出土全景

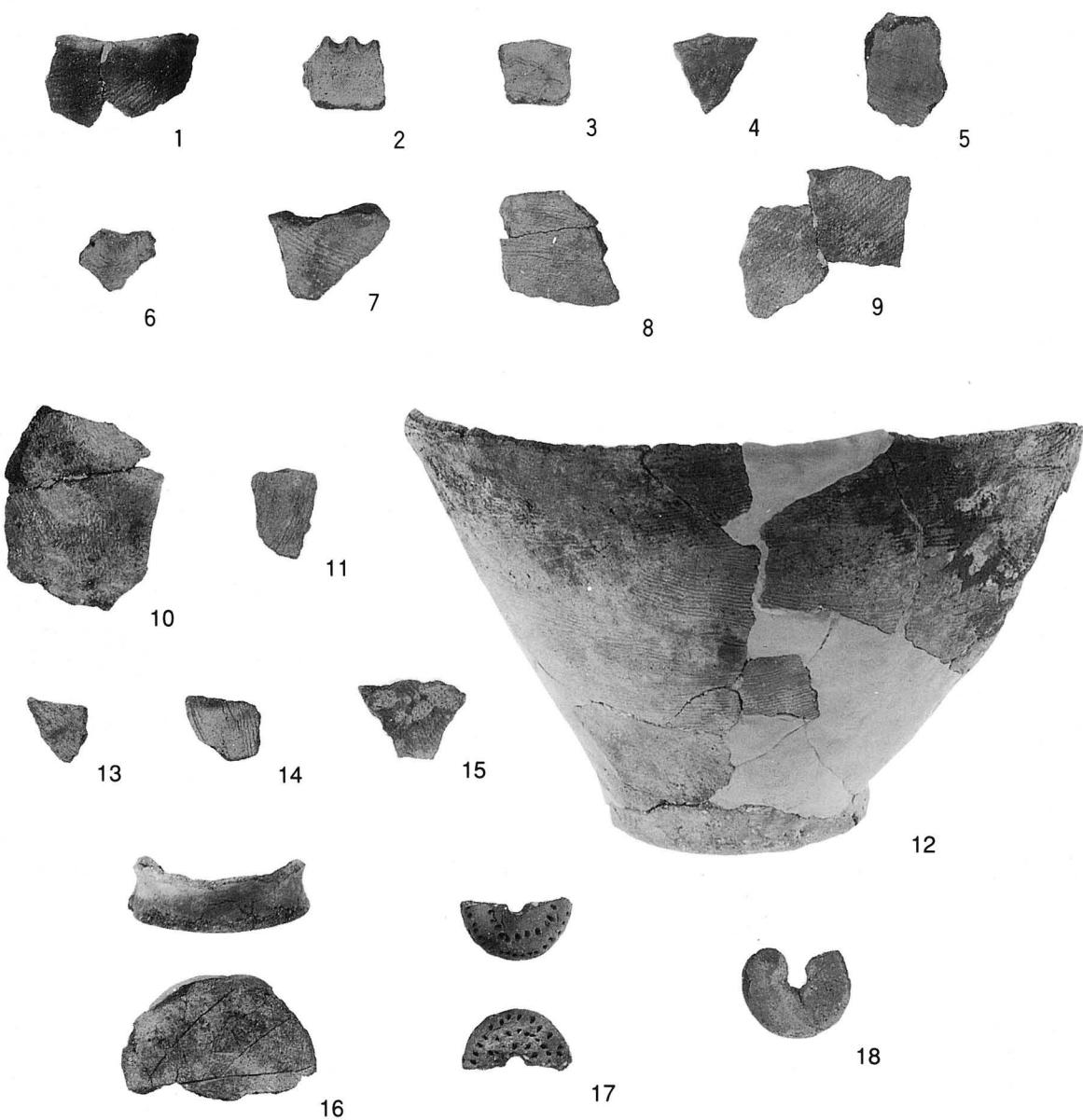
図版 14



1. 7号住居跡遺物出土近景



2. 同 遺物出土近景



3. 同 出土遺物



1. 8号住居跡遺物出土全景



2. 同 土層狀況



3. 同 土製勾玉出土狀況

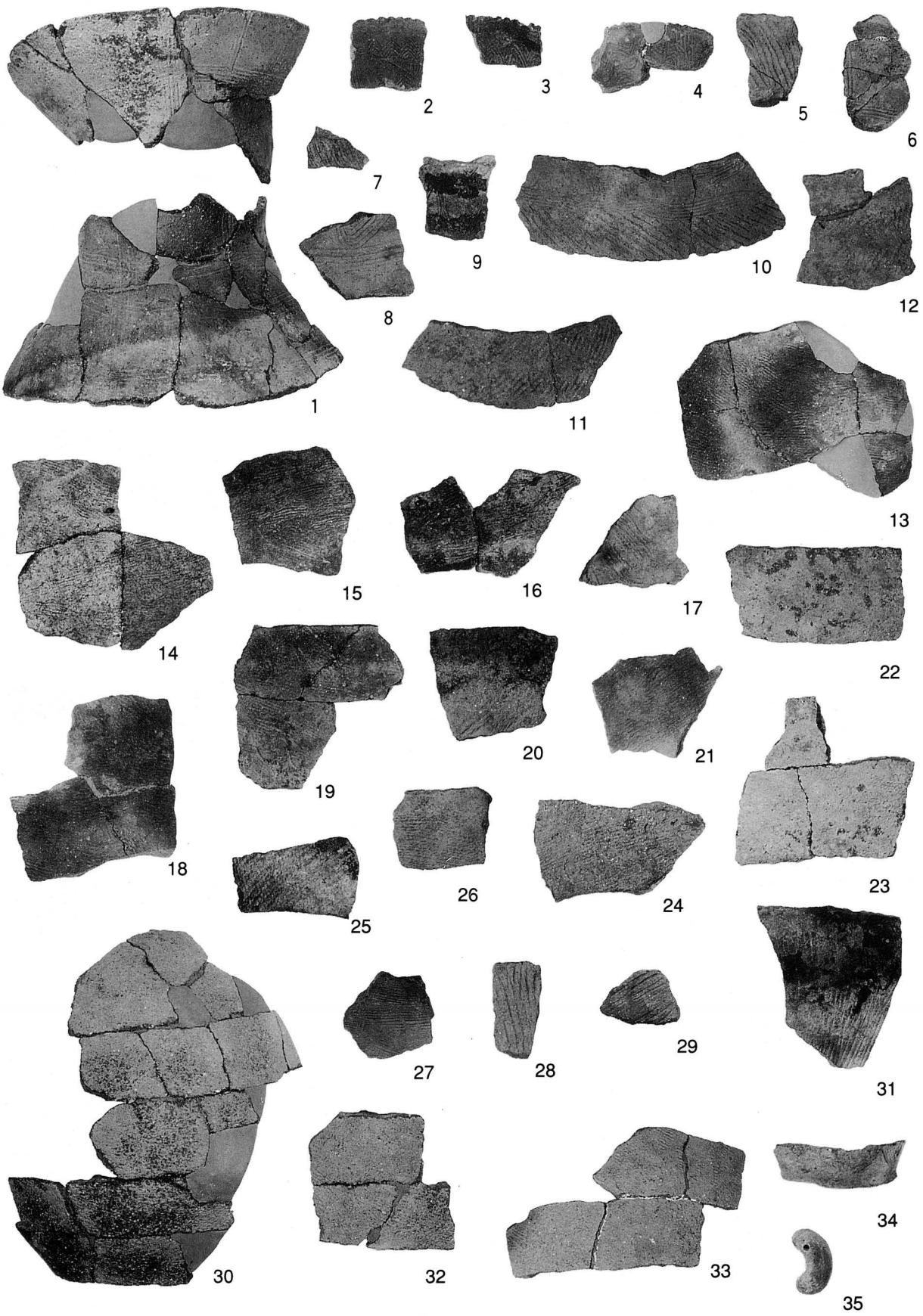


4. 同 遺物出土近景

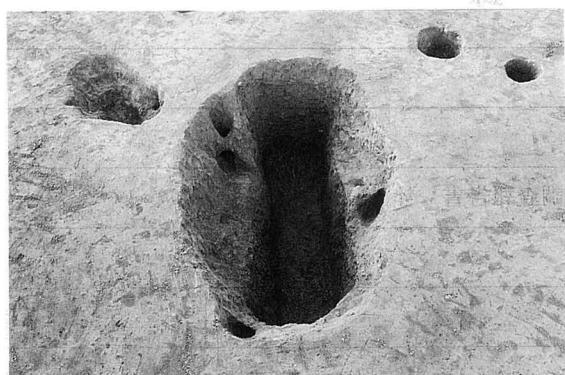


5. 同 遺物出土近景

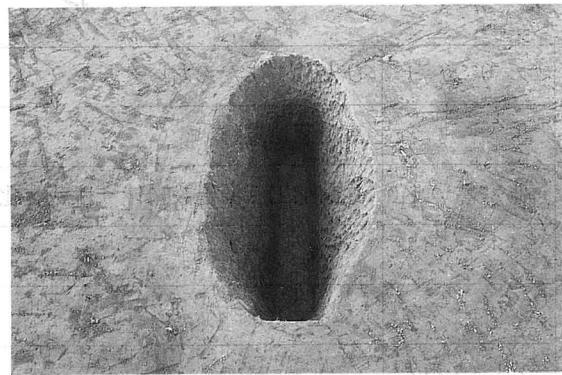
図版  
16



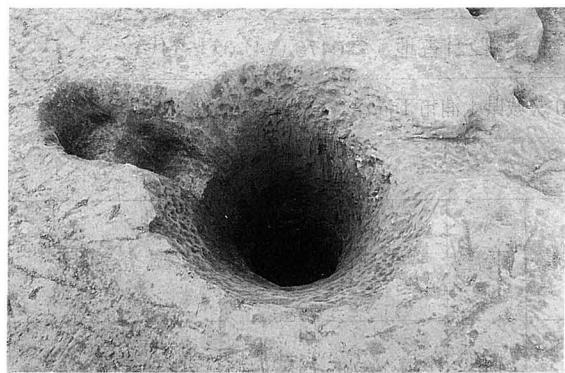
8号住居跡出土遺物



1. 1号土坑



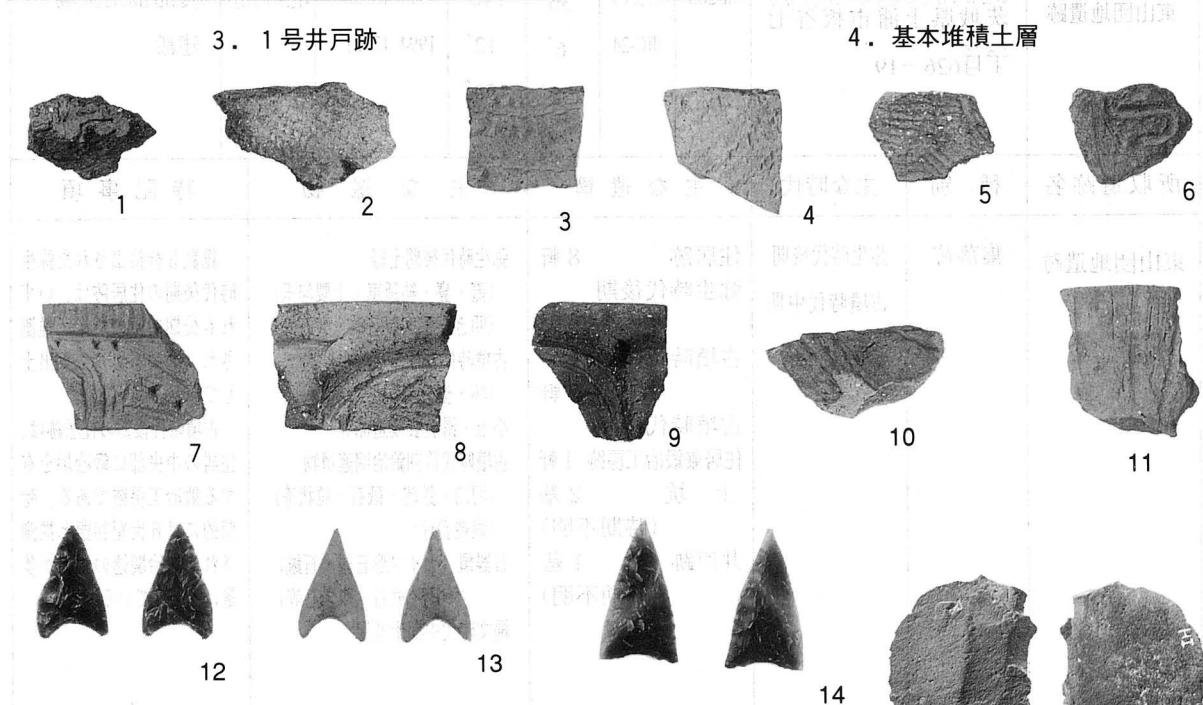
2. 2号土坑



3. 1号井戸跡



4. 基本堆積土層



5. 遺構外出土遺物

## 抄 錄

フリガナ	ひがしやまだんちいせき							
書名	東山団地遺跡							
副書名	食品加工工場建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
卷次								
シリーズ名								
シリーズ番号								
編著者名	福山俊彰							
編集機関	山武考古学研究所／〒286 千葉県成田市並木町221番地 ☎0476(24)0536(代)							
発行機関	土浦市教育委員会 土浦市遺跡調査会／〒300 茨城県土浦市下高津2-7-36 ☎0298(26)1111(代)							
発行年月日	西暦1996年2月1日							
フリガナ 所収遺跡名	フリガナ 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
市町村	遺跡番号							
ひがしやまだんちいせき 東山団地遺跡	いばらきけんつちうらしいたやなな 茨城県土浦市板谷七 ちょうめ 丁目626-19	08203	県5309 市C-24	36° 6' 30"	140° 12' 50"	1994 10 20~ 1994 12 21	4,500m <sup>2</sup>	食品加工工場 建設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
東山団地遺跡	集落跡	弥生時代後期 古墳時代中期 ~後期	住居跡 8軒 弥生時代後期 住居跡 5軒 古墳時代中期 住居跡 2軒 古墳時代後期 住居兼鍛冶工房跡 1軒 土 坑 2基 (時期不明) 井戸跡 1基 (時期不明)	8軒 5軒 2軒 1軒 2基 1基	弥生時代後期土器 (壺・甕・紡錘車・土製勾玉) (叩き石・磨製石鏃・磨石等) 古墳時代中期~後期土器 (壺・甕・壺) 小玉・滑石製模造品等 古墳時代後期鍛冶関連遺物 (羽口・鉄滓・砥石・粒状等) (鍛造剥片) 石器類(ナイフ形石器・石鏃) (剥片・磨石・叩き石等) 縄文時代中期土器片	総数5軒検出された弥生 時代後期の住居跡は、いず れも後期初頭の所産と推測 され、磨製石鏃が1点出土 している。 古墳時代後期の住居跡は、 住居の中央部に鍛冶炉を有 する鍛冶工房跡である。時 期的には6世紀初頭と推測 され、鍛冶関連の遺物が多 量に出土している。		

# 東山団地遺跡

－食品加工工場建設に伴う埋蔵文化財  
発掘調査報告書－

1996年2月1日 印刷

1996年2月1日 発行

編集 山武考古学研究所  
千葉県成田市並木町221番地  
TEL 0476-24-0536

発行 土浦市教育委員会  
土浦市遺跡調査会

印刷 (株)文化総合企画  
TEL 0476-93-0593